
「闇からの逃亡者と女子大学生探偵。」

Natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「闇からの逃亡者と女子大学生探偵。」

【Nコード】

N7209H

【作者名】

N a t u

【あらすじ】

黒の組織から逃亡した少女コードネームラム事、町原雪美。しかし彼女にはもう1つの顔があった。其れは、FBIとつるんでいる、国際警察の一員でもあった。潜入調査の為黒の組織に進入していたが正体がばれてしまいそのまま逃亡する事にそして、とある日の遊園地で女子大学生探偵である水野渚に出会うが、その時に偶然にもジン達を見掛けてしまい雪美はそのままその場から逃げそして渚は昔からの好奇心旺盛な？性格の為ジン達を追いかけてしまう。と同時に偶然にも裏方でその何かの取引を見てしまいジンに後ろから殴

られ新一と同じ毒薬を飲まされてしまう。そして彼女が目覚めると・
・・。何と彼女の体が・・？

作者からのご観覧へのご注意。 (お手数ですが必ずお読みください) (前書き)

こんばんわ。N a t u でございます。

第4部作始まりました。

基本的に、作者は組織ものしか書きません。

(他のキャラの作品をご期待頂いていた読者の皆様

がもしいらっしゃいましたら大変に申し訳ございませ

ん。何せ、組織以外・・・ネタがどうしても浮かばない

ものでして・・・汗その辺はご理解頂きますよう宜しく

お願い致します。) のでご理解とご了承頂きたい

と思います。と同時にお手数ですが、此方も

第1部、2部のオリキャラがひょっとしたら出てくる

かもしれません。ので其方も其方でご理解ご了承頂き

ますよう重ねてお願い申し上げます。

作者からのご観覧へのご注意。 (お手数ですが必ずお読みください)

作者からのご観覧へのご注意。

こんばんわ。 N a t u でございます。 当方第4部小説です。

(連載小説は第3部ですが、短編も数に含んでおりますので。)

毎回で大変に恐縮なのですが、作者は基本的に組織のみの作品しか書きません。

と同時にこちらもしかしたら残酷な？シーンが入るかもしれません。

5

そして、原作の24巻部分等もひょっとしたら入るかもしれません。

(と申し上げても、オリキャラになる可能性もあります。)

この作品にも第1部と2部でのオリキャラも出る可能性も否定できません。

（また）注意書き追加が遅くなりまして申し訳ありませんが・・・後半からはジャンル違いですが

「銀魂」の現代風で今のところ高杉さんのみを追加させていただいております。

（場合によっては・・・他のキャラも出す予定あり）

よって、オリキャラ、オリストが苦手な方、また残酷シーンが苦手な方のご観覧は

大変に申し訳ありませんがご観覧しない事をお勧めいたします。

それ以外の方は是非最後までお付き合いの程宜しくお願い致します。

尚、苦情等は此れまでの作品同様に一切お受け出来ませんのでその辺もご理解とご了承

頂きたいと思います。また、評価、感想の方は此れまでの作品同様にお手柔らかにお願い致します。

ます。其れでは、どうぞ最後までお楽しみください。

作者からのご観覧へのご注意。(お手数ですが必ずお読みください)(後書き)

第4部も第1部、2部同様にお楽しみ頂ければと

思います。と同時に、作者・推理場面が書けるか

どうか不安ですが、其れなりに頑張って書かせて頂き

ますので(何せ、探偵で推理入りは此れが恐らく

初だと思しますので・・・汗)評価等はこの連載

2作品同様にお手柔らかに宜しくお願い致します。

尚、先程にも似たような事書かせて頂きましたが

苦情等は一切お受け出来ませんので予めご了承

ください。

其れでは、どうぞ作者の‘闇の世界へ’。

第1章。プロローグ。（前書き）

第4部始まりました。今回も組織ものです。

連載中の2部作と同様にお楽しみ頂ければと思います。

第1章。プロローグ。

私の名は、町原雪美。年齢は21歳。黒の組織に所属していた。

勿論。コードネームも貰っている。

コードネームはラム。だが、本当の正体はFBIとつるんでいる国際警察の一員だった。

しかし、ある日にジンに潜入捜査していたのがばれてしまい。

目を盗み組織から逃げ出した。

そして、時が経ち、私はとある遊園地であの女子大学生探偵と出会う事となる。

が、案の定、ジン達も其処に居た。

私は彼女と少し話した後その場をジン達にばれない様にその場を素早く後にした。

しかし、此れが、彼女の、本当の姿、が見れるのが、最後、になるとは

‘夢にも、思っても見なかった。

と同時に、日が経つにつれて、あの町、で偶然にも、小学生組み、
を見つける事となる。

そのグループの中に妙に大人びた？小学生が3人居た。

そう・・・。

其れは、その・・・彼女、と・・・

偶然にも、彼女、と同じ妙な、事に巻き込まれてしまった。

少女と青年の、小さな姿、だった。

まさか・・・。

私は、後からその少女達の、正体、を知る事となる。

しかし、それはあまりにも、危険な賭け、でもあった。

私も、一応、組織に、いたから組織の、恐怖、については知っているつもり。

だけど・・・。

その青年は、‘自分の本来の姿’を取り戻す為に組織と戦う決意をすでにしていた。

そして、彼は私にこう言ったの、逃げてばかりじゃ何も変わらねえだろ？、

と続け様に、お前も確かに、‘組織の人間’だったが、‘今は違う、

‘戦わないといけねえよ。奴等が存在する限り・・・お前も’平和に暮らしていけねえだろ？、

だから、‘自分の運命から逃げるんじゃないぞ’、と真剣な眼差しで私を見て言った。

その時から、私は、組織に追われつつも一応、今でも国際警察の一員でもあるから

‘戦おう’と決意した。

勿論。国際警察にも一応知らせてあるよ。

じゃないと、仲間達に心配されてしまうからね。

さて、私の話は此れにて一先ずお仕舞い。

次にあの女子大学生探偵が登場するはずだから・・・。

彼女の話も是非聞いてね。

じゃ・・・私は一先ず此れで・・・。

第1章。プロローグ。完。

第1章。プロローグ。（後書き）

今回もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章では・・・その女子大学生探偵について

書かせて頂きたいと思います。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

また、私信で大変に恐縮なのですが・・・

コナン様。初めまして。この度はご指摘メッセージ

有難うございます。メッセージが返信出来なかったの

で此方で返信させて頂く事をどうぞお許し下さい。

確かに・・・連載中の小説2作ありますが、

初短編が完結し、また・・・作者自体がネタ等が浮かん

だら即忘れないうちに書いて置かないといけ
ない
と言う癖みたいなのがありました・・・。

その辺はその辺でご理解頂きたいと思
います。

また、連載中の残り2本も完了には時
間が掛かる
と思いますが、ちゃんと完結を目指して書か
せて

頂いておりますのでその辺もご理解頂
きたいと思

います。もし、誤解させてしまいましたら
大変に申し訳

ありません。ですが、放置しておりませ
んので

その事にご理解ご了承頂きたいと思
います。

この度はご指摘メッセージ本当に有難
うございます。

作者も作者で・・・至らない部分もあ
ると思いますが

1つの作品に集中してしまうと・・・どうも？

と言う個人的な考えでありまして・・・

ゆっくり今日はこの作品・・・そしてまた次はこの作品

と決めて更新して行きたいとも思っております。

お初なのに長文と乱文で大変に失礼致しました。

第2章。女子大学生探偵水野渚。（前書き）

今章は、女子大学生探偵水野渚からのご挨拶みたいな
ものです。

第2章。女子大学生探偵水野渚。

初めまして！皆さんっ！

私の名は、水野渚！こう見えても一応、米花女子大学の国文科に通う4年！

で年齢は早生まれなので・・・21歳っ！

そして、一応女子大学生探偵と言う肩書きも持っている。

といっても、肩書きだけど・・・。

と言いつつね・・・私あの高校生探偵工藤新一の相棒も一応していた訳なんだけど・・・

その相棒が、ある日を榮えに幼馴染の毛利蘭ちゃんって子と一緒にトロピカルランドに

行っただけり消息を絶った。

そしてねある日に、その時から妙に頭のさえる少年と出会う事になった訳なんだけど・・・

其れがどっこの何と私の相棒である新一にそっくりなんだ！

何と、訳を聞いたら新一本人だった！！

それはそれでかなり驚いたと同時に・・・。

前にね、黒の組織と言う組織から逃げ出した少女と出会った町原雪美さんを追う

黒の組織のメンバーを追っていると言う。

sonde 彼女の話を聞いていると・・・何とその組織に潜入捜査で入った国際警察の一員だと言う

事を聞いて更に驚いた。

と同時に私と彼女が出会ったのも偶然にもその新一達が行ったトロピカルランドって

訳。そして・・・・。その日に黒の組織のジンとウォッカって奴等を見かけて

町原さんはその場から逃げたけど・・・案の定私は昔から好奇心旺盛？な性格でね

何処にでも首を突っ込みたがるタイプなのよ。

そして、そいつ等の後を追って裏路地に行ったら何とある、取引、
を目撃して

しまった訳！！

此れはさすがに不味いと思った私は忍び足でその場から逃げ様とし
たその時に

取引をしていたはずのジンに見つかり思いっきり棒で殴られ・・・。

倒れこみ新一と同じ毒薬を飲まされてしまい・・・

その影響でな・・・何と！！

新一と同じく体が縮んでしまったのよ!!

其れから私は、新一と同じく偽名を碓真弓いかりまゆみと名乗って阿笠博士の所に

居候させてもらう事になった。

何で碓真弓と名乗ったかって？ ああ。此れね私の母方の従姉の苗字が碓だったの・・・。

もう、随分昔かな？ 死んじやったけど・・・。

んでもって・・・真弓と言うのは、うちの母も新一のお母さんと同じ元女優。

その女優名が真弓だった訳。勿論此れはお母さんも知っているわよ。

。 後、お父さんもね。やっぱり・・・両親にはちゃんと知らせないと・・・

ね。という訳で、私は帝丹小学校の一年生として編入する事になったんだけど・・・。

此れがまたねある意味面倒なのよ笑。

新一や・・・もう1人の子哀ちゃんの気持ちが無となく分かった気がするわ。

あ・・・早々。勿論。小学生のクラスメイトの前では新一の事ちゃんとコナンって呼んでいるよ

。 だって・・・ばれたら不味いもの。

組織は・・・新一や私が死んだ事になっているからね。

さて・・・お次の話は、その私が小学生になってからのお話よ。

次章もどうぞ宜しく。

第2章。女子大学生探偵水野渚。完。

第2章。女子大学生探偵水野渚。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は渚が小学生になってからの事を書かせて頂く予定です。次章も今章同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

渚「あら・・・。私も小さくなったのねー！」

コナン「お前のその好奇心のせいだぞ？」

と笑い。

渚「其れは、あんたも人の事言えないじゃん！！」

コナン「ハハハッ」

哀「次章もどうぞ宜しくね。」

第3章。水野渚事、碓真弓帝丹小学校に転入。（前書き）

今章では、渚が碓真弓としてコナン達の居る小学校

に転入してきます。長丁場になっておりますので

ご了承くださいと思います。

第3章。水野渚事、碓真弓帝丹小学校に転入。

此処は、阿笠家。

1人の少女が小学校に行く準備をしていた。

「はぁ・・・。何でまた、小学生からやり直しのよ。」

その事を聞いたその少女の隣に居た赤紙の掛かった茶髪の少女が「仕方ないじゃない？」

だって、貴女が生きている事組織に知られてしまったら。周りの人間に危害が及ぶんだもの。

だから、貴女は私や工藤君と同じ様に彼等が潰れるまでと言った方が良いのかしら？

小学生を演じなきゃいけないんだから。」

彼女の名は灰原哀事、本名宮野志保。組織に居た元科学者で、コードネームシェリ。

組織にたった1人の身内であつた姉宮野明美を組織に殺されてしまい組織から逃走。

今も、ラム事町原雪美同様に組織に追われている身。

「・・・へい。へい。」

哀「まあ・・・貴女の場合は、自業自得、なんでしょうけど。」

其れを聞いたその少女は「うわっ！其処まで言う？私だって知らなかったんだからさ。」

とショックを受けた。

と同時に彼女は碓真弓事、本名水野渚。あの高校生探偵工藤新一の相棒である女子大学生探偵

だ。（彼女が何故こう小さくなったのかは前章でどうぞ。）

すると、1人の小太りの白衣を着たおじさんが入ってきた。

「準備できたかね？真弓君？」

真弓（渚） 「ええ。何とかね。博士。」

この男は阿笠^{ヒト}博士。

新一達の正体を知る人物である。

阿笠 「じゃ・・そろそろ時間じゃから。哀君。真弓君を学校へ連れて行ってくれるか？」

哀 「ええ。分かったわ。」とランドセルをしょいながら真弓を見て

「じゃ・・行きましょ？ 碇さん。」

真弓もランドセルしょって「ええ。」

そして2人とも「行ってきます。」

そう言い学校に向かった。

一方、此処は帝丹小学校。

の1－B組

此処では此処のクラスの生徒である仲良し3人組が話をしていた。

「ねえねえ。聞いた今日転入生がくるんだって。」

「マジかよ。」

「転入生って言ったらコナン君や灰原さん以来ですね。」

そして、コナンが教室に入ってきて自分の席にランドセルを置いた。

すると、「あ、おはよう！コナン君！」

コナン「おう！おはよう！歩美ちゃん、元太、光彦。」

そして元太と呼ばれた少年が近づき「なあ、コナン。転入生が来るんだってよ!」

コナン「ああ。その転入生俺の知り合いでな。丁度・灰原が連れてくると思うぜ。」

光彦「そうだったんですか。」

歩美「どんな子だろう。楽しみ♪」

すると此処のクラスの担任である小林先生が転入生である碓真弓を哀と共に連れて来て

教室に入って行った。

生徒全員「か・・・可愛い！」

小林「はい。今日から皆と一緒に勉強する事になった碓真弓さんです。仲良くして

上げてね。」と続け様に「じゃ・・・碓さん。自己紹介してくれる。」

真弓「はい。先生。今日からお世話になる事になった碓真弓です。どうぞ宜しく。」

そして、小林辺りを見渡し「え」と。碓さんの席は・・・。」

真弓「あの・・・先生。もし良かったら江戸川君の前の席行っても良

いですか？」

小林コナンの前の席が空いている事を確認し「ええ。良いわよ。」

と続け様に「灰原さんも有難うね。」

哀「いいえ。」

そう言い、真弓は哀と共に自分の席に着いた。

そして、1時間目が始まりそして・・・一日の授業が終わって掃除の時間も終え帰り支度を

皆がし始めた。

すると、歩美が「ねえ。碇さん。」

真弓「何？え・・・と。ごめん。貴女名前は？」

歩美「ああごめんね。私、吉田歩美。宜しくね。」

そして、元太「俺、小島元太。宜しくな。」

光彦も「僕、円谷光彦と言います。宜しく。」

真弓「吉田さんに、小島君に円谷君ね。改めて碇真弓よ。宜しく。」

歩美「良いよ。下の名前で呼んでも。」

と続けて元太も光彦も自分の事は下の名前で呼んでも構わないと言った。

真弓「じゃ・・・お言葉に甘えてそうさせてもらおうかな。私の事も真弓で良いよ。」

そして、真弓は歩美達の少年探偵団に入る事となった。

しかし、今日は依頼0の為博士の家に行きゲームをする事にした。

下校途中。

歩美「へえ。じゃ、真弓ちゃん。博士の家に哀ちゃんと。」

真弓「ええ。そうなの。博士と私がたまたま遠い遠い遠い親戚だね。」

その関係上身寄りの無い私を居候させてもらっているという訳。」

光彦「成る程。」

と続け様に「コナン君達とは何処で知り合ったんですか？」

真弓「博士の家でたまたま知り合ったのよ。」

と続け様に心の中で

新一と私は探偵コンビだって事言えるかって言うの。

そして、辺りを見渡して元太「なあ……。今日はカラスがやけに、多くねえ、か？」

光彦も「そうですね。多いですね。」

歩美「しかも黒猫も通っている。」

真弓

カラス……。???

そして・・・黒猫？？

ま・・・まさか？！

一瞬脳裏に出たのはジンとウォツカ。

まさか・・・‘奴等が’？！

そして光彦が行き成り「皆！見てください！国道の所に珍しい車かとまっていますよ。」

其れを聞いた歩美達は見て「あゝ本当だ！凄い！黒の車！！」

しかし、コナンと哀そして真弓は違った。

コナン小声で「おい！灰原！」

哀小声で頷き「ええ。アレは多分間違いなく黒のポルシェ356A。」と続け様に

「ジンの愛車だわ。」

真弓其れを聞いて顔色が一斉に悪くなった。

と同時にコナン、歩美達に「おい！皆！その車に近寄るなッ！さっさと博士の所に

行こうぜ！！」

元太「何でだよ？」

コナン「その車の持ち主多分、やばい奴、かもしれねえからよ。」

と同時に「碇の奴の様子がさっきからおかしいから・・・。」

光彦「分かりました！歩美ちゃん！元太君！行きましょう。」

歩美と元太は頷きそしてコナンは歩美達を連れてさっさとその場を
離れ博士の家に

向かった。

そして、反対車線から全身黒ずくめの男達が渡って来た。

1人は銀色の長髪のやせた男。

もう1人はがたいの良いサングラスをかけた男。

その銀色の長髪の男が小学生組みを見た。

その中に水野渚事碇真弓が居たのを目撃する。

「ん？あの小娘・・・。」

そう言い死亡したはずの水野渚の写真をコートの中から取り出し碇真弓と照らし合わせる

すると思った以上に、似ていた事、が分かりその男はニヤリと笑い「もしかして・・・。」

奴は？」と呟いた。

そのがたいの良い男が「ジンの兄貴？どうかしたんですかい？」

ジンと呼ばれた男は「昔俺がばらしたはずの小娘と、似たような小娘、が

いたと思ってな。」と続け様に「そろそろ行くぞ。ウォツカ。」

そう言い黒のポルシェに乗り込みその場を後にした。

そして、ジンは小学生組みを運転しながら見ていた。

すると、真弓と一瞬目が合った。

真弓、ジンを見ると再び青ざめた顔色をした。

ジン其れを見てタバコに火を灯しニヤリと笑った。

そして、黒のポルシェは走り去って行った。

第3章。水野渚事、碓真弓帝丹小学校に入学。完。

第3章。水野渚事、碓真弓帝丹小学校に転入。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はコナン達が博士の家に行った所を

書かせて頂く予定です。其れでは次章も今章

同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

真弓

・・・なんなのよ。さっきの‘悪寒’は。

と続け様に「次章もどうぞ宜しく願います！」

第4章。少年探偵団。阿笠家に集合。（前書き）

今章では、最初の方は少年探偵団のやり取り。

そして後半は・・・真弓とその唐沢裕子事

町原雪美のやり取りです。

雪美の偽名は・・・単なる思い付きです（笑；）

第4章。少年探偵団。阿笠家に集合。

アレから学校から下校して来た少年探偵団達。

そして今は阿笠家でコナンと哀そして真弓を除く3人がゲームしていた。

元太「おい！コナン達もやろうぜ！」

コナン「あ・・・悪い！今ちよつとな・・・。」

そう言い真弓の様子を見て小声で「おいおい・・・大丈夫か??？」

真弓小さく頷き「う・・・うん。大丈夫さ。ごめん。コナン。」

すると哀小声で「ねえ・・・江戸川君。」

コナン「ん？」

哀「碓さん。ジンの愛車を見てからずっと、こんな調子ね。」

コナン頷き小声で返して「ああ。下手すれば・・・ジンの奴、勘が良
いから、」

「気づいている、だろうぜ？」

すると、光彦「あ・・・あの。さっきから2人とも、小声で何話して
いる、んですか？」

コナン笑いながら「あ・・・ああ何でもねえよ。こっちの話さ。」

哀「そうよ。何でもないわ。」　　「そう言いソファーに座りファッション雑誌を読み始めた。」

光彦「そうですか。」と続け様に「碇さん。」

真弓「な・・・何???」

光彦微笑んで「気晴らしに一緒にゲームしましょうよ。」

真弓「・・・ごめん。今は、そんな気分にならないのよ。」

と続け様に「博士。私、部屋に居るから。」

阿笠「分かった。」

と続け様に「ごめんね。皆。どうぞごゆっくり。」

そう言い宛がわれた自分の部屋に向かった。

真弓「・・・まさか。下校途中に・・・。」

真弓の脳裏には先程のジンの不敵な笑みが過ぎっていった。

あの様子だと・・・もしかして、ジンは私の‘死’に疑問を持ち始めている??

すると、携帯が鳴った。

真弓ディスプレイを見て「町原さんからだわ。」

真弓「はい。」

町原「あ・・・渚さん? 久しぶり。」

真弓「町原さん。久しぶり。あ・・今は碇真弓と名乗っているの。

だから其方で呼んでくれる?？」

町原「あ・・ごめんね。真弓さん。」

と続け様に「私も今、偽名を使っているの、唐沢裕子、ってね。

だから・・もしかしたら今でも組織は私を血眼になって探しているから。

その方が賢明かな?」と思ったの。」

真弓「じゃ・・唐沢さんって呼んだ方が良いかしら?」

唐沢（町原） 「ええ。悪いけど・・・今はね。」

真弓 「了解したわ。」 と続け様に 「今日の下校途中にねジンの愛車である・・・」

黒のポルシェ356Aを見かけたわ。」

唐沢其れを聞いて驚いて 「じゃ・・・、彼は・・・。」

真弓頷き 「ええ。この米花町に、潜んでいる、という可能性があるって事よ。」

と続け様に「取り合えず、貴女は此処から、離れた方が、良さそうね。」

今でも、彼は貴女の事、彼女同様に、血眼になって探しているだろうから・・・。」

唐沢「・・・了解。で？貴女はどうするつもり？？」

真弓「私は、居場所ないから、此処に留まるつもり・・・。」危険、だけどね。」

唐沢「そう。でも、何かあったら・・・。また連絡頂戴。FBIにもそして・・・」

国際警察（うちの所）に言って置くから。」

真弓「有難う。では・・・。」

唐沢「ええ。」　　「そう言い携帯を切った。」

そして・・・外は雪がいつの間にか雪が降っていった。

第4章。少年探偵団。阿笠家に集合。完。

第4章。少年探偵団。阿笠家に集合。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・真弓の事について書かせて頂く

予定です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

真弓「いやはや・・どうなるのかな?。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく願いしますね!」

第5章。水野渚事碇真弓の心境。（前書き）

今章は、主に真弓の心境についてです。

最後には少しですが、ジンの兄貴様も出てきます。

第5章。水野渚事碓真弓の心境。

アレから真弓は、町原雪美事唐沢裕子との話を終えずと部屋に閉じこもっていた。

真弓「・・・・・・・・。」

下校途中でジンの愛車黒のポルシェ356Aを見た。

そして、ジンはウォッカと共に乗り込みそして私達を・・・いえ正しくは、私、を

見てニヤリと笑った。となると・・・本当に本当にジンは・・・？

‘私の正体が水野渚、だって事に、勘付いている、？’

もし・・・もし・・・そうだったらそうだったら多分・・・。

皆が危険に攫われる。

其れだけは、言える。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう。

新一は、戦う、つもりだけど。

私は、新一みたいに其処まで、強くない、。

皆を置いて、逃げる、？

でも・・・。

其れは・・・。

‘自分の運命から逃げる事’。

そして、真弓はベットの上に寝転んだ。

すると、一瞬物凄い‘悪寒’に襲われた。

真弓は慌ててベットから飛び上がり辺りを見渡した。

だが、其処には‘誰も居なかった。’

そして、真弓窓側に急いで走って行った。

すると「!!!!!!!!!!」

真弓の顔が再び青ざめた。

其処には下校途中で見た黒のポルシェ356Aが止まっていた。

そして、運転席からジンがタバコを吸いながら真弓の方をジッと見ていた。

真弓は慌てて窓側から離れてカーテンの所に隠れた。

そして・・・。

な?! 何で?! 此処にジンが居るの?!!

ま、まさか・・・?!!

そしてジンニヤリと笑い「やっと、会えたな、？碓真弓。いや・・・
‘水野渚’。」

と真弓の部屋を見て呟いた。

第5章。水野渚事碓真弓の心境。完。

第5章。水野渚事碇真弓の心境。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章も多分真弓について書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

真弓「・・・・・・・・・・。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

第6章。真弓の闇の夢。(前書き)

おはようございます。今章はですね……。一応

24巻とアニメを下に少しだけ個人的にアレンジ？

してみました。何せ……。管理人……

24巻とアニメ版の黒の組織との再会？が

好きなもので(笑；；) その辺はご理解とご了承

願います。

第6章。真弓の闇の夢。

アレから時間が経ちコナンを含む少年探偵団達はそれぞれの家に帰り、真弓は哀達と夕飯を

済ませ明日の支度をしてお風呂は入って寝た。

そして、夢を見る。とてもとても嫌な夢を・・・。

とある日の下校時外は雪・・・。

何時もの様に真弓は少年探偵団のメンバーと共に家路に付く為米花町の歩行路地を歩いていた

。

元太「これからサッカーしようぜ！」

光彦「そうですね！そうしましょう！」

元太「俺キャプテンな！」

光彦「え〜！またですか？」

そして元太両手を広げて回りながら「おい！見たかよ！昨日の試合？」

と続け様に「凄かったな！」

コナン「ああ。ヒデのオーバーヘッドキックだろ？」

すると、黒猫が路地裏に入って来て真弓を見ていた。

「……戯言は終わりだ。」

少年探偵団組はそのまま黒のポルシェの所を横切る。

光彦「アレは、芸術的でしたよね。」

歩美「ヒデってかっこいい〜!」

哀「……そうね。彼、凄いと思うわ。」

真弓は黙って聞いていた。

そして……黒のポルシェの中。

ミラーを少し動かしながら

「さあ・・・夢から醒めて再会を祝おうじゃないか。」

そしてグレー色の瞳が真弓を見る。

そして口元をニヤリとしながら「お前の好きな赤いカーネーションの様に・・・真っ赤な血の色

で・・・」

ガチャリ。

ジン「なあ……？水野渚……。」

真弓人の気配を感じたのかゆっくりと振り返り「な……？！」

その声は吹雪によってかき消され……。

ベットからいつの間にか起きていた。

真弓「ハアハアハア……。」

そして頭を抱えながらフツと苦笑いをして「……嫌な夢だな。」

でも・・・。

どうして？

こんな、夢、見る様になってしまったんだろう？

ああ・・・そうだ。昨日だ！

昨日・・・ジンの愛車である黒のポルシェ356Aを見てからだ。

それに・・・何で？私？

奴の狙いって・・・。

はあ・・・もう、良く分からない’。

アレから・・・真弓は寝付けなかった。

そして気が付くと朝になっていた。

この夢が真弓の、漆黒の闇の人間との、再会の前兆になるとは誰も
、夢にも思っても

見なかった。
、

第6章。真弓の闇の夢。完。

第6章。真弓の闇の夢。(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

此方は久々の更新となります。

お待たせをして申し訳ありません・・・。

さて、次章は・・・真弓がジンの兄貴様方と再会

する所を書かせて頂く予定です。

此方も多分・・・24巻とアニメ版を混ぜて

書かせて頂く予定となっております。

其れでは、次章もどうぞ宜しくお願い致します。

オマケ。

真弓「・・・・・・・・。」

コナン「・・・碇？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第7章。真弓黒の組織との再会。(前編。)(前書き)

本日2度目の更新となります。

今章は長丁場となっておりますご了承ください。

(24巻とアニメ版を一応下に前章みたいに

少しアレンジしてみました。今章は多分・中編

と後編に分けさせて頂く予定です。)

第7章。真弓黒の組織との再会。（前編。）

そして、アレから真弓は何時もの様に学校に行った。

すると、光彦が元太と共にやって来て「おはようございます。碇さん。」

真弓「おはよう。」

そして、光彦1枚のディスクを真弓の所に出して「はい。お借りしていたMO。」

博士に伝えておいて下さい。今度のゲームは期待以上でしたと。」

真弓微笑みながら光彦からMOを受け取り「はいよ。伝えとく。」

元太両手を後ろに回しながら「ボスキャラはいまいちだったけどな・

・。
」

光彦「でも、この前のゲームよりかはマシですよ。」

すると歩美窓を見て「うわぁ〜!」そして元太達を見て「見て! 雪だよッ! 雪ッ!」

と笑顔で言った。

其れを聞いた元太達も喜んで窓の所に行く。

真弓「・・・雪。」

そして、昨日見た、悪夢を思い出す。

ジン「・・・再会を祝おうじゃないか。」

その、悪夢、を思い出してしまい。

ジン「お前の好きな赤いカーネーションの様に・・・。真っ赤な血の色で・・・。」

と続け様に「なあ・・・？水野渚。」

すると歩美が真弓の腕をつかんで「ほら！真弓ちゃんも一緒に雪を見ようよ。」

と誘って来たが・・・。

真弓「わ・・・私に触らないでッ！」

と怒鳴ってしまった。

その様子を慌てて元太達が見ていた（哀とコナンを除いて）。

歩美「・・・ま。」

光彦「真弓さん？」

真弓「・・・もう、うんざりだ。こんな所・・・今でもすぐに消えてしまいたいくらいさ。」

まあ・・・嫌でもその内ねそうなると思うけど・・・。」

その事を聞いて歩美「えゝ！真弓ちゃん！転校しちゃうのゝ？！」

真弓「へ？」

光彦「もしかして、誰かにいじめられているんですか？」

元太「もし、そうなら俺がやつつけてやつからよ!」

歩美涙浮かべて「だからいなくなるなんて言わないでッ!」

真弓フツと笑い歩美の肩をそっと持ち「冗談だよ。冗談。少し風邪
気味だったから」

イラ付いていただけ・・・うつしたくないからね。」

元太「何だ・・・風邪かよ。」

光彦「人間、病気になる弱気になると言いますしね。」

歩美微笑んで真弓の背中を両腕で押しながら「ささ・風邪引きさん
は保健室！保健室！」

一方、コナンと哀は只黙って真弓の様子を見ていた。

そして、下校の時間。

何時ものメンバーで下校していた。

元太達「ゆーきやこんこ♪あられやこんこ♪」

そう歌いながら雪合戦をして遊んでいた。

後ろには真弓とコナン、哀が居た。

真弓は浮かない顔をして少しうつむいていた。

コナンサッカーボールを蹴りながら「此処は、自分の居るべき場所じゃない。」

真弓「え？」

コナン「あの子達を、巻き添えしない為に、自分がさっさと消えなければ・・・。」

なあんで、下らなねえ事考えているんだろう？」

真弓黙ってコナンを見ていた。

そしてコナン微笑んでサッカーボールを再び蹴りながら「大丈夫！
薬で体が縮んだって

夢物語誰も信じやしねえよ。ばれない為にもこのまま俺達は、子供
を演じ続けなきゃ

いけねえんだ。」

そして哀「その日が来るまでね。」と続け様に「大丈夫よ、
もし、不味くなりそう

だったら微力だけど私も工藤君と一緒に、何とかしてあげるから。
」と微笑んだ。

そして、横断歩道。

元太「じゃーな！」

光彦「また明日！」

歩美「バイバイ！」

コナン「おう！」

哀「また明日ね。」

真弓

・・・また明日。か。

そして、コナンと哀を見ながら。

新一。哀。

あんた達何も分かつちやいないのね。

あんた達でどうこう出来る、相手じゃないんだよ、？

隙を見せたら最後組織は私達を、逃がさないよ、。

下手すれば・・・今この町のどこかにも・・・。

すると真弓「!!」

黒のポルシェを見かけ真弓驚きながら固まった。

コナン「何だ？あの黒のポルシェがどうかしたのか？」

と続けて黒のポルシェを見ながら「ポルシェ356A。50年前のクラシックカーだ。」

そして黒のポルシェの運転席のドアに両手をつけて「持ち主は出かけていねえみてだな。」

テレビや本でしか見たことねえけどいるんだな。乗っている奴。」

真弓「・・・ジン。」

コナン「え?」

真弓「ジンの愛車もこの、車、なんだよ。」

コナン「・・・ジンッだと?!!」

と続け様に哀を見て「灰原! 本当か?!!」

哀頷いて「ええ。確かにジンの愛車はその車だわ。」

真弓

そう。‘夢にまで出たこの車。’

そしてコナン電話を取り出し急いで博士の所に電話をかける。

真弓「あ・・・ちよっ！ちよいと！」

コナン「あ！博士か？！俺だ！今から言うものを持ってすぐに4丁目
目の交差点に来てくれ！」

説明は後だ！急いでッ！」

そしてしばらくすると博士がやって来て「おい！」

コナン素早く博士のビートルに走って行き「例の物持って来てくれたか？」

博士「ああ。ハンガーとペンチ。じゃが・・何に使うんじゃない？こんなもの？」

すると、コナン無言のまま博士からハンガーとペンチを受け取り小走りに

黒のポルシェ356Aに近づいた。

そしてペンチでハンガーの先っちょを曲げ運転席に差込「昔の車はこうすると！」

ガコッ！

真弓「ちよいと！何する気さ！」

コナンドアを開け「車に発信器と盗聴器を仕掛けるんだよ!」

と中に入る。

そして真弓も続けて中に入り「でもさ! まだ・・・あの男の車と決まった訳じゃ・・・。」

と同時に前を見て顔が青ざめる。

コナン「ん? どうした?」

真弓「と・・・通りの向こう!!」

コナン冷や汗かきながら睨みつけ「ジンッ！ウォツカツ！」

真弓

‘こっちに来る！’

するとジンタバコ吸いながら「ん？」と続け様に「車の周り雪がやけに、荒れてるな。」

ウォツカ「通行人が見てたんじゃないですかい？兄貴の車珍しいから・・・。」

其れを聞いてジンニヤリと笑い「フン。」と続け様に「ドイツのア
マガエルも偉くなった

もんだ。」そう言いウオツカと共に乗り込んだ。

コナンニヤリと笑いながら・・・。

大当たりッ！！

まさかこんな所で、会えるとはな、！嬉しいぜッ！ジンッ！

そして、黒のポルシェ356Aは走り去って行った。

コナンメガネの追跡ボタンを押しながら「今度こそ、逃がしやしね
えぜ、！」

真弓只黙って見ていた。

そして、コナン達はビートルに乗り込んだ。

博士「どうする？ 新一君？ 後を付けるか？」

コナン「いや・・・。車間をあけてこのまま追跡するんだ。このビートルのナンバーを」

控えられたら洒落にならねえからな。」

そして追跡を始めた。

すると真弓「無駄さ。奴等の車を追ったとてどうする事も出来ないさ。こんな、体じゃ

ね、。」と続け様に「あんた・・・分かってるのか、？今自分が・・・どんなに危険な

事をしているか？」

コナン後ろを振り向き「うるせー！黙ってろッ！」

すると真弓黙った。

哀「・・・此れもすべて、彼等、を倒す為。確かに、今彼がやっている事は、危険、な事

だけど、危険を冒してまで、倒さないといけない相手、。其れを分かっただけで。」

真弓「だけど・・・下手すれば。哀や唐沢（町原）さんや・・・皆も。」

哀フツと笑い「・・・そうね。」

そう言い追跡を続ける。

すると電話の音が入って来た。

コナン

電話？

ジン「ああ・・俺だ！どうだ？そっちの様子は？何？まだ来ない？
フン。心配するな！

標的は19時丁度に杯戸シティホテルに顔を出す。てめえの、別れの会、になるとも

知らずにな。」

コナン

標的？

別れの会？

ジン「兎に角奴の口が回る前に口をふさげとのご命令だ。何なら「例の薬」使っても

構わねえぜ？」

コナン

例の薬？

まさか？！

ジン「ぬかるなよ！シャンメリー！」

コナン「シャ・・・シャンメリー！だと？！」

真弓「ああ・・・そのコードネームなら唐沢さんから聞いた事あるよ。

でも、実際に会った事ないけどね。」

ジン携帯を切って「ん？」

運転席に落ちていた一本の髪を拾い・・・。

薄茶が掛かった黒髪？

そして運転席中を探し始めた。

その様子を見てウォッカ「あ・・・兄貴？どうしたんです？」

ジン「！！」

ゴソとコナンが仕掛けた発信器と盗聴器を取り出した。

ウォッカ「な・・何ですか？それ？」

ジン「多分・・発信器と盗聴器だ。」

コナン「ヤバイッ！ばれたッ！」

博士「な・・何じゃと?!」

真弓顔しかめた。

バキッ！

ジンニヤリ「ククククッ．．．。まさか生きていてお前から態々出向いてくれるとはな．．。

歓迎するぜ？水野渚！」

一方、真弓はかなり焦っていた。

コナンが仕掛けた発信器と盗聴器を糸も簡単に見つけられてしまったからだ。

と同時に其れはますます．．。自分自身にその火花，が散ると言う事を思い知らされて

しまったのである。

第7章。真弓黒の組織との再会。（前編。）完。

第7章。真弓黒の組織との再会。(前編。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

と同時に予めお断りしておきますが

管理人お酒好きですが詳しくありません。

偶々コナンのファンムックから適当に今回の

コードネームであるシャンメリーを見つけて加えまし

た。コードネームの響きからして多分女性になると

思います。其れでは次章も今章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「・・・ちよいと不味い事になったな。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第8章。真弓黒の組織との再会。 (中編。) (前書き)

前章の続きです。此方も此方で長丁場になりますので

ご了承ください。

第8章。真弓黒の組織との再会。（中編。）

一方此処は博士のビートルの中。

真弓「で？此れからどうするつもりよ？あんたが追跡用につけた発信機と盗聴器はあの男に

潰されて追跡不可能。もし・・アレが、調べられたりもしたら・・・」

コナン「大丈夫。指紋もちゃんと拭いたしガムの歯型から分かるのは精々血液型位だ。」

真弓「だったら、すぐあの男の車から離れてすぐに裏道にそれるんだね。このまま

漠然とあの男の車を追跡するのはあまりにも危険だ。」

其れを聞いてコナンニヤリと笑い「ああ。追跡は止めるが、逃げる

気、はさらさらねえよ。

杯戸シティホテルで19時丁度に標的が現れジン達は其処で誰かを暗殺させるつもりだ。

だから、其れを阻止する為に今から行つて・・・」

真弓「あら・・・相変わらず、正義感が強いんだな。私は今回ばかりは、ごめんさね、」

こんな体で何か出来るとも限らんし・・・ね。まあ、何時もの体なら、何とか出来たかも

しれないけどね・・・」

コナン「ああ。今回は、こっちもはなっからそう言うつもりだがな。」

と続け様に「まあ、最悪の場合、例の薬は取ってきてやっからよ。」

真弓「例の薬？」

コナン「ジンの奴が電話で言っていたんだ、例の薬を使ってもかまわねえってな。」

真弓「ちょ・ちょいと待て！その、例の薬、ってまさか？！」

コナン頷き「ああ。恐らく俺達の体を小さくしたAPT4869の毒薬だ。」

其れを聞いた真弓は更に驚いた。

一方ジンはシャンメリーに連絡を入れていた。

ジン「ああ！そうだッ！水野渚だ！俺が以前ばらした高校生探偵工藤新一の相棒の

女子大学生探偵でついでに俺がばらした筈の小娘だ！その小娘が今そっちに向かっているはず

だ！面が分^{ツラ}からねえんなら。組織のパソコンで検索をかけろ！小娘の仕掛けた

発信器と盗聴器が他にも無いかチェックした後俺達もそっちに合流する。ああ。間違いない

あの小娘は来るさ。‘例の葉’を匂わせたからな。もちろんあの「出来損ないの名探偵」を

使うかはお前の勝手だが……。兎に角小娘をとっ捕まえ次第面を拝ませろ。ああ・・・。

‘問題はない’、例え‘首から下がなくてもな’・・・。」

一方此処は杯戸シティホテル。

コナン「・・・たく。来るつもりはなかったんじゃないのか？」

真弓コナンの後ろで覗きながら「仕方ないじゃないか？相棒1人で危険な所に

‘行かせる訳にも行かんからさ・・・。」

コナン呆れ目で「気を付けろよ」。発信器と盗聴器が仕掛けた主位奴等にも分かる。

アレがもし万が一お前が仕掛けた事になったら・・・。」

真弓「大丈夫さ。だって、指紋、とかちゃんと消したんでしょ？ 精々対立している組織か」

誰かのいたずらだと思っくらいさ。」と同時に看板を見て「なあ・・其れより此処で

会場あっているのかい？」

コナン「ああ。奴は、別れの会、だって言っていたからな。」

看板

映画監督 坂川義典氏を偲ぶ会。

と続け様に「シャンメリーって奴もそいつが狙っている、標的、も此処に来ているはずだ。」

おしゃべりは此処までだ、乗り込むぜ、」

そして会場内に入って行った。

コナン辺りを見渡し

クソッ！ 偲ぶ会ってあってどいつもこいつも黒服だ。どれも此れも怪しく見えてきやがる！」

と先にコナン歩く。

それに続いて真弓も慌てながら続いた。

そして後ろから・・・。

ジン
〜・水野渚。〜

ドツクン。

ジン
〜・水野渚。〜

ドツクン。

ジン
〜・水野渚。〜

ドツクン。

そして後ろから肩をガツとつかまれた。

すると、従業員の女性が「どうしたの？お嬢ちゃん。ママとパパと離れたの？」

真弓怯えながら「・・・あ、ああ。」

するとコナン笑顔で「うん。今探している所行こう。水ちゃん。」

と言い真弓の手を引いてその場を離れた。

第8章。真弓黒の組織との再会。（中編。）完。

第8章。真弓黒の組織との再会。（中編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はシャンメリーの正体を明かす予定で
います。其れでは・・・次章もお付き合い下されば

幸いです。

オマケ

真弓「・・・次章もどうぞ宜しく。」

第9章。真弓黒の組織との再会。 (後編1。)(前書き)

今章は・・・前章のほぼ続きです。

今章も長丁場ですのでご了承下さい。

第9章。真弓黒の組織との再会。（後編1。）

アレから女性従業員から離れたコナン達。コナンは横目で真弓を見て・・・。

コナン「おい。どうしたんだよ。オメーらしくねえな。一緒に行くって言ったのオメーだ

ろ？」

真弓「・・・見てしまったのさ。‘嫌な夢’を。」

コナン「‘夢’？」

真弓「ある日の下校途中にジンに見つかり、路地裏に追い込まれ・・・最初に撃たれたのは

あんと哀。そして乾いた銃声と共に歩美ちゃん達が次々と・・・。」

と続け様にフツと笑い「あん時最初にジン達に会っていた時に、消えてしまえば、どんなに

楽だったのかも・知れないね。」

するとコナン真弓にメガネを掛けた。

真弓「え？」

コナン「知ってつか？そのメガネを掛けると正体が絶対ぜってーばれねえんだ。」

と言いつつ片目をウィンクして笑いながら「クラーク・ケントもビツクリする程の

‘優れもんだぜ’？」

真弓笑い換えて「へえ」。じゃ・・メガネ外したあんたは、スーパーマン’って事か？」

コナン「空は飛べねえけどな。」

そして真弓後ろに振り向いてメガネの真ん中を指でクイツとやりながら

「有難う。まあ・・軽く、気休め、になるね。」

其れを聞いてコナン再び横目で引きつり笑いしながら「オメー可愛くねえし、

素直じゃねえな。マジで・・・」

一方、ジン達は杯戸シティホテルに向かう為国道を走っていた。

ウォッカ「でも・・・。兄貴。あの小娘、本当に来るんですかい？」

ジンタバコを取り出しながら「ああ。あの小娘はそう言う奴だ。必ず止めに来る」

俺達に、出迎えられるとも知らずにな、・・・。」そう言いシガーライターを軽く押して

タバコに火を灯しながら「まあ、万に一つ来なかったとしても、あの小娘が米花町近辺に

潜んでいる事は分かった……。家の目星が付けば、狩るのは、造作もない……。

組織（俺達）に関わった人間は、匂いを消せねえ、からな。」と続け様に

「其れと……あの小娘には一先ず、聞きてえ、事もあるしな。」

そして黒のポルシェ356Aは闇の中へと消えていった。

一方此処は再び杯戸シティホテル。

コナン辺りを見渡し「直本賞の男流作家に……。」

りゅうがわはやぶさ
龍河隼33歳。

コナン 「日本水泳連盟の会長兼日本水泳団のオーナーに。」

田川雄三^{たがわゆうぞう}60歳。

コナン 「敏腕女子音楽プロデューサーに。」

榊原瑞希^{さかきばらみずき}25歳。

コナン 「アメリカの人気女優に・・・」

クリス・ヴィンヤード。29歳。

コナン 「台湾の人気舞台女優に・・・。」

ワン・アイユ
王愛瑜 23歳。

コナン 「香港のテレビ女優兼アナウンサーに・・・。」

リ・レイメイ
李玲明 23歳。

コナン 「某有名大学教授。」

かねこまひよし
金子正義 53歳。

コナン 「おっと！経団連の会長まで来ている！」

ますかわふみよ
益川文世 43歳。

真弓「そうそうたる顔ぶれさね。」

コナン「ああ……。さすが巨匠を偲ぶ会であってテレビカメラまで入って来てるぜ。」

と続け様に真弓「んで？分かったのか？奴等が狙っている、標的、って？」

コナン頷き「ああ。ジンが電話で言っていた7時前後に此処へ来て尚且つ・・・

明日警察に捕まりそうな人物は・・・今入り口でレポーターに囲まれているあの女しかないな

い。」と1人の女性を見る。

真弓「成る程ね。今、収賄疑惑、そして前からの不倫疑惑で新聞を賑わしているあの女政治家

って訳ね。」

あいざわまじか
逢沢円38歳。

コナン「捕まる前に口を塞ぐと言う事はあの政治家の、組織の一員、
’ なのか?」

真弓「さあね……。あの女ヒトや哀に聞けば分かるんでねえの?」

すると、目暮警部「ちよっと失礼しますよ!」と言い入って来た。

真弓「はれ？ 目暮警部さんじゃないかい？」

コナン「さっきトイレで声を変えて連絡したんだ。あの政治家の命を狙っている」

奴がこの会場内にいるってな。」

コナン

さあ・・・。

どうする？ シャンメリーさんよ！

標的が警察監視下にあるこの状況では殺人は不可能だぜ？

もし、強引に事を起こせば麻酔銃で眠らせてやる。

そう呟き麻醉銃を用意した。

第9章。真弓黒の組織との再会。（後編1。）完。

第9章。真弓黒の組織との再会。(後編1。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編2段を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

真弓「……。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

第10章。真弓黒の組織との再会。(後編2。)(前書き)

今章も前章の続きで後編2になります。

此方も長丁場になりますのまた、今章では

残酷なシーンもありますのでご了承ください。

第10章。真弓黒の組織との再会。（後編2。）

そして、司会を担当している女子アナウンサー多恵川水音^{たえかわみずね}34が。

「では、皆様。此れより坂川監督が生前直向に取り直していた秘蔵フィルムを

スライドで御覧頂きましょう。」

コナン

な・・スッ！スライド？

そして照明が落とされる。

真弓「ちよいと！彼女居なくなってるよ！」

コナン「何?!」

そして多恵川「さあ・皆様!此れは何時何処で取られたフィルムか分かりますか?」

目暮「おい!早く探せッ!」

高木「ハッ!」

多恵川「そう・此れはあらゆる賞を独占しました坂川監督の代表作である『七色の虹』

の撮影風景でございます。こんな事監督に言うのも失礼ですが・
まだ監督の髪の毛が

寂しくならない貴重な一コマでございます。」

そう言う与会場がどつと沸いた。

そしてコナンは真弓と共に逢沢議員の行方を追っていた。

コナン

クソッ！何処だ？！

何処に行きやがった？！

するとフラッシュ音がなった。

コナン

え？フラッシュ？

多恵川「あ・・何処のどなたか存じ上げませんが・・幾ら貴重な一枚だからと言って

フラッシュ炊いたらスライドに写りませんよ。」

そう言い再び会場を沸かせた。

そしてキューンと音が鳴り

コナン

何だ?!

何だ?今の音?

上か?

そしてコナンが上を向いた次の瞬間

シャンデリアの音が鳴った。

コナン驚き

何?!

そして会場客がどよめき始め・

客「おい！どうした？！」

客「何の音？！」

客「明かりをつけろ！！」

そしてコナンの上にハンカチが振ってきて

え？

ハ・・ハンカチ？

すると会場の明かりが再びつけられた。

そして、全員が見たのは・・・

何と?!

シャンデリアの下敷きになって亡くなっている

逢沢議員の姿だった。

そして会場に悲鳴が上がった。

第10章。真弓黒の組織との再会。（後編2。）完。

第10章。真弓黒の組織との再会。（後編2。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章もこの続きを書かせて頂く予定です。

黒の組織の再会編は後しばらく続く予定です。

ご了承の程宜しくお願い致します。

第11章。真弓黒の組織との再会。(後編3。)(前書き)

今章も前章の続きです。今章も長丁場と残酷な文法

等を含んでおりますので予めご了承下さい。

第11章。真弓黒の組織との再会。(後編3。)

そして、辺り騒然とする。

一番早く口を開いたのが龍河だった。

龍河「……おいおい。一体何が起こったんだ?!」

そして榊原「……あの。どなたか説明してくれませんか?!」

すると、目暮警察手帳を取り出し「皆さん!お静かにッ!警視庁の目暮ですッ!

その場から動かんで下さいッ!」と同時に高木に「おい……。どうだ?」

高木、逢沢議員の脈を取り「……駄目です。意識がありません。」

そして、田川「ご苦労様です。それにしてもあなた方には早い方ですな。」

目暮「・・・通報があったんですよ。この逢沢議員の命を狙っている者が入るとね・・・。」

そして、益川「その通報主は誰だかご存知？」

目暮「いや・・・声がちょっと変わっていたので・・・其処までは。」

と同時にそれぞれ事情聴取が行われ・・・。

そして、龍河「とにかくですね……。逢沢議員はシャンデリアの下敷きになって亡くなられた」

「んですよね？多分此れは、事故ですよ。、事故。我々はこの下に居たんですよ？」

余程の細工をしない限り此処での殺人は不可能ですよ。」と言いつつ「もし、分かって」

頂けたら此処から開放していただけませんでしょうか？」

コナン

「……確かにそうだ。暗闇の中で目的の人物にシャンデリアを落とすなんて、仕掛けもない限り」

「不可能だ……。しかし、奴は其れを、成し遂げた。、一体……。どうやって……。」

すると真弓がコナンの手を握り歩き始めた。

コナン「お、おい！何処に行くんだよ？」

真弓「・・・逃げるに決まってるんでしょ？」と続け様にコナンを見て「このまま此処に留まって

時間を無駄に浪費し続けるのも危険すぎる！それと、もし目暮警部さん達に私等が

見つかったらどう理由を説明する気？其れと、手掛かりはさっきあんたが見つけた、鎖の破片、

1つだけ・・・其れだけじゃ・・・幾らあんたとて犯人を割り出せる何て・・・。」

その事を聞いたコナンニヤリと笑い「2つなら、どうだ？」

真弓「え？」

コナンハンカチを見せながら「落ちてきたんだよ。シャンデリアが落下して

明かりが点く前に頭上からこのハンカチがな……。ほら、ハンカチの左上・・・

「坂川監督を偲ぶ会」って縫い付けてあるだろう？ 恐らく此れの持ち主が此処の受付で

受け取ったハンカチだ。」

真弓其れを聞いて腕を組みながら「其れが何だって言うのさ？持ち主の名前が書いてある

訳でもあるまいし……。」

コナン「じゃ……見てみるよ。周りの奴等を……。」

と続け様に「ほら、あのグラスを持った男性も……。テーブル側にいる太った女性も

……その奥のひげを生やしたご老人も……皆このハンカチを持っているけど……

‘色’が違う！！」

真弓「どうゆう事さ？」

コナン「恐らく・・・坂川監督の代表作である「七色の虹」に掛けて、七色のハンカチを

来場した客達に受付が配ったんだろう。つまり、受付で調べればこの紫のハンカチを

ある程度だが、‘特定’出来るって訳さ！」

真弓「で、でもさ・・・？相棒。まだ其れが本当に今回の殺人と関係してある物なんて・・・。」

其れを聞いたコナン頷き「ああ、まだ何に使ったかも犯人の物かさ

えも、分からねえが、

・・・事件に関係している可能性は0じゃない。其れをとことん調べるのが、俺達探偵、

そうだろう？相棒？」とフツと笑って言った。

真弓フツと笑い返し「・・・そうだったね、。こんな体になってからその事すつかり

、忘れていたよ、。」

そしてコナンと共に出入口に向かいコナンはフードを被っていて出入口に居る刑事に

「ねえ・・・。刑事さん。トイレ行っても行っても良いでしょ？」

刑事「ああ。」　　そう言いドアを開けた瞬間・・・。

一斉にマスコミのシャッター音が響き渡った。

刑事「ちょっ・ちょっと何なんですか?! 貴方達は?!」

リポーター「逢沢議員が亡くなられたのは、本当ですか、?!」

と続けて別のリポーターからも「事故死と聞きましたが、?!」

そして更に続けて別のリポーターからも「どうなんですか?!」

すると客の中から、黒影の視線が、。。。

その視線は出入口をずっと見ていた。

「・・・・・・・・・・。」

刑事「後でご説明させてご説明させて頂きますので・・・一先ず皆さん下がって下さい！」

リポーター刑事のその言葉にくじもせずに「答えて下さいッ！」

コナン「クソッ！」

そう言い真弓の手を握り締めて引っ張りその場を後にした。

客の1人が「もうマスコミがかぎつけてきやがった!!！」

それに続き別の客も「こりゃ・・・帰りが大変だぞ!!」

シャッター音と共に何と真弓も映し出され・・・その、黒影、は会場客から少し離れた場所に

パソコンを持ち真弓の顔を検索し始めた。

カタカタッ・・・。

Enter Keyword

「Nagisa Mizuno」

「水野渚。」

そしてエンターキーが押され、真弓事渚の顔が映し出された。

「……………」

一方コナン達は……。

受付「え？紫のハンカチを渡した人？」

コナン頷き「うん。僕そのハンカチを拾ったからその持ち主に返したいんだ。」

と続け様に「あの七色のハンカチこの後何かに使うはずだったんでしょ？」

受付「ええ。会の終わりに色を決めて、その色のハンカチを持って
いる方に一言コメントを

頂く予定だったみたいだけど・・・」

コナン「じゃあ名前教えてくれる？持っていない人を探して渡すか
ら・・・」

受付「え、ええ。」と記帳台を開きながら「えーと。このご夫婦も
このグループの方々も

来た早々すぐに帰られたから・・・」

一方会場は再び騒がしくなっていて目暮警部も客を開放せざるを得
なくなった・・・

そして此処は再び会場の外。

受付「今会場内に居るのはこの7人よ。」

龍河隼。

榊原瑞希。

クリス・ヴィンヤード。

王愛喩。

李玲明。

金子正義。

益川文世。

コナンニヤリと笑みを浮かべ・・。

成る程・・この7人か。

受付「でも、坊や。本当に探せるの?」

と続け様に

まだ、確証はないが・・。

もしかしたらこの中に・・

奴等の仲間である、シャンメリーが・・。

そして会場外のマスコミが騒ぎ始め「お、おい！出て来るぞ！」

「マジかよ？」

コナン、真弓「え？」

そして一斉に会場から客達の流れ出てマスコミは客に話を聞こうとしたが、

相手にされなかった。

コナン「クソッ！こうなったら一旦博士の車に戻るぞ！！」

と続け様に「おい！碇ッ・・・！！」

い・・・碇？

コナン「おいッ！何処だッ？！返事をしろッ！！」

と続け様に「おい！！」

真弓「あ、ちょ．．ちょい．．。」

そう言いかけた時に後ろから何者かに片腕で抱かれ．．。

真弓

え？

そして．．。

後ろから葉をかがされ眠らされた。

コナン「碇イイ〜〜〜〜〜〜！！！！」

一方真弓は・・・。

真弓ちゃん。

起きて・・・。

真弓ちゃん。

真弓ちゃん！！

真弓「え？」

歩美「どうしたの？今、授業中だよ？」と続け様に「もしかして、風邪のせい？やっぱり

保健室で休んでいた方が・・・」

真弓

夢？

フツ・・そうだね。そうだよ。街で偶然にも奴等に遭遇するなんて出来過ぎているよ。

最近こんな嫌な夢ばかり・・・疲れてんのかな？私じゃあ・・・。

すると・・・。

碇・・・。

え？誰？

おい！返事をしろ！碇！

誰なの？

碇！

真弓頭を抱えて、誰なんだよ？！あんた！

碇！！

碇
イイ!!!

その声で真弓が目ざめた。

頭を抱えながら「あ・・相棒か？」

コナン
〔碇? 碇か?!〕

真弓「どこだ？」

コナン「ホテルの前に止めてあった博士の車の中だ! メガネに内蔵されたマイクと集音機に

周波数を合わせて交信しているんだよ!」

真弓「私しゃあ・・・どうしたんだ？」

コナン「其れはこっちの台詞だ！会場外で一体何があったんだ？」

真弓「会場外で？」と続け様に頭を抱えながら「ああそう言えば・・・会場外であんと

はぐれた後・・・会場から出た人の波に飲み込まれそうしたら後ろから・・・」

真弓何かを思い出したかのように「?!?!」

辺りを見渡しながらコナン「後ろから何だって？」

真弓「誰かさんに、薬を嗅がされて、眠らされてどっかの酒蔵に監禁されているみたいだ。」

其れを聞いたコナン「お・・おい！ 誰かって、まさか・・？」

真弓「ああ。恐らくあの警察の監視下にあったあの会場で、殺人をやったのけた組織の一員

シャンメリー！！」

コナン「な・・何だと？！」と続け様に「まさかいるんじゃないだろうな？！そいつが

そばに！！」

真弓ドアから出ようとしたが鍵が掛けられていた。其れを確認して

「いいや。その、誰かさん、は今はいないさ。それに今確認したけど・・

「ご丁寧にもドアには鍵が掛かっているよ。」と更に続けて「残っているのは清掃員の

ツナギと段ボール箱と・・・。」

コナン「ツナギ？」

真弓「ああ。きっと私しやあに、薬を嗅がせた後、トイレに連れ込んだ後にトイレ内に

用意してあった此れに着替えて、私しやあをダンボール箱に入れて此処に運んだんだろうさ。」

と更に続けて「どうやら、あの議員さんを会場で殺し損ねた場合トイレで殺し、

此処に運び込むつもりだったみたいだよ。」

コナン「まあいい。兎に角その酒蔵から脱出する方法を早く見つけて・・・。」

真弓は無言のまま聞きながらドアを見ていた。

第11章。真弓黒の組織との再会。（後編3。）完。

第11章。真弓黒の組織との再会。（後編3。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の続きで・・・いよいよですか・・・

真弓が・・・ジンの兄貴様方と、再会、します（予定）

此方も長丁場になりますのでご了承下さいますよう

宜しくお願い致します。

オマケ

真弓「・・・次章もどうぞ宜しく！」

第12章真弓黒の組織との再会。 (後編4。)(前書き)

前章の続きです。

今回はですね・・渚がジンの兄貴様と再会します。

今章も長丁場であり残酷シーンがありますので

ご了承の程宜しくお願い致します。

第12章真弓黒の組織との再会。(後編4。)

すると、真弓行き成り別れの言葉を繰り出した。

其れを聞いたコナン「お・・おい！何だよ！行き成りッ！」

と続けて何かを言おうとするが真弓に「良いからッ！黙って聞きなよ！！」

と更に続けて「もう、二度とあんた達に顔向ける事なんぞ出来ないんだから・・。」

コナン「何？」

真弓「まだ分からないのか？奴等は私しやあが、この姿、になって
も関わらず

私しやあを此処に監禁したんだよ？例え、私しやあが此処から脱出出来たとて奴等は

2日、3日もたたんうちに私しやあを見つけ出すよ。そうなれば今まで私しやあを匿ってくれて

いた博士や勿論、哀やそしてあんた……。そして今まで私しやあに関わった人達は

‘秘密保持の為、’に1人残らず、消すだろうね。そう……。此処で消されたとしても、’

上手く脱出出来たとしても……。私しやあは二度とあんた達に会えない状況に追い込まれて

しまった通訳^{つうわけ}よ。」と更に続けて「だから、今の内にさ……。あんたに

私の想いをさ……。」

コナン

碇・・・。

すると音が鳴って。

コナン「ん？」と続け様に「な・・・何の音だ？それ？」

真弓パソコンを見て「ん？ああ・・・此れ？今日光彦君に返してもらった博士のゲームだよ。

どうやら、奴等が私しやあのポケットに入っていたMOをさ組織のパソコンで調べたらしい

パソコンに携帯が繋がっているツう事は・・・」とパソコンを触りながら

「あ・・・やっぱりだ！私しやあの顔検索していたんだ！」

コナン「お、お前・・・縛られてねえのか？」

真弓「ああ。」と続け様に「だから、急いでるんだよ。奴等が長丁場私しやあをほって

置く訳ないからさ。さあ・・・奴等が戻ってくる前に私しやあの話の残りの続きを・・・」

コナン「いや・・・。当分奴は戻って来ねえよ！」

真弓「え？」

と続け様にコナン「お前が居なくなった後、警部に連絡を入れたんだ・・・。」

と更に続けて「紫のハンカチを貰った例の7人を杯戸シティホテルから一步も出さなうて

この俺、工藤新一、の声でな!!」と更に続けて「お前が拘束されていない事と、パソコンの

電源が付けっぱなしと言う事は、恐らくお前を監禁した奴は何かの目的で少しでもホテルを

離れた時に出入口で刑事に止められて上で警部の事情聴取を受けているんだろう。」

と更に続けて「しかも奴は今、外部との連絡が取れていない可能性が大だ! お前が居なくなっ

て1時間近く経っているのに奴所か奴の仲間が来なねえなんて可笑しいからな。つまり、

俺が睨んだとおりにいるんだよ、この7人の中に暗殺を成し遂げた、シャンメリー、って奴が

な!」

真弓「って事は・・・相棒、まだ此処は杯戸シティホテルの中って訳かい?」

コナン「ああ。多分そうだ！奴が仲間と接触する前に殺人の証拠を挙げて、奴を警察に」

突き出せばお前の身の安全は保障されるって訳だ！」と更に続けて「警部があゝの7人を止められ

るのは精々後1時間……。取り合えず俺は、ホテルの従業員にあま
り使われていない酒蔵を

聞いて迎えに行つてやるよ。」

コナン「女の子が間違つて中に閉じ込められていると言えば鍵位開けてくれるはず……。」

真弓「ばかだな……。言っただろ？私しやあに関わった人達は、消される、って……。」

どうなつても知らんよ？私しやあの逃亡を手助けしたその従業員さんがどうなつても……。」

其れを聞いたコナン「じゃ・・何とかして自力で脱出する方法を考
えろよ！」

その間に俺はあの7人から、シャンメリーの奴、を割り出すから・
〜。

真弓「あのな・・。簡単に言うけど、この部屋に脱出口なんか見当
たらんよ？あるのは

古びた暖炉位・・。」

コナン「その暖炉登れねえのかよ？」

真弓「無理やね。登るには、大き過ぎる、まあ・・こんな体じゃな

きゃ手足を突っ張って

何とか行けそうな感じがするがね・・・。」

コナン「!!!!」と続け様に「た、確か其処酒蔵って言っていたよな?」

真弓「ん? ああ・・・。古くなった暖炉をつきの部屋を酒蔵にしたって感じだよ。」

コナン「其処にパイカルって酒あるか?」

真弓「パイカル? ああ・・・あの中国のきつい酒ね。」

コナン「ああ。探してみてくれ。」

真弓パイカルを探し「あったよ！パイカル！でもさ・・・どうすん
さ？こんな酒？」

コナン「この部屋から脱出させてやるんだよ！お前に取って置きの
‘魔法を掛けてな’！！」

一方此処は杯戸シティホテルの上階。

此処では事情聴取を行っていた。

一方再び此処は博士の車の中・・・。

コナンテレビのニュースを見てノートに書きながら「うーん。今の
映像でおおよそ7人の事件の

直後の位置は分かったけど・・・これだけじゃな・・・。」

と続け様に真弓「ねえ．．相棒。エルキュール・ポアロの綴りって分かるか？」

コナン「あん？」と続け様に「お、おい。何やってるんだよ？ちゃんとパイカル飲んだのか？」

真弓咳をしながらパソコンを触り「ああ。ちゃんと飲んださ。多分あんたのこった、考えがある

んだろうが．．それにしてもますます．．気分が悪くなった、だけさ．．。」

と続け様に「其れより教えて頂戴よ！ポアロの続き．．。」

コナン「Hercule Poirot だけど．．。こんな事聞いて何すんだよ？」

真弓「組織のパソコンから私しゃあのMOに薬のデータを落とそう

としたんだけど・・・。

どうやらパスワードに引っ掛かっちゃまって・・・。」

真弓「駄目だ！ポアロでも開かんよ！」

コナン「パスワードが「ポアロ」？どういう事だ？」

真弓「此れあの女^{ヒト}から聞いたんだけど・・・試作段階のあの薬を組織の奴等はこちら

たまに呼んでいたらしい・・・。」

真弓パソコンを触りながら「シリアルナンバーの4869をもじってシャーロック。」

「出来損ないの名探偵」ってな。」と続け様に「だからさ・・・思いついた名探偵の名を

手当たり次第入れているんだけど・・・中々上手くいかなか。」

コナン考えてそして「シェリング・フォード」綴りは「Shell
lingford」

真弓「そんな探偵いたか？」

コナン「良いから入れてみるよ。」

真弓コナンに言われた通りパスワードをパソコンに打ち込んだ。

そして真弓驚いて「マジで？開いたよ！どうしてだ？！」

コナン「「シェリング・フォード」はコナン・ドイルが自分の小説の探偵を「シャーロック」

と付ける前に仮につけた名前・・・つまり「試作段階の名探偵」って訳さ！」

真弓「成る程ね。奴等にしては洒落ているんじゃないの・・・。」

コナン「それよりもうソロソロ時間がヤバイ！お前、体なんともねえのか？」

真弓「何とない訳がないじゃないさ！元々風邪気味だった上にあんな酒まで飲まされて・・・。」

と続け様に「兎に角、薬のデータをMOに落としてこの酒蔵のどこかに隠しておくからさ。」

後で取りに来るんだね。」と更に続けて「奴等が私しやあを、始末した、後でね・・・。」

コナン「お、おい！！！」

すると博士が慌てて「し、新一！！ま・・・前！！！」

コナン「え？」

博士の車の前に一台の黒のポルシェが止まった。

そしてジン達が降りてきた。

博士「や・・奴等じゃ!! まさか、シャンメリーとやらと?！」

コナン「いや! それは無い! 警部があの人を解放する時にこっちに連絡が来るはずだから」

するとウォッカがパソコンを取り出した。

コナン驚いて「まさか! 碇の使っていたパソコンに発信器が内蔵さ

れていたんじゃ!!」

博士「そうか! 何度も電話をしたが連絡が取れなかったから発信機を頼りに・・・。」

すると哀「ねえ・・・? このままだと碇さん、やばくない?」

コナン哀のその声が聞き取れなかったのか「おい! やばいぞ! 碇! ! 奴等が来る!!」

取り合えず暖炉の中にでも隠れてろ!!」

と、其処で突然真弓が苦しみだし「おい! どうした?! おいッ!!」

そして、コナン急いで目暮警部に連絡をし「警部ッ! 工藤ですッ! 今入った黒服の2人組に

職質を掛けてください!」

そして警部に指示を受けた刑事が「え？黒服の男ですか？」

其れをよそにジン達がその酒蔵に向かっている。

そして真弓苦しみながら叫んだ。

と同時にサイレンサーの音がなりジン達が入って行った。

ウォツカ回りを確認しながら「あれ？妙だな？いませんぜ？シャン
メリーの奴。」

と続け様に「30分後ホテルの駐車場で落ち合おうって言ったきり
音沙汰ねえし

発信器を頼りに来ても奴の姿が何処にもねえ。」とパイカルを持ち揺らしながら

「一体何処に消え決まったんだが……。大体何なんですかい？この酒蔵？」

ジン「恐らくシャンメリーが念の為に、確保した部屋だ。会場で失敗した場合

どっかでやった後・・・此処に運び込む手はずだったんだろおよ！」

そう言い暖炉に耳を傾けた。

ウォッカ「兎に角、早くこのホテルからずらかった方が良さそうですぜ？兄貴？」

ジン暖炉を見てニヤリと笑い「ああ・・・そうだな。」

そう言いウオツカ共に出て行った。

コナン「おい！ 奴等行っちゃったか？」

渚息切れしながら「ああ。」

コナン「それで？ お前・・・服は？」

渚「H！ちゃんと着ているよ。酒蔵にあったツナギをね。もちろん、薬のデータを」

落としたMOもちゃんと持ってるよ！それにしても驚いたな。

あのパイカルって酒・・私しやあの体を元に戻してくれるなんてな・
・。〜

コナン「安心するな・・。その効果は一時的だ真弓の姿に戻っちま
う前にその酒蔵から

脱出するんだ！」

渚フツと笑い「了解した！しかしまあまるで井戸から這い上がるコ
ーネデリアみてえだな。

気が遠くなりそうだよ。」と続け様に「其れより分かったのか？シ
ヤンメリーが誰なのか？」

コナン横目になり「いや・・まだだ。情報が足りねえんだ！」

すると博士「見ろ！新一ッ！哀君！ネットに出とる明日の新聞の朝
刊を！」

コナン「それなら・・・さっき見たけど何処にも・・・。」

哀「そうね。」

博士「いや！見るのは芸能面じゃ！」

コナン「?!！」

新聞には、龍河隼と榊原瑞希熱愛発覚?!

と続け様に「会場内にいたカメラマンが偶然にもシャンデリアの落下直前に撮ったじゃ

！此れ会場内にいた例の7人の内の2人じゃろ?」

コナンスボンのポケットに手をつ込み・・・。

待てよ？もしかしたら・・・。

ハンカチを取り出し

焦げた後・・・って事はこの鎖！

その二つを照らし合わせて

成る程・・・そう言う事か。

一方、渚は煙突からようやく出て来た。

渚「で・・・出たよ！どーんの？」

博士「よくやった！真弓君！其処がどこ分かるか？」

渚「当たり前見渡して「どっかの屋上みたいだ。」「あり？博士・・・相棒いないの？」

博士「さっきまで目暮警部と電話で話しておったが慌ててホテル内に入ってしまったよ。」

渚「慌てて？」

博士「まあ・・・安心せい！」「シャンメリーの正体が分かった。すぐに迎えに行くから」

其処で大人しく待ってろ。～と伝言を残して行きおったから・・・。

渚「フツと笑い」「大丈夫さ。どうせ動きたくても体がだるくて動けないからさ。」

と次の瞬間・・・。

パシユと銃声の音がして渚の左肩を銃弾が貫いた。

渚「!?!な!」

そして後ろを見た。

ジンサイレンサー付きのベレッタを持ってニヤリと笑い

「会いたかったぜ」。水野渚。」

渚、ジンとその隣に立っているウォッカを見て固まってしまってい

た。

第12章。真弓黒の組織との再会。
(後編4。)完。

第12章真弓黒の組織との再会。 (後編4。) (後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は多分・・・このシーンの最終編を書かせて

頂く予定です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・・。

哀「碇さん、大丈夫かしら？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第13章。真弓黒の組織との再会。（最終後編。）（前書き）

今章でこの黒の組織の再会編も終了します。

此方も長丁場であり残酷シーンも入っていますので

ご観覧にはご注意ください様お願い致します。

尚、この後編にはワカバもチラッと出てきます。

第1作でもお知らせしましたように此処に出てくる

夏美は生きています。その理由は・・・あえて突っ込み

で下さるようお願い致します。

と同時に・・・。

ベルモットは既にクリス・ヴィンヤードだと

ご存知の方も多いかと思われませんが・・・。

アンジュは台湾の舞台女優でオリキャラの

王愛諭の事です。中国のお酒で杏酒だったかな？

のがありましてそれから一応コードネームを取らせて

頂きました。尚・・・予めお断り致しますが、

作者お酒には詳しくありません・・・。

コナンのファンムック・・・また個人的に飲んだ事が

あるお酒からコードネームを取らせて頂いた訳であります。

す。ので多少間違いもあるかもしれませんが・・・

その辺もご理解とご了承頂きたいと思います。

第13章。真弓黒の組織との再会。（最終後編。）

渚心の中で・・・。

‘夢と同じ、やっぱ・・・’ 現実になってしまったか、’

そしてジンニヤリと笑い「見ろよ！綺麗じゃねえか・・・。闇に舞い散る白い雪、其れを

染める緋色の鮮血・・・。組織（俺達）を欺く為のそのメガネとツナギは死に装束としては

‘無様だが、・・・此処は女子大学生探偵の死に場所には上等だ・・・。そうだろ？’

水野渚。」

渚ようやく左肩を抱えながら口を開き「よ・・・良く、此処が分かつ

たね。’ 私しやあが

‘ 此処から出て来る ’ って・・・。」

ジン渚の髪を毛を取り出して「髪の毛だ・・・。’ 見つけたんだよ。’
暖炉の側で

薄赤髪の掛かった黒髪をな・・・。シャンメリーに取っつかまったか、
奴が居ない間に

あの酒蔵に忍び込んだか知らねえが・・・。’ 聞こえてたぜ ’ ？ 暖炉
の側でお前のその震えるよう

な吐息がなア。」と更にベレッタを再度突きつけ「すぐにあの薄れ
た暖炉で殺^{やっ}も

良かったんだが・・・。せめて、死に花ぐらい、咲かせてやろうと思
ってな・・・。」

渚「あら・・・。なら、お礼言わなきゃあかね。’ こんな寒い中待
っててくれたんだからさ。」

ジン「フン。その口が動いている内に聞いておこうか・・・。お前があの時に毒薬を飲まされ

今でも生きているカラクリと・・・。ラム、の行方をな。」

渚其れを聞いて顔をしかめた。

一方コナンは、渚を救出する為に従業員に酒蔵の居場所を聞いて其処に向かっていった。

すると、博士から電話が掛かってきて「何ッ?! 碇が撃たれたッ?!」

博士「そうじゃ！この屋上の何処かで奴等に・早く助けにいか・」

ブツッ。

コナン「おい！博士？！博士ッ？！」

クソッ！！電池切れか！

「碇イイイイ！！！！！！」

一方此処は旧館の屋上・・。

渚はジンに撃たれその場に倒れこんでしまった。

その様子を見てウォツカ「兄貴。この小娘、吐きやせんぜ、？」

ジン「・・・仕方ない。送ってやるか。先に、逝かせてやった相棒の下へ。」

と、その時

パシユ！！

ジン「ん？」

針がジンの左腕に刺さった。

そして針が砕けた。

そしてジンその針を見て「・・・針？」

と同時に左腕を抱えその場にしゃがみ込んだ。

その様子を見たウォッカ「あ、兄貴？」

ドアの所にはコナンが麻醉銃を構えて息切れをしながら立っていた。

そして変声期を使って「煙突だッ！煙突の中に入れッ！！」

その声を聞いたウォッカはブローニングを取り出し「誰だッ！テメエは？！」

その声の主に向かって発砲する。

コナン「早くッ！」

渚その声と共に再び暖炉の中に逃げ込もうとした。

その時、ウォッカ「この小娘逃がすかッ！」　そう言い渚に向かって発砲した。

そして、渚に一発当たりそのまま暖炉の中に落下して行った。

ウォッカ軽く舌打をしジンに「兄貴？　どうしたんですかい？　兄貴？　！」

しかし、ジンは無言のまま針が刺された左腕にベレッタを突きつけ引き金を引いた。

ジン「グ・・。ヌウウ・・。」

一方、ジンの銃弾を一先ず何とか逃れた渚は再び酒蔵の暖炉の中に戻って来ていた。

そして・・。

心臓の音と共に再び叫び真弓の姿に戻っていった。

そしてその場に倒れ込む・・。

すると女の声がしたと同時にタバコの煙が舞う「まあ・・。素晴らしいわ!」と続け様に真弓の

所にしゃがみ込み

「貴女はまだ赤ん坊の頃だから多分覚えてはいないだろうけれども、貴女のご両親と

私はねとても親しくてね……。貴女の推理力、観察力の事は良く（
よく）聞かされていたの

よ。」

真弓

失礼だが……。誰なんだ？

「でも、まさか……。貴女が此処まで、成長しているとは、ご両親も
さぞかしお喜びでしょうね。

「

真弓

誰なんだ？ 貴女？

その女は懷からサイレンサー付きの銃を取り出し「でもね・・残念ながら

此れは、ご命令、なのよ。悪く思わないでね・・。渚ちゃん。」

するとコナン「其処までだぜ!!」と続けて「益川さん？ それとも・
・ シャンメリー」

って呼んだ方が良いのかな？」

その声を聞き真弓の顔に笑顔が綻ぶ。

シャンメリー（益川）「だ、誰?!」

コナン「上手く逢沢議員の頭上にシャンデリアを落として、事故死
'に見せかけたんだろが

そうは・・・いかねえよ'。」と続け様に「あれ、あんたが落としたんだろ? サイレンサー付き

の銃を使ってな。目印はその鎖につけてあった蛍光塗料! スライド
上映で会場内が暗くなれば

その場に光が出てくる寸法だ・・・。もちろん、あのまま発砲してしまえば・・・周りの人間

に気づかれてしまうが、ハンカチを使えば話は別だ。ハンカチをサイレンサーに隠して発砲

すればハンカチは吹っ飛び・・・その火花がハンカチで隠してくれるって訳だ。」

と更に続けて「坂川監督の偲ぶ会のハンカチを使ったのも後で回収した時に‘足が付き難い’と

感じたからだろうが・・・。あいにくあの紫のハンカチを貰った客は既に十数人帰っちまって

残るのはあの7人のみ。シャンデリアの真下に居て鎖が狙えない金子さんとクリスさんは

シロツ！そして、スライドに夢中になっていた王さんと李さんもシロ・・・。

そして、事件直前に抱き合っていた龍河さんと榊原さんは論外・・・」

と更に続けて「つまり・・・あの会場でこの犯行を成し遂げられたのは・・・益川さん

貴女だけなんだよ。」

シャンメリー警戒しながらあたりを見渡し「其処か!!」　そう言い箱に向かって

発砲する。

と同時にその箱の蓋を開けながら「因みに、逢沢議員がそのシャンデリアの下に来たのは

その真下の床にも蛍光塗料が塗ってあったから・・・逮捕寸前に彼女に「挽回のチャンスを

やるから明かりが落ちたら光のある所で指令を待て。」　そう脅しをかけたんだろ？

そうだろう？　シャンメリーさん？」

シャンメリー

スピーカー?!

そしてそのスピーカーを取り出し「だ、誰なのよ?! 何者なのよ?! あんた?!」

するとコナン真弓の前に現れニヤリと笑い「江戸川コナン・・・探偵さッ!!」

シャンメリー驚きながら「た、探偵?!」と続け様にコナンを指差しながら

「ま、まさか・・・!! 取調べ中に警察に指示を出していたのは・・・
小坊主

あんただったの?!」

コナンフツと笑い「どうせ。あんたもこの上の2人も警察に捕まっちゃう。」

と続けて「その前に良かったら、教えてくれないか、? どうして、取調べ中にあんたが

その紫のハンカチを持っていたのかを……。だから、警部はあんたを解放せざるおえなかった

・・・一体あのハンカチは・・・。」

そしてシャンメリーコナンに銃を突きつけ「フン……。この世には知らなくても良い事も

中にはあるのよ。それに周りの状況を良く見てみなさいよ! 警察なんて呼べやしないわ!」

コナン再びニヤリと笑い「あんたも良く見るんだな。自分の足元を・。
」

シャンメリー「?!!!」

コナン「そう・。スピリタス。アルコール度数96%の強烈な酒だ。分かるよな？」

そんな酒が気化している所でタバコなんて吸っているとどうなるか・。
」

そして一気に酒蔵に炎が広がった。

するとアナウンス

旧館604号室で火災発生。

目暮「何ッ?！」

高木「兎に角行ってみましょう!!！」

目暮頷き旧館へと急ぐ。

そして再び此処は旧館・・。

シャンメリー「ちよつと!小坊主!何処よ?!!何処に居るのよ?!!
出て来なさい!！」

コナンはばれない様に真弓を後ろに抱えその場を素早く去った。

すると、暖炉からザシュツと音がしてシャンメリー「フフツ・・其処ね。」

そう中を覗いた次の瞬間、シャンメリーの額に銃口が突きつけられた。

シャンメリー「な、何のマネです?! ジンツ!」

ジン「轟碌したな・・。シャンメリー。何故あのカメラマンを殺^{やっ}て直ぐにフィルムを

隠滅しなかった・・?」

シャンメリー「カメラマン？何の事です？」

ジン「明日の朝刊の一面がお前の写真に差し替えられたそうだ・・・
銃を天井の上に

向けているお前のアップにな・・・。」

シャンメリー「や、止めてください・・・。私を殺すと水野渚を探せ
なくなりますよ？

私には、見当が、付いています。其れに長年あのお方にお仕えした
私を殺すと・・・

貴方の立場も・・・。」

其れを聞いたジンニヤリと笑い「悪いな・・・。此れはついさっき受
けたあのお方直々の

ご命令だ。」

シャンメリー驚き愕然とし「な・・・!？」

ジン「組織の力で、此処までのし上がってきたんだ。もう十分、良い夢を見ただろう？」

と更に続けて「続きは、向こうで、見るんだな。」

と同時に銃声が聞こえた。

一方、コナン達は。

コナン「何?! ジンがシャンメリーを、射殺した、?!」

博士「ああ。真弓君が暖炉に置き忘れたメガネから会話を聞いたんじゃないが・・

射殺後直ぐに煙突から逃げていったようじゃ・・。」

コナン其れを聞いて考えて

変だな・・。

何であいつ麻醉銃を撃たれても平気で動けるんだ？

あんな大男、眠っちゃったら・・警察から逃げられねえと踏んでいたのに・・。

そして、真弓を見ながら、其れに碇の奴の動きが奴等に読まれ過ぎていたのも気にかかる。

まるで、碇の奴が会場に来る事を確信していたみてえだし、第一髪

の毛だけで誰のか

‘分かるか’ 普通・・・。

と続け様にコナン「なあ・・・。碇、お前あの時初めてジン達を追った日・・・。」

と言い掛けたその時真弓「んで？ばれちゃったのか？私しやあの体が‘縮んだ事’。」

博士後ろを見て「いや・・・ばれとらんようじゃ。安心せい！」

そして哀「で？どうするの？貴女これから・・・。」

真弓「・・・そうだね。私しやあがこの街に潜んでいると知られた以

上・・・。

もう、この街には‘居られないかもね’。ツナギに入れておいたM
Oも燃えてしまった

だろうし・・・。安心してよ。近いうちに出てってやつから・・・。」

博士「おいおい。無理じゃよ。そんな体じゃ・・・。」

其れを聞いてコナン「よし！それなら大丈夫だ！」

博士「へ？」

真弓は無言のままコナンを見ていた。

一方ジン達は黒のポルシェ356Aに乗ってホテルを後にしていた。

ウォッカ「え？この街であの小娘捜さないんですかい？」

ジン「ああ。‘無駄な事はしねえ性分’、なんだ。今頃は助けに来た男と逃げ出して

どっかの街にしょけこんでいるころだろおよ。」と続け様に「俺達に顔見られた街に暢気に

留まるような馬鹿な小娘じゃねえからな。」

すると後部座席から女の声がして「あら・・随分と入れ込んでいるのね。その女子大学生探偵の

お嬢ちゃんに。」

ジン後ろを向いて「フン。悪かったな……。アンジュ。ベルモット。

あの女をサポートする為に態々お前達程の女達を呼んだって言うのに……

とんだへまにつき合わせちゃってよ。」

ベルモット口紅をつけながら「ホント……。せっかく事情聴取前にハ
ンカチを渡してあげた

のに死んで正解だったわね。」

アンジュ「ええ……。本当よね。」

そしてウォッカ「また、アメリカに戻るんですかい？」

ベルモットタバコに火をつけながら「いいや・女優業はしばらく休業。しばらく日本で（こっ

ち）でゆっくりするつもりよ。ちょっと引っ掛かる事もあるからね。」

フッー。

そしてジン「アンジュ。お前はどうかんだ？また台湾に？」

アンジュ「いいえ。私も舞台女優はしばらく休業よ。ベルモット同様日本でしばらくゆっくり

するつもりで居るわ。」

ジン「そうか。」

そして「ん？」

信号が赤で車がとまり。

1人の女を見つける。

ジン「あの女は・・・？」

ベルモット「ああ。彼女？会場に居た客の1人よ。確か、香港のテレビ女優兼アナウンサー

の李玲明。その様子だと・・・誰かを待っているようね。」と同時に
「実はね、私彼女の事

がどうも、引っ掛かってね。、密かに小型カメラ付き盗聴器を忍ば

せたのよ。」

其れを聞いたジン「ほう。」

すると、1台の青ベンツが玲明の所に止まった。

そして運転席から1人の少女が出てきて玲明に一礼し後部座席のドアを開けた。

玲明その少女に微笑んで後部座席に乗り込んだ。

その少女は玲明が後部座席に乗ったのを確認しドアを閉め。

そしてジンモニターをつけた。

青ベンツの中。

玲明「悪かったわね。お休みの所態々迎えに来てもらって。夏美。」

夏美「いえ・・構いませんよ。此方こそ申し訳ありませんでした。玲明さん。」

奴等の‘仲間’があゝの杯戸シティホテルの坂川監督の偲ぶ会に参加すると言う情報を

得て貴女程の女性を態々香港からお呼びしたのに・・とんだ‘予想外’の事に巻き込んでしまっ

たのですから・・。」（奴等、広州）

玲明クスと笑い「別に構わないわ。丁度色々な意味で‘退屈’していた所だし、

こう言った‘仕事’をしていると案外‘予想外’の事は付き物よ。」

夏美「・・そうですか。」

と続け様に助手席に座っていたライカ後ろを軽く振り向いて「また、香港に戻られるんですか？」

姐さん？」

玲明タバコに火を灯し「いいえ……。テレビ女優兼アナウンサー業はしばらく休業よ。」

こっちでのんびりするつもりだから。」

ライカ「そうですか。」と続け様に「相棒。」

夏美「ん？」

ライカタバコに火を灯し「どうやら、彼女……。見つかったらしい。’。」

（彼女、渚。）

夏美「そうか。でも、相棒……。何故お前さんが其れを？」

ライカ「密かに姐さんの動向が気になってね……。ホテルにチラッとだけ入ったんだ。」

夏美タバコに火を灯し「成る程。それでか……。」

ライカタバコ吸いながら「ああ。」

夏美「あいつも……随分と、厄介な人達、に目を付けられたもんだね。」

ライカ「……同感だ。」

と続け様に「でも・・あまり深入りしない方が良いかも知れん。」

夏美頷き「そうだね。確かに、あの人達は兄様のご友人だ。だが、我々ワカバと組織は

別の組織だ。お互いに関与はしない・・そう決めてあるからね。」

と続け様に「相棒。」

ライカ「はいよ。」

夏美「悪いが・・ちよいと、あいつら、捜してきてくれねえか・・。一応、念の為に。」

ライカフツと笑い「了解した!!」

そう言い青のベンツはワカバのアジトに向けて走り去っていった。

一方、此処は再び黒のポルシェ356A。

ジンフツと笑い「成る程な……。あの李玲明って女はワカバの一員だったみてえだな。」

アンジュ「なら……心配ないわね。」

ベルモット「ええ。そうね。」

そう言い走り去って行った。

その翌日の博士の家。

コナンは変声期を使い自分の声で目暮警部に連絡を入れた。

そして連絡を終え・・・。

真弓「そうさ・・・。此れが奴等のやり方さ・・・あの女から私^{ヒト}が聞いた通りだ。

分かっただろ？相棒・・・。私達は誰にも正体をばれないで・・・このまま密かに追い続けないと

駄目だと言う事が・・・。」

コナン頷き「ああ。良く分かったよ！奴等を絶対に、ぶつつぶさねえと、いけねえって

事がな。」

哀は其れを聞いてただ黙っていた。

第13章。真弓黒の組織との再会。
（最終後編。）完。

第13章。真弓黒の組織との再会。（最終後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・一先ずワカバとコナン達のやり取りを書かせて頂く予定です。

因みにワカバの皆はコナン達の正体を知っています。

ですが・・・あえて黒の組織に知られないように

偽名で呼んでいます。もしかしたら、ラム事が出てくる

かも知れません。其れでは次章も今章同様お楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

コナン「ふう・・・何とか碇を助ける事が出来たな。」

と同時に「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第14章。ワカバとコナン。（前書き）

今章では、コナンがワカバに来て真弓の事をオウガに報告します。コナンもワカバの一員となっております。最後らへんに再びジンの兄貴様が少しだけですが・・登場します。

第14章。ワカバとコナン。

此処は、米花町にあるワカバのアジト。

此処にコナンが居た。そして、真弓が狙撃された事を報告していた。

オウガ「・・・そうか。真弓が・・・」

コナン頷き「はい。奴等に見つかりました。そして、不運にもジンに見つかり

‘狙撃’されました。そして・・・‘彼女について’の居場所も‘聞かれたそうです’。」

オウガ腕を組みながら「その‘彼女って’・・・国際警察の一員である。町原雪美だったか。

そして・・・組織に潜入調査しコードネームまで取得した。確か・・・ラム，だったか。」

コナン再度頷き「そうです。しかし、多分・・・，彼女の事，ですから、何処かの，隠れ家，

に身を潜め，国際警察の仲間，そして，FBI，に連絡を取っていると思います。」

オウガ「・・・そうか。」と続け様に「態々お疲れの所悪かったな。来てもらって・・・。」

コナン「いいえ。大丈夫ですよ。」と続け様に「そう言えば、オウガ様。碇の奴が狙撃された

日・・・玲明さんも会場にいらしていたそうですね。」

オウガ「ああ。広州の香港支部・・・そして台湾支部のメンバーが密かに来日してあの

坂川監督を偲ぶ会だったか・・・。来ると言う情報が入っていたんだが・・・。

どうやらあくまでも噂だったらしく結局は、会えなかった。そう
だ。」

コナン「・・・そうですか。」

オウガ「んで？真弓は？」

コナン「行き場所が無いので・・・密かにまだ博士の家にあれからまだ留まっています。」

オウガ頷き「・・・そうか。」と続け様に「大丈夫か？俺あいつと
長年の友人としての付き合い

だが結構、執念深い、男だぞ。」

コナン「ええ・・・分かっています。」と続けて・・・「もし何か
あれば、国際警察とFBI

に協力を要請しますから。」

オウガ「其の方がある意味、賢明、ちやあ、賢明、かもしれんな。」

コナン「其れでは、俺は今日の所は、此れで、」

オウガ「ああ。」

そして、コナンオウガの部屋から出ようとしたその時・・・

オウガ「コナン。」

コナン後ろを振り向いて「はい。」

オウガ「くれぐれも・・・真弓をそして、もう1人の子、を頼むな。」

コナンフツと笑い「了解しました。」

そう言い一礼し今度こそオウガの部屋を後にした。

そして、廊下に夏美が腕を組み壁に寄りかかっていた。

コナン夏美を見つけて「よう。お疲れさん！」

夏美「ああ。お疲れさん！相棒。」

と軽く挨拶をしそしてコナン「・・・夏美。」

夏美「はいよ!。」

コナン「例の件、について頼むな。」

夏美頷き「了解した。情報部に、頼んでおくよ。」

コナン「有難う。助かるよ。」

そしてコナンワカバを後にしようとしたその時に夏美に「コナン。」

コナン「何だ？」

夏美苦笑いをし「何か・・・この辺のこの時間、黒のポルシェ、が、
停まっている、可能性

があるらしいから・・・、気をつけた方が良い。」

其れを聞いたコナンフツと笑い「ご忠告どうも。」

そう言い軽く挨拶をして今度こそワカバを後にし居候先の毛利探偵事務所に戻って

歩き出した。

そして、国道の所に黒のポルシェ356Aが停まっていた。

コナン

夏美の言った通りになっちゃったな。

よし、今回の所は・・・普通に、小学生、としてそのまま通り過ぎよう。

そして・・・コナンは、何事も無かった、かの様にその場を歩き出した。

すると黒のポルシェの運転席の窓を開けジンがコナンを見ていた。

第14章。ワカバとコナン。完。

第14章。ワカバとコナン。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はジンがコナンに対して、疑問、を

持つ所から書かせて頂く予定です。

ひょっとしたらラムさんも出てくる可能性もあるかも

しません。其れでは次章も今章同様お楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ジン「・・・あのガキ。」と続け様にタバコに火を灯しな

がら「次章もよろしく頼むぜ。」

第15章。ジンコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町原雪美登場

今章は、ジンの兄貴様がコナンについて疑いを持ちます。

此方は前後編に分けさせて書かせて頂く予定です。

尚、ラムは後編に出てくる予定です。

第15章。ジンコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町原雪美登場

ジンタバコに火を灯し「あのガキ・・・誰かに、似ているような」。

と同時に一瞬嘗てトロピカルランドで取引を目撃した高校生探偵の
工藤新一の事が

脳裏に蘇った。

ジンタバコを吸いながら「・・・まさか、あのガキ？」

すると、少年探偵団のメンバーがコナンに駆け寄ってきた。

コナン其れを見て「よう！オメエー等！」と何時もの様に挨拶する。

歩美「ねえねえ・・・コナン君。これから博士の家でゲームやるんだけど・・・。」

一緒に行こうよ。」と微笑んで言った。

其れと同時に光彦「行きましようよ。コナン君。何か博士が新しいゲーム作っみたい

ですから・・・。」

元太「前よりかは良い出来みたいみたいだぜ。」

すると、コナン苦笑いをして「せっかく誘ってくれた所悪りいんだ

けど・・・

今日は蘭姉ちゃんが早く帰ってくるようになって言われててな・・・。
」

歩美「そっか。残念だけど・・・しょうがないね。」

光彦「蘭さんに言われているならしょうがないですね。」

そして元太「じゃ・・・新作のゲームの感想学校に言った時に知らせてやるよ。」

コナン頷き「ああ。分かった。」そして続け様に「じゃな・・・気を付けて行けよ。」

そう言い少年探偵団のメンバーと別れた。

すると、コナン自分を見つめる、嫌な目線と嫌な気配を感じた。

気になり後ろを見ると黒のポルシェに乗っているジンがずっとコナンの方を見続けた。

コナンも見返したが・・・直ぐにその場を去って行った。

ジンニヤリ「あのガキ・・・、やっぱり他の連中には無い何かがあるな。」

そう言い窓を閉め愛車を走らせた。

第15章。ジン、コナンへの疑い。そして・・ラム事唐沢裕子事本
名町原雪美登場。（前編。）

完。

第15章。ジンコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町原雪美登場

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はこの後編を書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお付き合い頂ければ

幸いです。

オマケ。

コナン「・・・・。次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第16章。ジンコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町原雪美登場

おはようございます。今章では前章の後編になります。

此方は長丁場となっております。

主に雪美とコナンのやり取りが中心となり・・・

最後にジンの兄貴様に見つかってしまいます。

第16章。ジンコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町原雪美登場

アレからコナンは先程のジンの目線が、気になっていた。

そして、ワカバでオウガに言われたあの言葉を思い出しながら・・・。

コナン。

・・・まさかな。もし・・・もしだ。俺が奴に、工藤新一、だってば
れたら、俺達は

263

もう・・・この世には、居ない筈だ。

そして、コナンの携帯が鳴った。

コナン「ん？誰だ？」

そう言い電話に出た。

コナン「はい。江戸川ですが・・・。」

すると女の声で「こんにちわ。コナン君。」

コナンその女の声聞いて驚き辺りを警戒する様に見渡しそして・・・
誰も来なさそうな

路地裏に駆け込み小声で「ま、町原さん？ど、どうしたの？僕の方
から前に1回連絡した

けど・・・繋がらなかったよ？？」

雪美「ああ。ごめんね。実はね・・・潜入調査後アレから携帯変えたの。彼等まだ私の事

‘追っているみたいだしね’。」

コナン「そう。でも良かったよ。繋がってさ。って・・・今は、唐沢さん、だっけ?？」

雪美フツと笑い「まあ・・・ね。一応ばれないように、偽名、使っているけどね・・・」

でも、その内ばれるでしょう。」と続け様にコナン「気をつけて’。ジンがこの近くに

‘いる事’、目撃したから・・・多分、近い内か分からないけど町原さんに、会いに行く’、と

思う・・・。奴は結構、執念深い、から・・・。」

雪美「『ご忠告、どうも有り難う。』と続け様に「あ・・・そうそう。碇ちゃん。『見つかって

しまったんだって、？」

コナン頷き「うん。杯戸シティホテルの旧館の屋上で・・・。」

雪美「・・・そっか。」と続け様に「ねえ、大丈夫なの？彼女？」

コナン「まあ・・・、何とか危機一髪、ね。」と続け様に「後、奴は町原さんの『居場所』も

聞いてきたらしい・・・。」

雪美「・・・そうか。」と続け様に「んじゃ・・・この町に長居は無用だね。」

其れを聞いたコナン「でも、行く所、あるの？」

雪美「ああ・・・まあ、うち（国際警察）とFBIに連絡したら・・・。」

今、うちのメンバーがFBIの赤井さんとその他のメンバーが居るみたいだから・・・。

そっちに、行くよ。」

コナン「そうか。なら、一先ず安心だね。」

雪美「ええ。そうね。」と続け様に「あ、そうそう。赤井さんが近い内にコナン君に会いたい

とも言っていたわ。だから、多分・事前に赤井さんに連絡先を教わったと思うけど・。

‘分かる’??’

コナン「うん。前会った時に、連絡先交換、したから・。」

雪美「そう。なら大丈夫そうね。」と続けて「でも、赤井さん。たまに、音信不通、に

なる可能性もあるから早めにかけた方が良くかもよ?」と笑いながら言った。

其れを聞いたコナンも苦笑いをし「うん。‘そうさせてもらうよ。’」

そして雪美「じゃ・・悪いけど、これ以上、長話、すると・・アレだから。」

コナン頷き「有難う。態々、連絡入れてくれて、。」

雪美「いいえ。じゃ・・また今度、近い内に、会えたら会いましょう。」

そう言い携帯の電話が切れた。

すると、雪美「・・あら？」

1つの機械を見つける。

そして確認すると其れが黒だと分かった。

雪美一瞬冷や汗をかき・・。

まさか！！！！

今の‘会話’・・・。

‘聞かれていた’？！

そして、その機械を音が拾われないように二重に包み。

急いで別の所に連絡を入れた。

「俺だ。」

雪美「あ・・・赤井さん？私です。雪美。」

その声の主は、FBI捜査官の赤井秀一だった。

赤井「お？雪美か？どうした？」

雪美「あ・・・唐突ですみませんが今どちらにいらっしやいます？」

赤井「米花町の国道を走行中だ。お前の事が何か知らんが、どうも気になってな、」。

と続け様に「お前の隠れ家に、向かっている、所さ。」

其れを聞いて雪美まるでホッとしたかのか「・・・良かった。」

赤井「何だ？どうかしたのか？」

雪美「ええ・・・今さっき丁度コナン君と連絡していたんですが、どうも・・・厄介な

オマケ、が付いていたみたいで・・・。」

赤井「厄介なオマケ、？」と同時にフツと笑い「まさか、奴等の盗聴器、だとか？」

すると雪美顔をしかめて「・・・多分、そうかと。」

赤井「分かった。もうソロソロ着く。そうしたら拾ってやつから。其れまで、気になる、と」

思うが、其処で待機していてくれ、」

雪美「はい。分かりました。」と続けて「・・・お手数をお掛けします。」

赤井「気にするな。じゃ・・・後でな。」

雪美「はい。」

そう言い携帯を切った。

そして一息ついた。

次の瞬間・・・。

「よお。‘ やつと会えたな’。ラム。」

雪美その声を聞いて思わず背筋が凍りその場で、固まってしまった。
’

第16章。ジッコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町
原雪美登場（後編。）

完。

第16章。ジンコナンへの疑いそして・・・ラム事唐沢裕子事本名町原雪美登場

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は雪美とジンの兄貴様の久々の対面を

書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雪美「・・・参ったわね。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しくお付き合いの程お願い致します。」

第17章。雪美、ジンに接触。(前書き)

今章では、雪美とジンの兄貴様が接触します。

尚、この章では多少残酷シーンがあると思われますので

ご観覧には十分ご注意ください致します。

第17章。雪美、ジンに接触。

雪美その声の主を見て驚いて「ジ・・・ジンッ?!」

うそ・・・。

どうしてここに?!

ジンニヤリと笑い「どうした? 久々の再会なんだ。そんな顔するな。」

雪美「・・・どうして此処が、分かったの?」

ジンタバコに火を灯し再びニヤリと笑い「悪いな・・・お前の所に仕掛けた盗聴器に

‘発信器’も内臓されていたんだ。」

雪美「なッ！！」

ジン「その発信器を頼りに此処に、たどり着く、事が出来たって訳だ。」

すると、雪美サイレンサー付きの銃をジンに素早く向けた。

其れを見たジン面白そうに「・・・ほう。」

雪美「確かに・・・其れに気づかなかった私も、馬鹿、だったわ。でもね・・・。」

どうせ、貴方、に、殺^{ばら}される、位なら・・・少しでも、国際警察の一員、として

、抵抗、しないよね・・・。」

ジンフツと笑い雪美に近づいてきた。

雪美「来ないでッ！！撃つわよッ！！」

ジン再びニヤリと笑い「面白れえ。撃てるもんなら・・・撃ってみ

ろ、。」と続け様に

「だが、お前が俺を撃てたらの話、だかな・・・。」

其れを聞いた雪美は顔をしかめた。

そして更にジンは「一言言っておくぞ？お前に、俺の事は撃つ事な
んぞ出来ねえ。」

そして、雪美の側により耳元で「そうだろう、？雪美、？」

と囁いた。

雪美「・・・・・・ッ！！！」

そう・・・。

実は、ジンと雪美は、幼馴染、だった。

それ故に互いの事は何となくだが、知っていた。

と同時にジン「俺は、別に、お前を殺しに来たんじゃないやあねえんだぜ？」

そう言い雪美を抱きしめた。

すると無線でウォッカが「兄貴ッ！！ソロソロ其処からずらかった方が良さそうですね！」

赤井の奴のシボレーがラムの隠れ家の前にッ！！」

すると、ジン雪美から離れて無線でウォッカに「分かった。直ぐ戻る。」そして雪美を再度見て

「また、会いに来る、」。

そう言いその場を素早く後にした。

雪美はただその場に倒れ込んでしまった。

そして小声で寂しそうに「・・・ジン。」

と呟いた。

すると、赤井が来て「待たせたな。大丈夫か？」

雪美小さく頷き「ええ。」

そう言い事前に用意してあった荷物を持ち自宅を出て赤井のシボレ
ーに乗り込みその場を

素早く後にし国際警察とFBIがたむろしているホテルへと向かった。

第17章。雪美、ジンに接触。完。

第17章。雪美、ジンに接触。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございました。

次章は国際警察とFBIとの接触を書かせて頂く予定です。

です。次章もどうぞ宜しくお願い致します。

オマケ。

雪美「……。」と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第18章。国際警察とFBI。（前書き）

今章では、雪美の所属である国際警察そして赤井さんが所属しているFBIについて書かせて頂きました。

と言いましても・・・赤井さんとその国際警察は2人しか出ておりませんが（苦笑；；）

と同時にコナン君達も中盤から後半辺りに出てきます。

第18章。国際警察とFBI。

アレから、赤井と自宅（隠れ家）から出た雪美は、国際警察とFBIが潜んでいる

米花町にある某ホテルに居た。

そして……。屋上に1人タバコを吸いながら携帯のメールを見ていた。

メールは嘗てのその前に嘗ての同僚であり、そしてFBIで今は殉職した

久家川正毅くげかわまさきからのメールだった。

そのメールにはこう書いてあった。

親愛なる俺の相棒雪。パートナー

この仕事がすべて片付いたら・・・俺と共に此れから、ずっと一緒に、居て欲しい。

正毅。

そう・・・正毅と雪美は嘗ての、恋人同士、だった。

しかし、それ以前に・・・組織と広州の2つを追っていた正毅は広州の、罠、にかかって

殉職してしまった。

雪美「・・・正。」

そう言いタバコを口に加え直しフツと笑い空を見た。

「何故か知らないけど・・・こう言った、寂しそうな空、は、悲しくなるのよね。」

と呟いた。

すると、赤井と国際警察の並河大輔なみかわだいすけが屋上に入って来た。

並河「ん？」

そう言い雪美に気づき側によって来た。

其れと同時に赤井も続く。

雪美、並河に気づき「・・・並河の兄^{あに}さん。」

雪美と並河は兄妹分だ。

並河「よ！雪美！久々だな。」と笑顔でそして続け様に「おいおい・

・何、しけた顔、してんだ

よ。お前らしくもねえ・・・。」

雪美フツと笑い「そう？」

そして携帯灰皿を取り出しタバコを消し、またもう1本タバコを取り出し火を灯す。

すると、赤井が缶コーヒーを取り出し雪美と並河に渡し、「おごりだ」。2人とも。」

雪美「すみません。赤井さん。」

並河「ああ……。すまん。有難う。頂くよ。赤井。」

そう言い受け取った。

と同時に赤井「その様子だと……。もしかして、奴に再会、してしまっただけかな？」

とタバコに火を灯し言った。

雪美再度フツと笑い、「いいえ。ただ……。思い出してしまっただけですよ。」

嘗て私を、愛してくれて、そして・・・アレから直ぐに、消えてしまった、男をね・・・」

そう言いながら缶コーヒーの蓋を開け飲み始めた。

並河「・・・本当に、それだけか？」

雪美「ええ。本当に、それだけ、ですよ。兄さん。」

並河はただ黙っていた。

しかし、赤井は「お前の隠れ家に奴が仕掛けてあった盗聴器、それには

「厄介なオマケ」が付いていた……。」と同時に「だから、お前は早く其処から

「出たかった」。違うか？」

雪美苦笑いして「……尋問、みたいな事止めてくださいよ。赤井さん。」

人間誰にだって「言える事」と「言えない事」があるんですから……。」

そう言い少し赤井達から離れ別の場所に移動した。

と同時に「あ・・・コーヒー、ご馳走様、でした。」

そう笑顔で言った。

と同時に隠れられる場所を見つけて其処に入り1つの写真を見た。

其処には嘗て・・・共に遊んだ幼い頃の雪美とジンの姿だった。

と同時に・・・。

雪美。

‘言える訳が無いわよ’。

ジンと、‘再会し’・・・。

そして、そのジンと私が、‘幼馴染同士’、だなんて・・・。

‘言える訳が無い’。

昔は・・・彼も、‘とても優しかった’。

でも・・・何かが崩れ・・・いつの間にか、冷酷無慈悲、になっていた。

そう呟き写真を大事そうに懷にしまいそしてタバコを吸いながら・・・。

「・・・参っちゃったな、もう。」と呟いた。

すると、「何が、参っちゃったな、なの？」

少年の声がした。

雪美その声に驚き思わず後ろを振り向いた。

すると其処にはコナンが居た。

雪美「・・・コッ、コナン君?!」

コナン「久しぶり。町原さん。」

雪美「ど・・・どうして此処に?!」

コナン「赤井さんに、呼ばれたんだ、。ちよつと、野暮用、があるから

来て欲しいってね。」と微笑んだ。

雪美「・・・そっ、そうなんだ。」

と同時に「もちろん！俺もおるで！」

と元気のいい関西弁が飛び出した。

雪美「！！その声！！へっ・・・平次君？！」

コナンの後ろから服部も出てきた。

服部「せや。俺や。久々やお。町原の姉ちゃん。」

雪美「・・・あ、ああ。久しぶり。」と続け様に「何時来たの？」

服部「ついさっきや。でもな・・・東京に着いたんは昨日の夕方やで。」

雪美「・・・そ、そうなんだ。」と続け様に「んで？此れ・・・お父さん知ってるの？」

服部「ああ。今回は親父に言われて来たのもあるんや。」

と続け様に「此れ・・・夏美にも頼んだんやけど・・・。町原の姉ちゃんにも

‘頼んでおこうかと’ 思ってたの。」

雪美「頼み事、？」

服部「せや。先週の金曜辺りか・・大阪で銀行強盗があってん。その犯人は4人なんや

けど・・その犯人は男女混合なんや。一組目は関西出身。もう一組目は関東出身。

で・・。その関西出身の奴等が関東に逃亡したんや。」

雪美「でも・・平次君。どうして其れを私に日本警察でも良いんじゃない？」

服部「・・・確かに。そう言われて見ればそうなんやけど・・・でも、
此れがそも、行かない、

んや・・・。」

其れを聞いて雪美再びタバコを加えなおして「どうして？」

コナン「今回の強盗事件には、黒幕、が居るといふ噂なんだよ。」

雪美「黒幕、？」

服部「ああ・・・まだ、確証、はないんやが・・・多分ワカバと対
立している

‘ 広州 ’ だと思うで。 」

雪美 「・・・成る程。 そうなると下手に、 日本警察、 は、 手が出せない、 と言うわけか。 」

コナン 頷き 「ああ。 其れに・・・この4人組は多分、 広州の末端、
広州こうしゅう関連だと

ワカバが基本的に主導権を握っている。 ワカバの許可無しに下手に動けねえんだ。 」

雪美 「そう。 んで？ この事はオウガさんには？ 」

コナン「夏美經由で多分・・・情報が行っていると思う。」

雪美「そっか。」と同時に「了解した。早速、調べてみよう。」
と同時に

「君等には、昔助けてくれた借り、があるし・・・この後は、特に仕事、無いしね。」

服部「おおきに。恩にきるわ。」

雪美「いいえ。」と続け様にタバコを携帯灰皿の上で揉み消しコーヒーを飲み干し

その場を後にしようとした。

すると、コナン「ねえ、町原さん。」

雪美「ん？」

コナン「こんな事聞くのもあれなんだけど・・・町原さんってジント
何か関係があるの？」

雪美其れを聞いて一瞬驚いた表情を見せたが素早く元の表情に戻し
フツと笑い

「It's a big secret... I'm so

r r y I c a n ' t t e l l y o u . . . 」そして続け様に

（秘密よ．．．秘密．．．ごめんなさい。教える事は出来ないわ。）

「A S e c r e t m a k e s a w o m e n w o m e n . . .
」。

（女は秘密を着飾って美しくなるんだから。）

コナン達はその台詞を聞いて驚いた。

と続け様に雪美「何て．．言うのはほんの、冗談、（ジョーク）
で．．。

本当は、何も無いわ、。」と続け様に「だから、安心してよ、。」

そう言い「じゃね。」と屋上から自分のホテル部屋に戻った。

すると服部「なあ・・工藤。」

コナン「ん？」

服部「町原の姉ちゃんには悪いけど・・・絶対何かあるねん。」

コナン「服部もそう思ったか？実は、俺もなんだ。」

服部コナンを見て「お前もか・・。」

コナン頷いた。

すると並河が「え？　工藤，？」

服部とコナンハツと我に戻り・・・。

コナン慌てて「はは・・・。それは平次兄ちゃん、新一兄ちゃんと仲間として、付き合い長い，か

らそしてあまりにも僕が新一兄ちゃんにそっくりに見えたそうだから・・・。

その癖で僕の事思わず、工藤，って呼ぶようになったんだよ。」

と続け様に服部を見て「だよな？　平次兄ちゃん？」

服部笑いながら「せっ・・せや！このボウズがあまりにも工藤そつくりやからな・・」

「ついつい見間違えるんや。」

並河「成る程ね。」

と続け様に「じゃ・・俺等もソロソロ降りようかボウズ。」

コナン頷き「うん。平次兄ちゃん。」

そう言い屋上から降りて行った。

と同時に赤井「じゃ・・俺達もソロソロ、戻るとしよう。並河。」

並河「ああ。そうだな。」

そう言い屋上から各自の部屋に戻って行った。

第18章。国際警察とFBI。完。

第18章。国際警察とFBI。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・雪美が服部君に頼まれた調べ物を

調べる所を書かせて頂く予定となっております。

其れでは次章も今章と同様にお付き合いして頂ければ

幸いです。

オマケ。

雪美「次章も宜しくどうぞ。」

第19章。雪美調査。（前書き）

今章では主に雪美が中心となります。

ですが、最後辺りですかコナン君達も出てきます。

第19章。雪美調査。

此処は雪美の部屋。アレから屋上で服部達に頼まれた大阪で先週の金曜辺りに起こった

大阪の銀行強盗事件について調べていた。

雪美

大阪って・・・。

確か広州の大阪支部があるわよね。

と同時にもしかして・・・ワカバの玲さんが碇ちゃんが狙撃された日に杯戸シティホテルの

坂川監督の偲ぶ会に出席していたのと、関係、があるのかしら？

そしてパソコンを触り調べ続けて続けた。

一方コナン達と言うと・・・。

コナンはワカバへ。

服部は父が居る大阪府警本部に連絡していた。

コナン「はい。この事はうちの情報部にも夏美経由で頼んでおきました・・・

情報部だけは大変だと思われたので町原さんにも調査依頼をお願いします。

はい。恐らく今・・・調査してくれている頃だと思います。」と続
様に「其れで？」

其方は？そうですか。分かりました。では引き続き宜しくお願い
します。オウガ様。」

そう言い電話を切った。

一方服部も。

「せや。今多分調べてもうてる所やと思う。ワカバにはボウズか
ら連絡入れてもらうた。」

と同時に「んで？親父は此れからどないするんねん？ああ・・・分
かったわ。」

近い内にワカバに和葉のおとんとくるんやな。んじゃ・・オウガハ
ンに伝えとくわ。」

と続け様に「おおきに。じゃ・・・親父も氣いつけてや。」

そう言い携帯を切った。

そしてコナンに「工藤。近い内に俺の親父達ワカバに来るらしいか
ら・・よろしゅうな。」

コナン頷き「ああ・・。分かった。連絡入れておいてくれ。」

服部「ああ。」　そう言い再び携帯を取りワカバに連絡を入れた。

第19章。雪美調査。完。

第19章。雪美調査。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はワカバについて書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

雪美「次章もどうぞ宜しくね。」

第20章。ワカバ（前編。）（前書き）

今章は主にワカバが中心となります。

この章は前後編でお送りいたします。

第20章。ワカバ（前編。）

此処は再びワカバ。

オウガは一通の連絡を受けていた。

オウガ「分かった。じゃ・・近い内に平蔵さんが遠山さんと此方にお見えになるんだな。」

日時が決まり次第また連絡くれ。じゃ・・頼んだぞ。平次君。」

そう言い電話を切った。

すると、ライフエイが部屋に入って来て「オウガ。」

オウガ「ライフエイか。どうだ？分かったか？」

ライフエイ調査報告書を目の前に出し「どうやら・・服部君達の、
睨んだ通り、」になった

よ。
」

オウガ、ライフエイから受け取った調査報告書に目を通しながら「
・、黒幕、」はやはり

・、奴等広州か。、」

ライフエイ腕を組みながら壁に寄りかかり「ああ。」と更に続けて
オウガ「で？その

関西と関東出身の4人組は誰だか分かるか？」

ライフエイ「もちろん。ちゃんと調べたぜ。」　そう言いその4人の写真をオウガの前に置いた。

其れを見てオウガ「この4人が？」

ライフエイ頷き「ああ。左からの男女は関西出身の大原千里。そして大原英志^{えいじ}

んでもって・・・その右のは関東出身で^{えいかわなみ} 穎川奈美そして、^{えい} 穎川涼（えいかわりよ

う）だ。」

その事を聞いたオウガは「ちょ・・・ちょい待て！ライフエイその4人って・・・

まさか・・・身内、か？」

ライフエイ領き「ああ。両方とも姉弟だ。」と更に続けて「んでもって・・・この4人は

広州の仲間だ。」

オウガ「何?! 其れは、本当か、?! ライフエイ?!」

ライフエイ「ああ。と言ってもこいつ等は、末端、だけどな。」

オウガ「んで? この4人の現在の居場所は?」

ライフエイ「神奈川にある横田町の某ビルにある関東組の隠れ家に身を潜めている。が・・

詳しい場所まではまだ・・・。」

オウガ「・・・そうか。」と続け様に「悪い。ちょっと夏美を呼んでくれ。」

ライフエイ頷き「ああ。分かった。」

そう言い夏美に連絡を入れた。

第20章。ワカバ（前編。）完。

第20章。ワカバ（前編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

尚・・・予めお断り致しますが・・・。

横田町は個人的に勝手に作らせて頂きました。

多分・・・神奈川にはないと思います（笑；；）

のでご了承下さい。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ライカ「相棒。」

夏美タバコに火を灯しながら「あいよ。相棒。」

ライカ「出番だよ。」

夏美「了解。」と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第21章。ワカバ（後編。）（前書き）

今章は前章の続きです。

第21章。ワカバ（後編。）

アレからライフエイからオウガに呼び出しが掛かった夏美は自分の部屋からオウガの部屋に来てい

た。

夏美オウガに一礼して「お呼びですか？^{あに}兄様？」

オウガ「夏美。お前確か・・・神奈川県警に知り合いいたよな？」

夏美其れを聞いて「え・・・ええ捜査一課に兄貴分がいますけど・・・」

と続け様に「其れがどうしました？」

オウガ夏美にライフエィの報告内容を話した。

夏美「成る程・・・その銀行強盗の犯人4人組は広州の末端で・・・今横田町に。。」

オウガ頷き「ああ。そうだ。まだ、詳しい場所は断定、出来て

いないんだがな・・・」と続け様に「それに・・・横田町は神奈川
県警の管轄だ。下手に幾ら広

州がらみと言えど・・・あちらの許可が無いと此方もこちらで下手に
動けんからな。」

夏美「分かりました。直ぐに兄貴分と連絡取って見ます。」

オウガ「頼むぞ。」

夏美「はい！」　そう言いオウガの部屋を急いで出た。

そして、夏美自分の部屋に急いで戻り携帯を取り神奈川県警の捜査一課に連絡を入れた。

すると男の声で「はい！此方神奈川県警捜査一課！」

夏美「あ、もしもし。神奈川県警捜査一課ですか？お忙しい中申し訳ありません。」

私、橘夏美と申しますが・・・片品^{かたしな}警部いらっしやいませんか？
か？」

片品「おう！夏美か？久々だな。俺だ！」

其れを聞いた夏美「あ、片品の兄さん？良かった……。今平気？」

片品「ああ。大丈夫だよ。どうした？」

夏美「あのね……。実は……。」

そう言いオウガ達と今まで話した経歴等を説明した。

其れを聞いた片品「成る程な。よし！分かった！警視に俺から頼んでみよう！」

夏美「有難う。助かるよ。ごめんね。忙しい所。」

片品フツと笑い「・・・何。可愛い妹分の為だ。此れ位構わんさ。」

と続け様に「じゃ・・・許可下り次第、連絡入れる。」

夏美「了解。それじゃね。」

片品「ああ。またな。」

そう言い電話を切った。

そして夏美「よし！兄様ご報告だ！」

そう言い再びオウガの部屋に戻って行った。

第21章。ワカバ（後編。）完。

第21章。ワカバ（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章もワカバ・・・そして国際警察とFBI・・・

ともしかしたら・・・ジンの兄貴様方も出られるかも

しません。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

哀「ねえ？ 作者さん。」

N「は・・・はい。哀ちゃん。」

哀「私の出番少ないのは・・・気のせいかしら？」

N「た、多分。気のせいですよ。」

哀「あら？そう？」と続け様に「ジン呼ぶわよ？」

N「そ．．それだけはお勘弁を．．。（笑；；）」

哀「まあそれはそれとして．．次章もどうぞ宜しく。」

第22章。ワカバとFBIと国際警察。(前編。)(前書き)

今章と次章はワカバとFBIと国際警察について

書かせていただきます。

尚・・・予告にジンの兄貴様が出てくると申し上げました

が・・・其れは後編あたりにでもと言う事でご了承

頂きたいと思います。

第22章。ワカバとFBIと国際警察。（前編。）

アレから自分の兄貴分である片品警部に連絡を入れた夏美は再びウガの部屋に戻って来ていて、

報告をしていた。

そして、オウガ「・・・そうか。神奈川県警の警視に頼んでくれると言う訳か。」

夏美「はい。」

ライフエイ「んで？神奈川県警の警視って誰だったんだっけ？」

夏美「実は・・・私達の兄の雄大なんだよ。」

ライフエイ「へ？そうなのか？でも、雄大って言ったら・・・お前と同じ格闘隊じゃ・・・」

夏美「ん・・・まあね。元々はうちの伯父が警視だったんだけど、伯父体悪くしてしまった

らしくてね・・・。それで、新しい人が決まるまでの期間の、臨時警視、ッう訳・・・。

ならしいんだけど・・・未だに新しい人が決まっていけないので・・・兄さんがね・・・。」

ライフエイ「・・・成る程ね。」と続け様に「じゃ・・・なんで兄さんに直接連絡入れないんだ？」

夏美頭かきながら苦笑いをし「兄さんの神奈川県警警視部屋直通番

知らんのよ・・・。」

と続け様に「聞こうとしたが・・・聞ける訳でもないし・・・。」

ライフエイ軽くため息を付き「お前なあ・・・。」

オウガ笑いながら「はは・・・まあ仕方ないよ。人には聞けるものと聞けないもんがあるからな

夏美の性格からして・・・それは、無理、そうなんだ。」

するとノック音がして・・・。

オウガ「どうぞ。」

するとライカが入って来て「失礼します。兄^{にい}様。ちょっと相棒にお客様が来ている

んで少々お借りしても宜しいですか？」

オウガ「ああ。構わんよ。」

そう言い「夏美行ってやれ。」

夏美「はい。」と続け様に「では、申し訳ありませんが私また外させていただきます。」

そう言いライカの元に行き「んで？お客さんってのは？」

ライカ「雪美さんと・・・お前が良く知っているFBIの兄貴分だよ。」

夏美「ハハッ・・・あの男^{ヒト}か。分かった今行く。」と続け様に「ライカ。」

ライカ「あいよ。」

夏美「何処で待っていただいている？」

ライカ「応接室だ。」

夏美「有難う。」　　そう言い応接室に向かった。

第22章。ワカバとFBIと国際警察。（前編。）完。

第22章。ワカバとFBIと国際警察。(前編。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編について書かせて頂きたい

と思います。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

N「・・・次章もどうぞ宜しくお願い申し上げます。」

周りを見渡し冷や汗をかきながら

「では！失礼ッ！」

逃げる！！

ジンニヤリ「あの作者め・俺が来る事どうやら

勘付いて逃げ出したみてえだな。」

と続け様に「俺からも次章の事よろしく頼むぜ。」

第23章。ワカバとFBIと国際警察。（後編。）（前書き）

今章は前章の後編です。

最後あたりにジンの兄貴様が少し出てきます。

尚・・・この小説での夏美とジンの兄貴様との

関係は‘恋人’同士ではありません。

今回の小説では夏美の実の姉が出て来る予定です。

その姉の恋人と言う設定で進めさせて頂こうと

思います。読者の方々には混乱させて頂くかもしれませ

んが・・・何とぞご理解、ご了承の程宜しくお願い致します。
す。

第23章。ワカバとFBIと国際警察。（後編。）

此処は、ワカバの応接室。

此処には雪美と赤井が居た。

するとノック音が聞こえ夏美が入って来て「お待ちせしました。」と続け様に雪美を見て

「久々だね。雪美。」と続け様に赤井を見て「お久しぶりです。秀さん。」

雪美軽く挨拶をしそして赤井も「悪いな。突然に・・・」

夏美「いえ。構いませんよ。」と続け様に「で？今日はどういったご用件で？」

雪美「1つのメモリーカードを取り出した。」

夏美「こいつは??」

雪美「これ、実は平次君達も前ね私の所に来て先週の金曜に起こった銀行強盗事件に

付いて調べて欲しいと依頼があったの。」

夏美「雪美の所にもかい?」

雪美頷き「ええ。そう。」と続け様に「此れは多分・・・あんたの所の情報部でも

調べが付いていると思うんだけど・・・黒幕は、広州、でその銀行強盗の4人組が

広州の末端だって事も・・・。」

夏美「んでもって・・・その4人組は今横田町の隠れ家に身を潜んでいるって訳だ。」

其れを聞いて赤井「横田町って・・・アレか、確か神奈川県警の管轄だったよな？」

夏美「ええ。そうです。」

すると、夏美の携帯が鳴った。

夏美「ちよつと失礼！」

そう言い携帯のディスプレイを見た。

すると神奈川県警からだった。

夏美「はい！橘です！」

すると男の声がして「おう！久々と言うべきか？我が妹よ。」

夏美その男の声を聞いて「ふえ？その声、ゆ、雄大兄さん？？」

雄大「ああ。俺だ。」と続け様に「片品さんから聞いたぞ。その銀行強盗の事件の4人組が

横田町に潜んでいると聞いたんで・・・ワカバの連中を出させて欲しいと・・・

様はそう言う事だろ？」

夏美「ええ。実はそうなのよ。」と続け様に「頼める？」

雄大「勿論だ。許可しよう。」

夏美わざとらしく笑いながら「有難うございます！橘雄大警視！」

雄大苦笑いをして「おいおい……。よせよ。俺はそんなお偉いやつじゃないよ。」

夏美「でも……事実上そうでしょ？」

雄大「ま……まあな。」と続け様に「早く……次期警視が見つかる
といいんだが……。」

俺も本音ではワカバに戻りたいよ。」と苦笑い。

夏美「・・・しょうがないでしょう。伯父さんが倒れたんだから・・・
兎に角！それまで

‘辛抱’！‘辛抱ッ！’

雄大「・・・そうだな。」と続け様に「じゃ・・・そう言う事だな。」

夏美其れを聞いて改めて「本当に有難う！兄さんっ！助かりました。」

雄大「いいや・・・兄弟なんだからよ。助け合わなきゃな。じゃ・・・

また何かあったら

何時でもこっちに連絡を入れてくれ！」

夏美「了解。」と続け様に「それじゃ。」

そう言い電源を切り・・・ドアの前に待機しておいた雷龍を呼んだ。

雷龍、夏美に一礼をし「お呼びでしょうか？姉者？」

夏美「今さっきうちの兄さんから連絡来た・・・。横田町にワカバ突入許可が下った

急で悪いが其れを兄様^{あに}にご報告しに行ってください！」

雷龍「畏まりました。」　そう言いオウガの部屋に向かった。

と続け様に雪美「横田町にワカバ何名突入させるの？」

夏美「いや・・・其処までは分からない。だが・・・兄様のご命令次第だろう。」

赤井「でも、お前はどの道行くんだろう？」

夏美頷き「ええ。私とライカは恐らく・・・リーダーと副リーダーですの・・・」

行く事は確かでしょう。」

雪美「ねえ……。私もその現場に行ってもいいかしら？」

夏美フツと笑い「別に大丈夫だと思うけど……。あんたん所（国際警察）の上層部に

許可ちゃんとしておきなよ。」

雪美「了解したわ。」

そう言い窓側に歩いていった。

すると雪美の顔が再び青ざめた。

その先には黒のポルシェ356Aが停まっていた。

すると、赤井が雪美の側により「ほう。どうやら・・・此処まで、嗅ぎつけたようだな。」

と笑いながらいった。

夏美

ん？待てよ？

今日・・・ジンさん来る予定だったけ？

すると、ライチュウを呼び「なあ・・・今日ジンさん。来る予定だった？？」

ライチュウ頷き「はい。お兄様^{オウガ}とお会いする予定になっていましたから・・・。」

その事を聞いて雪美達を見て「今日の所はとっとと帰る事をお勧めするよ・・・。」

赤井フツと笑い「そうさせてもらおうか。」と続け様に「雪美。行くぞ？」

雪美ハッと我に返り「え・ええ。」と続け様に「じゃ・このメモリーカード置いて行く」

から後でライフエイさんにでも渡しておいてよ。」

夏美頷き「了解した。」と続け様に「あ・其れと。お手数をお掛けして申し訳ないけど・」

裏口から出る事をお勧めするよ・」。

赤井再びフツと笑い「分かったよ。」と続け様に「じゃ・また近い内に連絡する。」

そう言い雪美と共に裏口から出て行った。

そして・・・。

夏美安堵の表情を見せて一息つき応接室の喫煙席に座り何時もの様にタバコに火を灯そうと

したその時・・・。

「随分とまあ・・・警戒されているもんだなあ、なあ・・・？夏美。」

夏美その声を聞いて「・・・え？」

うそ？

そしてライチュウ「あ・・・ジン様〜！」

そう言いジンの所に行き懷き始める。

ジンニヤリと笑い「よお。ライチュウ。」

そう言いライチュウの頭を撫でた。

夏美「・・・ジ、ジンさん。」

うそ・・・？

兄様のお部屋に居たんじゃ・・

なかったの??

そう頭の中で混乱している夏美であった。

第23章。ワカバとFBIと国際警察。(後編。) 完。

第23章。ワカバとFBIと国際警察。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて・・・次章は多分夏美の姉が出てくる予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

ライチュウ「はは・・・まさか。ジン様もお見えになられるとは予想外だったな・・・。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第24章。夏美の実の姉梓登場。（前書き）

今章では夏美の実の姉の梓が登場します。

此れは前章でも述べさえて頂きましたが、

この小説での夏美とジンの兄貴様の設定は恋人同士では

ありません。姉の恋人と言う設定です。ので

予めご了承ください。

第24章。夏美の実の姉梓登場。

此処はワカバの応接室。アレから夏美は、赤井達と別れ喫煙席で一服していた。

その時に、何とオウガの部屋にいるはずだったジンが現れた。

夏美思わず固まってしまった。

しかし、夏美の相棒であるライチュウはとても嬉しそうにジンの所に擦り寄って来た。

夏美はその様子を見て思わずため息交じりの苦笑いを浮かべ頭をかいていた。

ジンニヤリと笑いながら「どうした?」

夏美タバコ吸いながら「いえ……。ジンさんが、此方に、来る事は
何となく予想出来て

いましたが……。まさか、応接室、まで来るとは思っても見ませんでした。」

と苦笑い。

ジン「ほう。そうか。」

そう言い夏美の隣に座りタバコに火を灯した。

と続け様に「んで？お前もラムの奴を、匿っていたのか、？」

夏美「あ．．いや。‘ 匿う ’ と言うか．．．偶々私に用があつて．
・来ていただけです。」

ジンニヤリと笑い「ほう。そうか。」と続け様に「本当に、それだけ、か？」

夏美頷き「え、ええ。本当に、それだけ、ですよ。ジンさん。」

すると応接室に1人の女が入って来て「ジン。あまり私の妹を、苛めないで、くれるかしら？」

とクスツと笑いながら言った。

夏美その女を見て「あ、梓姉さん?!」と驚いた。

と続け様にどうして此処に??と疑問視しながら見ていた。

その女は橘梓雄大^{たちはなあずさ}の妹でもあり、夏美と有理の実の姉でワカバの

秘密情報局の局長でもあり、ジンの恋人でもある。

ジン梓を見て再びニヤリと笑い夏美の肩を軽く叩きながら「別に、苛めちゃあいねえぜ’。

只‘可愛がってやっているだけだ’。なあ・・・?夏美?’と夏美を見ながら言った。

夏美引きつり笑いをしながら「は・・・はい。ジンさん。」そう言いそして続け様に

「どうして此処に？姉さん・・・今日、オフ、だったんじゃない？」

梓「前の仕事の報告も兼ねて来たのよ。」と続け様に「基本的にジ
ンが此処に来ると言う事

は私も此処に來ると同じ事。それを覚えておいてね。」

ジン「其れに・・・仕事以外俺がこいつを、手放すわけねえからな、
」

夏美「そ・・・そうですか。」

すると夏美の電話が鳴った。

夏美「ジンさん……。電話出て良いですか？」

ジン「ああ。構わねえぜ。」

そう言い夏美の肩から手を外した。

そして、夏美タバコを灰皿の上に消しジン達から離れた所に行き電話に出る。

「はい！橘です！」

「あ……。夏美か？俺や。」

夏美「あ、平さんですか？お疲れ様です。」

電話の主は平次からだった。

服部「お疲れさん。」

夏美「それで？今日はどう言ったご用件で？」

服部「あんな……。此れオウガハンにも知らせたんやけど……。近い内に俺の親父と」

和葉のおっちゃんがワカバに来说う話をしたんや……。」

夏美「お父様方が此方にですか？」

服部「せや。」と続け様に「来る日が決まったから其れを知らせようと思うての。」

夏美「え？本当ですか？態々有難うございます。」と続け様に「其れで？何時来られるんです

？」

服部「来週の月曜の17日の夕方や。その日・・親父達仕事なんねん其れが終わってから

と言うてたで？」

夏美「来週の月曜の17日の夕方ですね？分りました。」と続け様に「詳しいお時間

分りますか？」

服部「せやな・・・多分早ければ5時・・・遅ければ6時頃着くかと言
うてたで。

まあ・・・もし仕事長引きそうやったら・・・俺の携帯に親父から連絡
入る様になってんねん。」

夏美「分りました。では・・・兄^{あに}様の方には私からお伝えしておきま
す。」

服部「・・・悪いな。頼んだで。」

夏美「いいえ。其れでは。」

そう言い電話を切った。

すると梓「ねえ・・・さっきの電話の相手ってあの服部平次君？昔あんたが大阪に行って

何らかしらの事情で事故に巻き込まれ救ってくれたと言う・・・。」

夏美頷き「そうだよ。」と続け様に「ねえ・・・姉さん頼みがあるん

「だけど・・・。」

梓「来週の17日の月曜日の夕方はお願いだから、此处には来ないで、でしょ？」

夏美「そう。平さんの・・・お父様がお仲間様と一緒に見えになれるからさ・・・。」

と苦笑い。

其れを聞いて梓再びクスと笑い「あら？、私達、が居たら不味いのかしら？」

夏美苦笑いをして「ま・・ね。」と続け様に「だって・・平さんのお父様・・」

大阪府警本部長なんだもの。」

梓一瞬驚いたが再び冷静さを取り戻し「まあ・・警察関係は不味いわね。」

と続け様にジンを見て「どうする？ジン？」

ジン「まあ・・警察^{サツ}が居る所に乗り込む程俺達も馬鹿じゃねえ・・。」

と続け様に「考えておく。」

其れを聞いて夏美は一安心した。

第24章。夏美の実の姉梓登場。完。

第24章。夏美の実の姉梓登場。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は夏美がオウガに平次君の電話内容を

報告する所から書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

服部「次章もどうぞ宜しゅう！」

第25章。報告。(前書き)

おはようございます。今章では主にワカバが中心となります。

第25章。報告。

アレから応接室で服部から受けた電話の報告をオウガの部屋に行き
オウガにしていた夏美。

オウガ「成る程な。来週の月曜の夕方5時辺りに平蔵さん達が。」

夏美頷き「はい。今の所その予定です。兄様。」と続け様に「しかし、お仕事が長引いて

しまった場合は多分時間も多少だと思われませんがずれ込む可能性があります。」

と更に続けて「もし、そうなった場合平さんから直接再びお電話を頂く予定になっています。」

オウガ頷き「そうか。分かった。」と続け様に「有難うな。夏美。」

夏美「いえ。」

と続け様にオウガに電話が入って来た。

オウガ「はい。オウガ。」と続け様に「了解。」そう言い電話を切った。

と続け様に夏美に「来週の火曜。横田町にライカと手が空いている者で構わないから

向かってくれ。」

夏美「了解しました。」と続け様に「では、ライカの部屋に一先ず

知らせに行ってきます。」

オウガ「そうしてくれ。」

そう言い夏美はライカの部屋に向かった。

そして、玲明が夏美のすれ違いでオウガの部屋に入ってきた。

玲明「オウガさん。」

オウガ「玲明。すまんが・・・来週の火曜お前も夏美達と共に横田町

に向かって欲しい。」

玲明頷き「了解です。」と続け様に「其れで？他のメンバーは？」

オウガ「今の所、夏美とライカ・・・とお前だ。」

すると、ライフエイ「なあ・・・オウガ。」

オウガ「ん？」

ライフエイ「俺も雷外を連れて行って良いか？」

オウガ其れを聞いて「別に構わんが・・良いのか？お前その日、オ
フ、だろ？」

ライフエイ「ああ・・。別に次の日も、オフ、だからな。別に構わ
んよ。」

その事聞いて玲明くすつと笑い「相変わらず、仕事熱心ね。ライ
フエイ。」

ライフエイ其れを聞いて再びフツと笑い返し「あいつ等程じゃねえ
さ。玲明。」

（あいつ等Ⅱ夏美達の事。）

すると、ライチュウが入って来て「相変わらず、お仲が宜しいよう
で、。」

ライフエイ「お？何だ？来ていたのか？ライチュウ。」

ライチュウ「はい。ライフエイ様。」と続け様に「実は、ライフエ
イ様にお渡ししたい物が

・・。
」

ライフエイ「俺に？」

そして、ライチュウ、ライフエイに雪美から受け取ったメモリーカードを渡し

「此れ・・・雪美様が、あの事に、ついてお調べした物が入っております。」

ライフエイ「有難うな。ライチュウ。」と続け様にオウガを見て「すまん。ちょっと

情報部に戻る。」

オウガ頷いた。

そして、ライフウェイ情報部に一旦戻って行った。

すると玲明「ライチュウ。」

ライチュウ「はい。玲明様。」

玲明「あれ何入っているの？」

ライチュウ「大阪の銀行強盗事件のやつみたいです……。平次様が念の為に雪美様にも

‘ご依頼’されていたみたいです。」

玲明「そう。有難う。」

ライチュウ玲明に軽く一礼した。

第25章。報告。完。

第25章。報告。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・再び雪美について書かせて頂く予定になっております。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「次章もどうぞ宜しく。」

第26章。雪美の今の心境。（前書き）

1日ぶりの更新となります。

今章では雪美の今の心境について書かせて頂きました。

第26章。雪美の今の心境。

此処は再び国際警察とFBIが滞在している某米花町のホテル。

雪美はアレから赤井とワカバを出てホテルに戻って行った。

そして、戻った途端に赤井に、
'くれぐれも此処を出ないように・・・。'

と言われ、上司に報告があるから、・・・そう言い部屋を出た。

すると、雪美軽くため息を付きそして・・・窓側に立ちタバコに火を
灯し外を見上げて

「・・・まるで、監視されている気分、ね。」と苦笑いしながら呟いた。

組織に潜入捜査で、進入していた頃、もそう。

そして、此方に、戻って、来た時もそう・・・。

私の周りに居る人達殆どがまるで、監視役、。

此れじゃ・・・、自由もあつたもんじゃないわ。
,

すると、外は雪が降って来た。

雪美「・・・あら。‘雪’？」

と続け様に「そう言えば、あの子が、彼に、襲われた時も天気は‘雪’だったわね。」

と呟きながら「さて・・・私は大丈夫なのかしらね？」何故か知らないけど・・・。

クスッと笑いながら言った。

そして・・・。

そう。だって私は・・・国際警察の一員、でありながら、組織の裏切り者、でも

あるんだから・・・。

そして雪美の居る部屋の周りの電柱にカラス達が群がった。

雪美タバコ吸いながら「・・・カラス。」

そう言いカラスをずっと見ていた。

もしかして・・・。

‘組織が私にも？’

そう心の中で呟きながら・・・。

第26章。雪美の今の心境。完。

第26章。雪美の今の心境。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今度は雪美の夢を書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雪美「・・・次章もどうぞ宜しくね。皆さん。」

第27章。雪美の闇の夢。(前書き)

今章は、雪美中心として書かせて頂きました。

真弓の頃の夢の雪美版です。

第27章。雪美の闇の夢。

アレから雪美の身に何事も無く・・・。

‘普通通り,’ に国際警察の仕事をホテルの自分の部屋でこなし夕飯等を済ませ

ベットの中で休んでいた。

そして・・・。

夢の中に堕ちて行った。

しかし・・・この夢は余にも、良くない夢、だった。

外は再び雪。

雪美は1人で米花町の国道を歩いていた。

そして・・・。

その国道には真弓の夢同様に黒のポルシェ356Aが停まっていた。

そしてその電柱にはカラスが居て雪美をジッと見て

『平和ボケも終わりだ。』

雪美黒のポルシェ356Aの横を通り過ぎ・・・。

ジン車の中でミラーを横にし「さあ・・・夢から醒めて再会を再び祝おうじゃないか。」

其れと同時にジンのグレーの瞳が雪美を見て「俺達の、再会に相応しい闇の場所で、」

ガチャ。

ジンニヤリと笑い「なあ・・・？ラム。」

雪美ジンの気配に気づき恐る恐る振り向き「!!!!!!!!!!」

そして目が覚めた。

雪美かなり息切れが激しかった。

雪美頭を軽くかきフツと笑いながら「……ある意味、嫌な夢ね、」

と続け様に「あの子も……こう夢を見た時には、こんな気持ち、だったのかしら。」

と呟いた。

とそして・・・心の中で。

‘私はどっち？’

‘闇’？

それとも‘表’？

あの時組織に潜入して以来・・・。

もう‘どちら側の人間か’、分からなくなってしまったわ。

と続け様に時計を見て「……まだ朝の4時か。」

と更に続けて「何か、嫌な予感、が起こりそうね。久々に・・、あの男、^{ヒト}の家に

行つて来ようかしら？」

とも呟いた。

しかし・・。

この夢を見た途端に雪美自身にも真弓の頃同様、闇の手、が迫って

くる事となる。

第27章。雪美の闇の夢。完。

第27章。雪美の闇の夢。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・雪美がコナンに連絡を入れる所から書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雪美「もう・・・参っちゃった、わね。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくね。」

第28章。雪美の連絡の相手。(前書き)

今章も雪美が主になります。今まで偽名を使っていた
したが・・もうジンの兄貴様方にいつの間にかばれて
しまいましたので・・本名に戻っています。

最後らへんに少しですがジンの兄貴様が出ていらっしやいます。

第28章。雪美の連絡の相手。

アレから雪美は再びベットの中に入るのも、寝付けなかった。

そして、時計を再び確認し朝の8時だった。

と同時に携帯を取り出し連絡を入れた。

「はい。江戸川です。」

雪美「やあ。コナン君。町原ですけど……。ごめんね。朝から……」

コナン「あ、町原さん？ううん。大丈夫だよ。僕も丁度起きた所だからどうしたの？」

雪美「ねえ……。唐突で悪いんだけど近い内に、会えない、かな？」

コナン「え？いいよ。でも、勝手に、動いても大丈夫、？FBIに、
匿われている、」

「
んでしょ？」

雪美軽くフツと笑い「大丈夫よ。少し位の、外出、なら多分、赤井
さん（あの男^{ヒト}）、」

「も許してくれるだろうから。」

其れを聞いてコナン「だったら……。、良いけどね、。」と続け様に

「でも、、気をつけてよ、？町原さん。奴等……。下手すれば、近くに居るかもしれない、」

からさ……。」

雪美「ええ……。『気をつけるよ』。」

コナン「じゃ……。『会う日』だけど、今週の土曜でどう？ 土日学校無いから。」

雪美「ええ。良いわ。場所は……。君が『何時も来ている場所』で良いのかしら？ 』」

コナン頷きながら「うん。良いよ。」と続け様に「じゃ……。何時にする？ 』」

雪美「・・・・・・・・そうね。じゃ・・・・・・・・午前11時30分頃に・・・・。」

コナン「午前11時30分頃にね？OK。」

雪美「じゃ・・・・・・・・そう言う事で、宜しくね。小さな探偵君？」

コナンフツと笑い「此方こそ、」

そう言い電話を切った。

すると、ベットのの下からノイズが、聞こえたのを、耳にした。

雪美「・・・まさか。」

そう言いベツトの下を探し「!!!!」

小さな黒い機械を取り出した。

よく見たら何と、盗聴器、だった。其れを見て雪美「・・・またやられたわ、」。

と続け様に「しかも・・・ご丁寧に、録音機付き、」。

そしてため息を付きながらタバコに火を灯して「・・・やれやれ

’。
」

どうして・・・気づかなかったのかしらね。

此れでも一応、国際警察の一員、なのに・・・。

すると、部屋のドアのノック音がした。

雪美「どうぞ？」

すると宅配便の人が入って来た。

宅配便「宅配です。お届け物です。印鑑お願いします。」

雪美タバコを取り合えず灰皿の上で消し「すみません。今印鑑手元に無いんで

サインでも宜しいでしょうか？」

宅配便「ええ。構いませんよ。」と続け様に「其れでは、此方にサインをお願いします。」

雪美「はい。」

そう言い伝票の方にサインを入れ、宅配便に渡しそして宅配便は雪美に一礼し

その場を後にした。

雪美「さて？誰かしら・・・。」

そして、差出人の欄を見たらこう書かれてあった。

‘黒澤陣’と・・・。

雪美「・・・ジン’の偽名ね。」

と言う事はジンから・・・？

って、何で彼が此処知ってんのよ？！

まさか・・・もう再び、嗅ぎつけた、とか？！

そう呟きながら恐る恐る箱を開けた。

すると、中は黒いカーネーションと、紅いカーネーションが2本、2本で合計4本入っていた。

た。

雪美其れを見て「そう言えば・・・私前に、黒の花、が好き。ッて彼に言ったんだっけ？

だから・・・黒いカーネーションを？」と続け様に「でも、何で、紅いカーネーション、まで

？」そう考えているうちに一瞬真弓の顔が脳裏に過ぎった。

まさか？！

彼女の事も気づいている？！

だったら・・・ある意味、不味いわ。

そうと決まれば・・・さっさとこの、ホテル、から出なきゃ！！

そう心の中で呟き急いで荷造りを始めた。

一方、外では黒のポルシェ356Aが路地裏で待機していた。

そして、ジタバコに火を灯しながらニヤリと笑い「俺からのプレゼントは、気に入って、」

くれたか？ラム。」そうホテルを見て呟いていた。

第28章。雪美の連絡の相手。完。

第28章。雪美の連絡の相手。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は多分赤井さんと雪美のやり取りを書かせ

て頂く予定です。其れでは次章も今章同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第29章。赤井と雪美との会話。（前書き）

今章は、赤井さんと雪美のやり取りを中心として
書かせて頂きました。今章でも最後らへんにジンの
兄貴様が出てきます。長丁場ですのでご了承下さい。

第29章。赤井と雪美との会話。

赤井は自分の部屋でタバコを吸っていた。

と同時に雪美の事もどうしても気になりタバコをテーブルの上に置いてあつた灰皿に

消し、雪美の部屋に向かった。

一方、雪美は何時でも此処から、出れるように、荷造りをしていた。

もう・・・。

ジンに再び、見つかった、以上この、ホテル、には居られないわね。

すると「どこかにお出かけか？雪美。」

と声がした。

雪美その声の主の所に顔を振り向き「・・・赤井さん。」と呟いた。

そして、赤井はテーブルの上にあった黒のカーネーションと紅いカーネーションを見た。

その二つの花は花瓶に入れられていた。

赤井再びタバコに火を灯し「この花はどうした？」

と問いかける。

雪美「・・・送られてきたのですよ。」

赤井「誰に？」

雪美赤井を見て軽くため息を付き「・・・其処まで言わなくちやいけませんか？」

赤井タバコの煙を吐きながらフツと笑い「言えない何かがあるのか？」

雪美は其れを聞いて思わず、黙ってしまった。

・・言える訳ないじゃないのよ。

ジンからの‘贈り物’だなんて。

そう呟きながら再び荷物作りを再開した。

赤井は雪美のその様子をタバコを口に加え直し只黙って見続けた。

そして・・・。

赤井「雪美。」

雪美「何でしょう？」

赤井「・・・お前、何か隠しているだろう、？」

雪美その事を聞いて一瞬手を止めた。

が再び動かし始め、「別に何も隠していませんよ。赤井さん。」

赤井「ほお。そうか。俺にはそうは、見えんがな。」

すると、雪美「赤井さんが、疲れているだけですよ。」と続け様に赤井を見て

「もう、お休みになられたら、いかがですか？」

赤井「・・・雪美。」

そう雪美に近づこうとしたその時雪美「近づかないでッ!!」

と行き成り叫んだ。

其れを聞いて赤井一瞬驚いたが再び冷静さを取り戻しテーブルの上にあった灰皿に

タバコを消して再び雪美に近づいた。

雪美は必死に抵抗する。

が・・行き成り赤井に抱きしめられた。

雪美驚き「・・・あ、赤井さん？」

赤井「・・・何時からだった、だろうか？お前が俺に、すべてを話さなくなったのは、？」

と続け様に「それとも……あの潜入調査でお前を、変えてしまったのか？」

雪美赤井の腕の中で行き成り泣き始めた。

そして雪美泣きながら行き成り「怖いよ。本当の自分はどっちなんだろう？」

と続け様に「赤井さん。私、時々分からなくなるッ！！自分が、どちら側の人間なのか」。

‘表で’ある国際警察の一員なのか……。それとも‘闇で’ある、組織の裏切り者、

であるか……。それとも……。その前に殺し屋ヒットマンをしていた頃の、自分、

なの

か・・。もう、どっち側、か、分からないよ、！！」

赤井「・・雪美。」

赤井は雪美の過去を、知っている、だからこそ・・彼女を、完全に救いたい、と

思っている。

嘗て自分が愛した女とその妹の心境を、重ねてしまった、のだ。

すると、赤井「今のお前は、表側だ。だから・・今後ともお前は、此方（表）に

居れば良い。」と続け様に「もし、やばくなったら、俺が何とかしてやる！」

だから・・・だから、心配するな。」

そう言い雪美の頭を撫でた。

雪美は只何も言わずに小さく頷いた。

一方、ジンはまだ路地裏に居て赤井達の会話を聞いていた。

ジンタバコに火を灯しニヤリと笑い「フン。赤井の奴めあいつに、揺さぶりを、かけてきた

か。」と続け様に「逃がしはしねえよ。お前は本当はこっち側（闇）、だからな。」

‘雪美’。』と呟いた。

第29章。赤井と雪美との会話。完。

第29章。赤井と雪美との会話。（後書き）

今章もお楽しみ頂き有難うございます。

さて、次章は雪美の過去か・・・雪美とコナンの
再会について書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ
幸いです。

オマケ。

赤井「次章もよろしく頼むよ。」

第30章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。 (前編。)

(前書き)

今章は、前編では主に雪美の過去を書かせて頂きます

た。と同時に本当は博士の家で再会する予定だった

コナン君が赤井さんと共に最後らへんに登場します。

第30章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。(前編。)

アレからずっと雪美は赤井と過ごしていたが、赤井自身仕事があった為一旦雪美の部屋を出

た。と同時に雪美1つの茶黒の箱を取り出した。

そして・・・その箱を開けると1つの銃とそして・・・嘗て自分がお守り、に使っていた。

黒の翡翠ヒスイのペンダントが収められていた。

実は、雪美自身もすべての人には言えない、秘密、があった。

其れは、嘗て主に日本だが・・・。

闇の世界で名を走らせていた、殺し屋、ヒットマザーロン九龍

その名の由来は彼女の左腕に隠された9頭の龍の刺青から来ている。

だが・・・。

色々と訳アリでとある日を栄えに、殺し屋、を辞めた。

それ以来、ずっと・・・ずっと、国際警察、の一員として働いていた。

雪美その箱を見てフツと笑い、「何しているんだろう、？私・・・此れはもう、あれ、を

辞めてから見ないと心の中で決めてこの箱に、封印、していた。はずなのに・・・。」

そう言い箱の蓋を閉めて見えない所にしまった。

そして、タバコに再び火を灯し・・・。

「今の私は表、か・・・。」と先程の赤井に言われた言葉を思い出した。

と同時に1つの写真を見て「ねえ・・・雅？、今の私の居場所、って、こっち（表）、で

良いんだよね？」と嘗ての恋人にそう呟いた。

と同時に部屋ノック音がした。

雪美「どうぞ〜！」

すると赤井が再び入って来たと同時に小さなメガネの少年を連れて・
・。

雪美は其れを見て驚いた。

第30章。雪美の過去・そしてコナンとの2度目の再会。
（前編。）
完。

第30章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。 (前編。)

(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂きたいと

思います。其れでは今章も前章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いしますッ！」

第31章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。 (後編。)

(前書き)

今章は前章の後編です。

主に雪美とコナン君のやり取りです。

此方は長丁場となっておりますのでご了承下さい。

第31章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。（後編。）

雪美「・・・赤井さん。」と続け様にコナンを見て「コナン君まで？
どうして？会うのは

土曜のはずだけど・・・？」

コナン苦笑いをして「『悪いな』。アレから貴女の事がどうしても
『気になってよ』。」

其れで赤井さんと連絡して今日にしたんだ。」

雪美フツと笑い「・・・そっか。」

そう言い窓を見ながらタバコを吸い続けていた。

すると、コナン雪美の所に寄り「ねえ・・・町原さん。」

雪美タバコ吸いながら「何？コナン君？」

コナン「こんな事聞くのもアレだけど・・・あえて、聞かせてね、雪美さんって・・・？」

‘九龍’じゃないの？」

雪美一瞬驚いたがすぐ様に冷静さを取り戻しフツと笑い「‘ご名答’。」

と続け様に「‘どうして分かったの’？」

コナン「左腕にあった九龍の、刺青、だよ。それと・雪美さんの耳につけてあった

シルバーの龍のピアスさ。ドラゴン其れで、何となく、ね。」

雪美「さすが・、小さな探偵君ね。」

と同時にコナン「それから・、もう1つ。」

雪美「何？」

コナン「町原さんとジン・、知り合い同士、でしょ？」

雪美再びタバコ吸いながらフツと笑い「そりゃそうだよ。コナン君。私は、国際警察の

潜入捜査で組織に、潜入していたんだから。」

コナン「其れもあるけど・・・組織に潜入し、ばれた後でも・・・雪美さんは勿論、組織の裏

切り者、としても追うわれて居る身だけど・・・それ以前に、昔から何か、関係、が

あるんじゃない？だから、上にもそして・・・赤井さんにも、話さなかった。」いや・・・。

「話せなかった、。そうでしょ？」

雪美「・・・さあ。『どうだろうね？』とはぐらかしてしまう。

と同時にコナンを見て「幾ら探偵とは、言え、根掘り葉掘り聞くもんじゃ、ないよ。」

人には「言える事」と「言えない事」があるんだからさ。」

すると、赤井いつもの様にタバコに火を灯し「じゃ・・・其れは、言えない事、なのか？」

俺達にも？」とフツと笑いながら言った。

すると雪美再びフツと笑い「A Secret makes a women women。」

コナン其れを聞いて、「本当に貴女町原さんか？」

雪美「そうだよ。コナン君。どうも・・・あっちに、潜入したら・・・あの女の^{ヒト}

‘口癖がうつっちゃってね’。其れに‘女は秘密を着飾って美しくなるもの’。

秘密が多い程ある意味面白いでしょ？」と続け様に「其れに・・・コナン君。

‘君にも誰にも言えない秘密’があるんじゃない？其れと‘同じだよ’。」

コナン其れを聞いて思わず一瞬驚いたが直ぐに冷静さを取りフツと笑った。

赤井はコナンのその表情を一瞬たりとも見逃さなかった。

そして、雪美「もう・・話事、は無いよ。」と続け様に「The
's all! (お仕舞い)」

そう言い再び窓を見た。

そして「雪、か。」と続け様にコナンを見て「ああ・・そうそう。
言い忘れた。」

其処にある赤のカーネーション。君の、相棒、に持って行ってあげ
てよ。」

コナン「え? 良いの?」

雪美頷いた。

コナン「分かった。有難う。」　　そう言い花瓶から赤のカーネーションを取り事前にいつの間に

か用意していた新聞紙に包み「じゃ・・・俺は此れで・・・また何かあったら何時でも連絡

して。」

雪美フツと笑い「有難う。」

そして赤井「じゃ・・・ボウヤ。送るぞ。」

コナン「有難う。赤井さん。」

そう言い雪美に軽く挨拶をし、赤井と共に部屋を後にした。

其れと同時に雪美ずっと窓を見ていた。

・雪ね。そう言えば、あの子（碓ちゃん）、も、彼との再会、の時も、こんな感じ、

だったのかしら？

と心の中で呟いていた。

第31章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。（後編。
）完。

第31章。雪美の過去・・・そしてコナンとの2度目の再会。 (後編。)

(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は再び雪美とジンの兄貴様の再会を

書かせて頂く予定です。其れでは次章も今章同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

赤井「次章もよろしく頼むよ。」

第32章。雪美とジンの2度めの再会。(前編。)(前書き)

約2日ぶりの更新ですか・・・。

申し訳ありません。昨日はちょっと大学があったもので(汗)さて、今章は雪美とジンの兄貴様との2度めの再会を書かせて頂きました。此方も前編と後編に分けさせて頂きます。

第32章。雪美とジンの2度めの再会。（前編。）

アレから赤井達が去った後・・・。

雪美は只窓をずっとずっと、見つめていた。

そしてタバコを灰皿の上に揉み消した。

と同時に軽くため息を付き心の中で・・・。

再び、言えるわけ無いじゃないの、。

彼と私が、幼馴染、だったって事を・・・。

赤井さんに言われた後でも少しだけ、自分自身がどちら側の人間なのか、。

そして・・・迷ってる，事さえも。

ある意味・・・，恥ずかしいわね，。と己をはじいて

そう呟きながらタバコに再び火を灯し吸い始めた。

すると、再び雪美の背筋に、悪寒が走り始めた，。

雪美タバコ吸いながら「・・・まさかね。」

そう言いあたりを見渡した。

それでも、誰も居なかった，事に安堵したのか再び窓を見た。

其れが、災いしたのか、次の瞬間……。

「よう。此処に、逃げ込んでいたのか？ラム。いや・雪美。」

雪美その声を聞いて再び固まってしまいながらも恐る恐る後ろを振り向いた。

その後ろには何とジンが居てニヤリと笑いながらタバコに火を灯し立っていた。

雪美物凄く驚いて再び心の中で……。

ど、どうして！？か、彼が……こっ此処に居るのッ！？

も・・・もしかしてッ！！！！

盗聴器に発信器が内蔵されていたの！？

と呟っていた。

第32章。雪美とジン2度めの再会。（前編。）完。

第32章。雪美とジンの2度めの再会。(前編。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はこの後編を書かせて頂きます。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雪美「・・・再び見つかったか。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

第33章。雪美とジンの2度めの再会。 (後編。)(前書き)

今章は前章の後編です。

雪美がホテルから飛び出してしまいます。

第33章。雪美とジンの2度めの再会。（後編。）

アレからジンと2度めの再会を不運にも果たしてしまった雪美・・・。

そして、「よ、良く此処が分かったわね。場所教えていないはずでしょ？」

ジンフツと笑いコートの中から小さな機械を取り出した「鈴（発信器）だよ。」

お前は気づいているかどうか、は知らねえが・・・此処に仕掛けてあった盗聴器に

「内臓、されてあったんだ。」

雪美。

・・・ああ。やっぱり。

私のあえて言えば、勘通り、になってしまったわ。

別に・・・彼自身が、怖い、って訳ではない。

只・・・。赤井さんに、問い詰められる、のが、怖かった、。

、それだけだった、。

すると、ジン雪美の所に来て再び、あの時の様に、彼女を腕の中に抱きしめ

「戻って来い、。雪美。」と続け様に「お前は此方の（闇）人

間だ。
,

「俺はお前とだけは、やりあいたくねえ。・・・
幼馴染、だからな。」

其れを聞いた雪美「・・ジン。」そう呟いた。

すると「ほお。‘そう言うことか。’」

その声を聞いてジンと雪美一斉に振り向いた。

其処にはドアに寄りかかった赤井が居た。

ジン「・・・赤井秀一。」

雪美驚いて「何時の間に？」

赤井フツと笑い「アレからどうもお前の様子がまた気になってな。
」」

すると並河も出て来て「やれやれ・・・ある意味、水くせえぞ。雪美。」

やはり、あの時お前を潜入捜査に組織に行かせたのが、まずかったかな？」

雪美「・・・並河の兄さんまで。」と続け様に「、どうして？」

並河「、どうして、？ってお前の事が心配だから・・・。」

雪美「、何か監視されている気分で、嫌だ。」

と続け様に「此れはある意味、プライベート侵害、だよ。兄さん。」

と更に続けて「、だから言いたくなかったんだ、！大体こんな事が、予想着いていた、」

から・・・だから・・・。」

せっかく、‘赤井さんが留めてくれたのに、’

気持ちが揺るがないように・・・。

そう言いジンの腕の中から離れた。

一瞬ジン誰にも見せない悲しそうな表情を浮かべ「・・・雪美。」

すると雪美頭を抱えて「もう！！分からないよッ！！！！せっかく、
気持ちが揺るがないよう

に、したのにッ！！‘過去の思い出、を隠そうとしていたのにッ！
！、消そうと、’もしたのに

ッ！！私は国際警察の一員だから・・・なおさら・・・。」

並河「お前の気持ち分からは無い……。だが……」

すると雪美「私の気持ち何ぞッ!! 誰にも分からないよッ!! 特に
‘闇の中で生きた事の無い

人ならなおさらねッ!!」

そう言い部屋から勢いよく飛び出してしまった。

並河「おいッ!! 待てッ!! 雪美ッ!!」そう言い雪美を追いかけ
ようとした。

が赤井に「待て。並河。」と続け様に「今はそっとしておいてや
ろうぜ」。

並河「し、しかしだな。外にはワカバと対立している、広州の面子、がうろついている」

って話だぜ?! 赤井。奴等も奴等で雪美の事を狙っていると言う、噂だ、!」

其れを聞いて赤井「何?!」

するとジン急いで携帯を取り出し連絡を入れた。

「はい。」

ジン「あ? 夏美か? 俺だ。」

その電話の相手は夏美だった。

夏美「あ、ジンさん。お疲れ様です。どうしたんです？」

ジン「唐突な事聞か・お前今何処に居る？」

夏美「今ですか？米花町の国道を走行中です。ちょいとタバコが切れたもんで

買いに行っていたんですよ。」

ジン「そうか。其れは丁度良かった。唐突で悪いが雪美の奴を探してくれ。」

夏美「え？雪の奴をですか？どうしたんです？」

ジンは今までの経歴を夏美に話した。

夏美「了解しました！多分其処にはうちの搜索隊も数名ですが待機していると思うので

私も探り入れますが、そいつ等にも探り入れさせますんで。」

ジン「頼んだぜ？俺も一応探り入れてみるが・・・見つけ次第、報告してくれ。」

夏美「了解！！」

そう言い携帯を切った。

するとジン素早く無言のまま雪美の部屋を後に愛車である黒のポルシェ356Aに

乗り込みその場を素早く後にした。

一方部屋に取り残された赤井達は・・・。

赤井タバコに火を灯した。

並河頭抱えて「・・・何てこった。ってか・・・俺は何を！」

その様子を見て赤井は只並河の肩を軽く叩き「俺等も行くぞ。並河。

」

並河「・・・赤井。」

赤井「俺は最初あいつをそっとしておいてやったほうが言いと思っていたんだが・・・」

広州の面子の事だ、何を企んでいるか、分からないからな。」と続け様に

「って・・・ワカバの連中の1人が言っていたぞ。」

並河「・・・なっちゃんか。」

赤井フツと笑い「ああ。」

そう言い赤井愛車の鍵を取り出し駐車場へと向かった。

並河も其れに続いた。

第33章。雪美とジンの2度めの再会。（後編。）完。

第33章。雪美とジンの2度めの再会。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は雪美の搜索について書かせて頂く予定
となっております。其れでは次章も今章同様に
お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

夏美タバコに火を灯し「・・・やれやれ。ある意味

面でー（面倒）な事になったな。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しく!」

第34章。ワカバ、そして広州搜索隊達の雪美の搜索。（前書き）

今章では夏美達がホテルから抜け出した雪美を搜索

します。此方も長丁場です。

第34章。ワカバ、そして広州搜索隊達の雪美の搜索。

アレから雪美は、自分の過去とそしてジンとの関係、を赤井達に聞かれて思わずホテルから

飛び出してしまった。そして、並河から広州の搜索隊のメンバーが雪美の事を搜索している

事を聞きつけ赤井と共に愛車である黒のシボレーC-1500に乗り込み雪美を追った。

一方、ジンから雪美の逃亡を聞きつけた夏美は米花町近辺に潜んでいたワカバの搜索隊の

メンバーに雪美を搜索するように頼んだ。

一方、赤井はもう1人の、協力者、を呼びその協力者を自分の車に乗せ再び雪美の後を

追った。

赤井「休みの所悪かったな。ボウヤ。」

コナン「ううん。大丈夫だよ。気にしないで赤井さん。」

そのもう1人の協力者とはコナンの事だった。

と続け様に「でも、‘本当なの’？町原さんとジンが、幼馴染、だったって事？」

赤井「ああ。‘本当だ’。只・・・あいつも奴の‘本名’までは知らなかったみたいだから

な。」

コナン「・・・そっか。」と続け様に「でもさ、どうして赤井さん達は分かったの？」

赤井「偶々雪美の事が再び気になってね。雪美の部屋に並河と一緒に

に行ったら・・

案の定。」

並河「雪美とジンの会話が聞こえてしまったって訳さ。コナン君。」

すると、青いベンツが通りかかった。

コナン「あ・・青いベンツ。」

赤井「と・・言う事はあいつ（夏美）か？」

そう、青のベンツは橘夏美の愛車だった。

すると、赤井は携帯を取り出し夏美に連絡をかけた。

夏美「はい。橘。」

赤井「あ、夏美か？俺だ。」

夏美「ああ、秀さん。お疲れ様です。」

赤井「お疲れ。」と続け様に「下らん事聞ぐが・・・俺の愛車の前に
青いベンツ見かけたんだが

お前か？」

夏美笑いながらタバコに火を灯し「ご名答ですよ。秀さん。」

と続け様に「と言う事は・・・秀さんも雪を探しに？」

赤井「ああ。そうだ。彼女を逃がしてしまったのは、俺だからな。」

並河「いや・・・俺達、だろう。」

赤井並河のその声を聞いてフツと笑った。

夏美はその事を聞き何となくだが理由が分かり「成る程。そうです

か。だから、秀さんも

‘ 搜索を ’ ?」

赤井「ああ。」

すると、夏美の所に無線が入って来た。

夏美「・・・ちょっと失礼。」

そう言い無線を取り「はい。此方夏美。」

すると男の声で「夏さん！此方搜索隊隊長の末次です！」

夏美「あ！末さんか？ご苦労さん！で？見つかった？」

その男の名は末次英志夏美の実家である橘家本家と昔から交流の

ある末次家の長男坊でありワカバの搜索隊の隊長でもある。

末次「はい。俺今米花港の周辺に居るんですが・・・彼女自身とある倉庫に居るらしいです。」

夏美「米花港・・・のとある倉庫？」

末次「はい。」

夏美「了解した。取り合えず私しやあも其処に今から向かうわ。だから、一先ず其処に

待機しておいて。」

末次「了解です！」

そう言い無線を切って赤井に「秀さん、聞こえました、？」

赤井「ああ。勿論。」と続け様に「米花港。だな。」

夏美「はい。」

赤井「了解した。じゃ・俺達も向かう。後で落ち合おう。」

夏美「了解しました！」

そう言い携帯を切って夏美再び携帯に電話をかけた。

「俺だ。」

夏美「あ、ジンさん？お疲れ様です。私、夏美です。」

ジン「おう。お疲れ。で？奴は、見つかったのか？」

夏美「はい。今さっきうちの捜索隊の隊長から無線で報告がありました。」

ジンいつもの様にタバコに火を灯し「そうか。で？場所は？」

夏美「米花港です。」

ジン「米花港か……。分かった。俺も今すぐ行く。」

夏美「了解しました！」と続け様に「後、ジンさん。秀さん達も恐らく来ると思うんで

道中お気をつけて。」

ジン其れを聞いてフツと笑い「了解した。」

そう言い携帯を切り米花港へと向かった。

そして、広州の捜索隊のメンバーも密かにワカバの捜索隊が雪美の場所を嗅ぎつけた事

を聞き米花港へと向かっていた。

第34章。ワカバ、そして広州捜索隊達の雪美の捜索。完。

第34章。ワカバ、そして広州捜索隊達の雪美の捜索。(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は米花港に夏美達が着いた所から書かせて

頂きたいと思います。

尚、予め申し上げておきますが、車を運転しながらの

携帯電話は法律上禁止されているみたいなので・

くれぐれもドライバーの方はまねをしないように

お願い致します。あくまでも小説の範囲内で書かせて

頂いている訳でその辺はご理解頂きたいと思います。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「やれやれ・・・多分この次は派手め??に

なりそうだぞ。」と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

第35章。米花港。（前書き）

約2日ぶりですか・・・。

遅くなりまして申し訳ありません。

今章は米花港について書かせて頂きました。

主に赤井さん達が中心です。

此方は前章と同様に長丁場です。

第35章。米花港。

アレから雪美のホテルからの逃走の報告を受けた夏美は、ワカバの捜索隊の隊長である

末次からの連絡により米花港へと向かった。

そして、夏美は米花港のとあるスペースに愛車である青のベンツを止めて出てきた。

すると夏美「ん？」

黒のポルシェ356Aと・・・其処から離れた場所に黒のシボレーC-1500か。

ジンさんと秀さん達だね。もう御着きになったんだ。

そして今まで吸っていたタバコを灰皿に消し、再び懷からタバコを取り出し火を灯し、

空を見上げた。

辺りはすっかり、夜、になっていて「・・・満月、か。」そう呟き歩き始めた。

こう言った、満月の日、って・・・少なくとも、彼を思い出す、。

こんな、馬鹿な女、を愛した、男、をね・・・。

すると、携帯が鳴った。

夏美「はい。橘。」

末次「あ？夏さん？末次です。」

夏美「ああ。お疲れさん。」

末次「お疲れ様です。」と続け様に「其れはそうと、夏さん今何処に居るんです？」

夏美「今さっき米花港に着いた所さ。」と続け様に「んでもって・・・末さんは何処に居る

の？」

末次「俺もアレから米花港に居ますよ。雪美さんの倉庫の番号を把握しにね。」

夏美「そうか。んで？分かったのか？」

末次「ええ。A—112あたりだと。」

夏美「OK！今行くな。」

末次「はい。お待ちしています。」

そして此処は雪美がいると思われるA－112倉庫。

末次は携帯を切りさつき合流したジンを始め赤井達が居た。

赤井「あいつは着いたのか？」

末次「ええ。赤井さん。先ほど御着きになったそうです。」と続
け様に

「今こちらに向かわれています。」

赤井「ほお。そうか。」と続け様に「じゃ・・あいつ待ちだな。」

そう言い夏美を待った。

すると、夏美が現れた。

末次夏美に一礼した。

夏美末次の肩を軽くポンツと叩き「お疲れさん。」と続け様に「態々すまないね。」

今お前さんの実家大変なんだろう？」と苦笑い。

末次「いえいえ……。大丈夫ですよ。身内にも、家の事、はいいか
ら、ワカバの仕事、を」

優先しろと言われましたからね。」と笑い換えしながら言った。

そして、夏美赤井達に挨拶を済ませた。

と同時にその倉庫の扉付近に近づいて行った。

そして「取り合えず中雪が本当に居るかどうか確認してくる。」

するとコナン「じゃ……。俺も行く。お前……。懐中電灯なんて持ってきてねえだろ?」

夏美苦笑いをし「ああ。そのよろしく頼むよ。」

そう言い赤井を見て「秀さん。コナン借りて行って良いですかね？」

赤井フツと笑い「ああ。構わんよ。ああ見えてこのボウヤ結構、出来る、からな。」

コナンを見て言った。

夏美「有難うございます。」と続け様に「じゃ・・・末さんは取り合えず此処で赤井さん達

と待機していてくれ。」

末次「了解しました！お気をつけて！夏さん。」

夏美軽くフツと笑いコナンを連れて倉庫内に入って行った。

そして、並河「なあ……。赤井。」

赤井「何だ？並河。」

並河「コナン君って・・・本当に、小学生、か？俺には・・・とても

じゃないけど・・

時折見せる彼の大人びた表情を見ると、普通の小学生には見えねえんだが・・。」

其れを聞いた赤井もフツと笑い「ああ・・。一瞬俺もそう思ったよ。」と続け様に

「あのボウヤには、何かがある、とね。そして俺はあのボウヤと大抵良くつるんでいる

夏美にあのボウヤの事を聞いたんだが・・。」

並河「そうか。で？なっちゃん、何て答えた、？」

赤井再びフツと笑いタバコに火を灯し、「はぐらかされたよ。彼は、只の普通の小学生、」

ですよ。秀さん。」と続け様に「まあ・・・、只の物知り、だったって話ですよ。ってな。」

すると、ジン赤井達のその話を密かに聞いて

本当に、奴は、只の、ガキ、か？

フン。まあ良いさ。こうなる事を大抵、予想した上で、あいつには悪რიいが・・・

あいつの所に、録音付きの盗聴器、を付けさせて貰ったから・・・。

あのガキの、本当の事、が良く分かるようになっていくからな・・・。

さあ・・・江戸川コナン。お前の、本性、見せてもらうぜ？

と心の中で呟き軽くニヤリと笑った。

一方、末次はそのジンの様子を横目で見ながら・・・

ま、不味いな。もしかして・・・ジンの兄貴さん。

何か夏さんに、仕掛けたのかな？

となると・・・もしかして彼の事が、。

ばれちまうかもな。

そう心の中で焦りながら呟いた。

一方、夏美はコナンを連れて倉庫内で雪美の事について搜索していた。

第35章。米花港。完。

第35章。米花港。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は夏美達が雪美を搜索する所から

書かせて頂く予定です。

其れでは今章も前章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第36章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。(前編。)(前書き)

今章は主に夏美とコナンのやり取りを主に書かせて

頂きました。此方は前後編に分けさせて頂きます。

此方も長丁場ですのでご了承下さい。

第36章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。（前編。）

此処は、米花港のA—112倉庫。

アレから夏美はコナンを引き連れて雪美の搜索をしていた。

すると、夏美は一瞬、人の気配を感じた。

コナン「ん？どうした？」

夏美「恐らく・・・私達以外にも、この倉庫には、先客さんが居るらしい。」

其れを聞いたコナンもフツと笑い、「そうか。」

夏美「『気をつけな』。この『先客さん、どうやら・・・只の『先客さん、ではないようだ。』

コナン。』

すると、死角から人影が夏美達の様子を、『伺っていた。』

そしてクスと笑い「『相変わらず、勘が良い事。まさか・・・此処で貴女に、『会える』とは

『思っても見なかったわ』。炎龍^{エンロン}。』

そう小声で楽しそうに呟いた。

炎龍とは夏美の嘗ての‘闇の名’。

夏美自身も一時期は闇に堕ちていた時期があった。

と同時に夏美の闇の名を知っているこの人物は香港で嘗て名を走らせていた。

雪美と同じく殺し屋の星爛^{ヒットマンゼイラン}

彼女の服装は青のチャイナドレスでスリットの中には小型ナイフが何個か収められていて

そして拳銃も何個か収められている。

闇の中でも、厄介な人物、と言われている。

夏美達は星爛に気付きつつも・・・雪美の搜索を続けていた。

すると、コナン「おい。大丈夫か？」

夏美「ん？何が？」

コナン「・・・何がじゃねえよ。あの、先客さん、ほっておいて良いのか？」

夏美「ん・・・ああ。『大丈夫、一応、策はとってあるから』。」

コナン横目で「まさか・・赤井さん達に密かに知らせたとか？」

夏美「あ・・鋭い！良く分かったね。」

コナン「おいおい。大丈夫なのか??」

夏美「ああ。大丈夫。だって、あの、先客さん、FBIや・・国際警察が追っていた

、危険人物、でもあるからさ。」

コナン「え? そうなのか?」

夏美「ああ。お前さんも聞いた事あるよな？香港で嘗て闇の中で名を走らせてた

殺し屋^{ヒットマン}がいた事を・・・。」

コナン驚きながら「お・・・おい。その殺し屋^{ヒットマン}って・・・青のチャイナドレスを

身にまとった・・・黒髪のショートヘアで耳には青とシルバーの龍のピアスをしている。」

夏美先ほど吸い終わったタバコを携帯灰皿に揉み消し新しいタバコに火を灯し

「ご名答。『星爛』（セイラン）だよ。」

コナン「んな?!セ、星爛だとッ?!何で此処に?!」

夏美「恐らく私の勘が正しかったら・・・雪を連れに戻ったんだろう。」

コナン「え?どうして?町原さんを?って・・・連れ戻しに来た、って?」

夏美「雪は・・・昔、‘九龍’
(クローン)と呼ばれた殺し屋^{ヒットマン}だった

んだ。」と続け様に「そんで、あいつは・・・星爛の‘相棒’だったんだよ。」

コナン其れを聞いて再び驚いた。

そして・・・その場で固まり黙ってしまった。

夏美その様子を見て軽くコナンの頭を叩き急ぐ様に催促した。

コナン一瞬我に戻り再び夏美と共に雪美を搜索した。

第36章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。（前編。）完。

第36章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。(前編。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「おいおい。マジかよ。。」

と続け様に笑顔で「次章も宜しくお願いします!」

第37章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。（後編。）（前書き）

今章では前章の後編について書かせて頂きました。

星爛に真弓の正体がばれてしまいます。

と同時に最後ら編に雪美が自ら姿を現してしまいます。

此方は前章と前々章よりかなり長くなっております

のでご了承下さい。

第37章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。（後編。）

すると、夏美達の後を星爛^{セイラン}が追う。

今まで黙っていたコナンが行き成り時計型麻醉銃を用意し始めた。

夏美その様子を見て今まで吸っていたタバコを携帯灰皿に揉み消し
懐からまた新しいタバコ

に火を灯し「……奴」（星爛）か。」

と続け様に頭をかきながら心の中でもう、あいつの事（雪）は放
っておいてやってよ。

と心の中で呟いた。

其れと同時に夏美タバコを吸いながら「其処に・・・居るんだろ？
星爛。」

すると、星爛が出て来てクスと笑い「久しいわね。‘炎龍’、どれ位
ぶりかしら？」

夏美一瞬自分の闇時代の名を呼ばれて苦笑いをし「もう、その名（
炎龍）’で呼ぶのは

止してくれよ。私しやあはもうあえて言えば、引退した身分なんだ
からさ’。」

コナンは黙って夏美達の会話を聞いていた。

コナン自身も夏美の過去を知っていた。

だが・・コナンが、この事を知るのはごくごく最近辺り位の所である。、

夏美「その様子だと・・雪を、連れ戻しに来たのか、？」

星爛「『ご名答、』。」と続け様に「だってあの子は元々私の大切なパートナー、」。

‘逃げ出したら連れ戻すのは当たり前、彼女はとうせ、表なんか似合わないわ。、’

寧ろ、国際警察で働くなんて私から見ればあえて言わせてもらえば

‘馬鹿馬鹿しい事’

そんな‘馬鹿馬鹿しい事’に付き合う義理なんて無いわ。」

夏美其れを聞いて顔をしかめた。

其れはコナンも同感だった。

星爛クスと笑い「あら・・・不服そうね’。炎龍。」

夏美タバコを再び口に加え直し「ああ。お前さんがどう思うと’お前さんの勝手’だが。

雪の所は親が元々国際警察の関連の仕事についていたらしい。昔、あいつと話した時に

こう言っていたよ。‘親の仕事を引き継いだ事を誇りに思う。’とな。まあ・・・

その想いは今も多分あいつのこった、変わらない、だろうさ。」と更に続けて

「さっきのお前さんの言動はその雪の親御さんの、仕事への誇りを汚しているって

事なんだよ！」と更に星爛を睨みつけて「その、誇りを汚す奴は、例え・・・雪の嘗ての

‘闇の相棒’・・・んでもって、‘私の闇の相棒’だったお前さんでも、許す事は出来ない

ッ！、」　　そう言い戦闘体制に入った。

星爛ため息を付き「理解に苦しむわ。」そう言い小型ナイフを取り出し其れと同時に

‘札’を数枚取り出した。

コナン

・・札？

すると、女の声で「だっ・駄目だよ!! なっさん!!」

その声の主に一斉に夏美達が振り向いた。

夏美「真^{まゆ}?!!」

コナン「いっ・・・碇ッ?!」

其処には碇真弓が居た。

一方、A—1112の倉庫の外では赤井達が待機していた。

ジン夏美に仕掛けた盗聴器からの会話を聞いてニヤリと笑い

「来たか。碇真弓……。いや・・・水野渚。」

そして・・。

‘再び再会を祝おうじゃないか。’。と心の中で楽しそうに呟いた。

そのジンの様子を見て並河「・・赤井。」

赤井「ああ。どうやらボウヤの、相棒の嬢ちゃん、も来たみたいだな。」

そして倉庫を見て心配そうに・・・。

・・・夏美。それにボウヤ・・・嬢ちゃん。と心の中で呟いた。

一方此処は再び倉庫の中。

コナン「な・・・なんでオメー此処に?!」と続け様に「此処の外には、奴^{ジン}も

居るんだぞッ?!」と怒鳴った。

真弓其れを聞いて中に入りながら焦って「その事は、十分承知、しているよ。相棒。」

と続け様に「だって・・・雪美さん、ホテルから居なくなっちゃった、んでしょ？」

私じゃあだって・・・心配、だったんだもん。」とコナンを見ながら更に続けて

「あんただって・・・前私に言っていたよね。、自分の運命から逃げんじゃねえぞ、って。」

だから・・・だから・・・私・・・。」

もう、逃げない、そして、あんた見たいに強くなるんだ、って、決めたの、。

其れが例え、危険を伴おうとも、。そして「其れに、あんたが居てくれるから怖くなんか

無い！、私等、昔から一緒だったから、相棒、としてね。」

コナン其れを聞いてフツと笑い、「しゃあねえな、。」と続け様に「まったく困った

‘相棒、だぜ！’と更に続けて「んじゃ・・・はぐれんなよ、！相棒！」

その事を聞いて真弓フツと笑い、「勿論さ、。相棒。」

其れを聞いた星爛「ねえ・・ボウヤとお嬢ちゃん・・只の、子供、
じゃないわね。貴方達一体

何者なの？」

コナンニヤリ「江戸川コナン。探偵さ。」

真弓「私の名は真弓。碇真弓。コナンの相棒で、一応、女子探偵よ。
」

と続け様に星爛コナン達を見てクスと笑い「まあ。此れはまた随分
、可愛らしい探偵さん達、

だ事。」と続け様に「では、その女子探偵のお嬢ちゃんに聞いてみ
ようかしら？」

真弓「何？」

星爛「どうして・・私が、札を、小型ナイフと一緒に取り出した時に炎龍を、止めたの、？」

真弓「色々とその札には文字が書かれてあったみたいだから・・・。ひょっとしたら

‘嫌な予感’がしたのよ。途轍^{とてつも}ない・・‘何かが出てくる’とね。」

コナンその事を聞いて「おいおい。まさか・・オメー、道士、って言うつもりじゃねえだろう

な？」と横目で言った。

真弓頷き「ええ。そのまさかよ。相棒……。」と続け様に星爛を見て「貴女……ひょっとして

香港の殺し屋の家系ヒットマンでありながら、道士、の家系である黄家コウの

一員なんじゃないの？」

星爛その事を聞いて一瞬驚き再び冷静さを取り戻しクスと笑い「ご名答、よ。お嬢ちゃん。

」と続け様に「いえ……こう呼んだ方が、正しいのかしら、？女子大学生探偵水野渚ちゃ

ん？」

真弓その事を聞いて驚いたが……冷静さを取り戻し「な、何言ってるの？？私

只の、子供よ、子供。」そう苦笑いをしながらはぐらかした。

星爛再びクスと笑い「残念ね。私は、殺し屋^{ヒットマン}、でもあり、道士、でも

ありながら、情報屋、でもあるのよ？」そう言い資料を取り「貴女の経歴・・・そして

今の貴女・・・。貴女の失踪そして・・・その直後に碇真弓が現れている。

貴女の大学のロッカーと帝丹小学校である貴女のロッカーを悪いけど探らせてもらったわ。

そうしたら・・・貴女の指紋とパソコンで適合したら、一致したって、訳。」

真弓其れを聞いて思わず固まり・・・そして、ため息を付き「其処ま

で、探られちゃ、

言い分けつかんわね。」と渚口調になった。

と続け様に「そうさ……。姉さんの言うとおり……。私の本名は、水野渚、

あの工藤新一の相棒であり一応女子大学生探偵さ。」

星爛「へえ……。そう。」と続け様にコナンを見て「じゃ……。もしかしてそのボウヤ……。」

真弓（渚）「いや……。こいつは私の相棒の遠い遠い遠い遠い親戚の子さ。
あいつ（相棒）じゃ

ないよ。」

星爛「でも・・似ているわね。」

すると女の声で「その子の、言っている、事は、本当よ。嘘じゃないわ！相棒！（パートナ

ー）！」

その声の主に一斉に振り向いた。

夏美「雪ッ！」

其処には雪美が居た。

第37章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。(後編。)完。

第37章。夏美、コナン米花港での雪美の搜索。（後編。）（後書き）

今章もお付き合ひ下さり有難うございます。

さて次章は星爛と雪美が久々の再会を果たす所を

書かせて頂く予定です。ひょっとしたら星爛の

戦シーン？もあるかもしれません。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

真弓「あちやあゝ！あの星爛って奴に私しやあの

‘正体’ばれちゃったよ。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しく！」

第38章。星爛と雪美の再会。（前編。）（前書き）

今章は、星爛と雪美の再会を書かせて頂きました。

尚、予めお断り致しますが、今章と次章では・・

星爛を（シャーマン）としての設定もさせて頂いて

いますのでこの設定等が嫌いな方等のご観覧は

お控え頂きます様をお願い致しますと共にご了承を

頂きたいと思えます。

第38章。星爛と雪美の再会。（前編。）

アレから夏美達は、星爛と会っていた。

と同時に真弓自身の正体が星爛に、ばれてしまったのだ。

そして、星爛はコナンの正体に、疑問、を持った。

しかし、真弓を始め今までこの倉庫内に、隠れていた、と思われる雪美も自身から出て来た。

夏美「・・・雪！」

雪美「ごめん。夏美。この度は、迷惑かけたわね。」

夏美タバコ吸いながらフツと笑い「何・・・別に構わないさ。」
と続けて

「只・・・お前さんは、秀さん達に知られるのが、怖かったんだろ？」

ジンさんとの‘関係’と自分の嘗ての‘過去を’。だから、秀さん達がホテルでジンさんとの

やり取りを聞かれた時に思わず、逃げ出した、んだろ？自分の嘗ての闇の‘過去を’。」

其れを聞きながら雪美もタバコに火を灯し、「ご名答’。さすがね。
あんたには・・・

‘何でもお見通し’、なのね。さすが・・・炎龍’（エンロン）って
呼ばれた事だけは

あるわね。夏美。」

夏美タバコを再び口に加え直して苦笑いをし「お前さんの嘗ての、闇の相棒、にも

言ったが・・・その名で呼ぶのは、止してくれよ。私しやあはもう・
・、闇から表、に

戻ったんだからさ。」

雪美タバコ吸いながらフツと笑い「・・・そうだったわね、。」

と続け様に星爛を見て「・・・星爛。」

星爛クスと笑い「久しぶりね。パートナー。会いたかったわ。」

雪美「・・・どうして此処に？」

星爛再びクスと笑い「愚問だわね。貴女を、此方（闇）に連れ戻しに来たのよ。」

其れを聞いて雪美「・・・悪いけど、答えはNOよ。私は・・・もう、表で

生きる事を決めた。私の・・・親が作ってくれたこの、国際警察、と言う居場所だね。

だから・・・あんたの所には、戻れない。」

その事を聞いた星爛「・・・本気なの？」

雪美タバコを口に加え直して「ええ。‘本^{マジ}気よ’。」

星爛悲しそうに「・・・そう。」と続け様に「なら・・・強引にでも連れ戻すまでよ!」

そう言い札を取り出し「さあ!!出てらっしゃい!!!我が僕^{しもべ}李秋冷!!

(リ・シュウレイ)!!」そう叫んだ。

だが・・・その李秋冷が出て来る気配無し。

すると「悪いですね。星爛。こう言う事は失礼だと思いましたが・・・貴女の大切な‘僕’である

お人形、さんは此方には来ませんよ。」

星爛「な・・・何ですって?!」

その声を聞いて夏美ニヤリと笑い、「ご苦労さん、雷龍。」

すると雷龍が出て来て「取り合えず俺の、事前任務、は完了です。姉者。」

雷龍の姿を見て星爛は驚きながら「お・・・お前は、り・・・李雷龍!」

そう叫んだ。

第38章。星爛と雪美の再会。
(前編。)完。

第38章。星爛と雪美の再会。（前編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「次章もどうぞ宜しくね！」

第39章。星爛と雪美の再会。（後編。）（前書き）

今章は前章の後編を書かせて頂きました。

残酷な文法等もありますのでご覧頂く際には

ご注意ください。此方も長丁場になっておりますので

ご了承くださいと思います。

第39章。星爛と雪美の再会。（後編。）

するとその星爛の驚きの顔に雷龍もフツと笑い、「ご無沙汰しておりますね」。黄星爛。」

星爛「私の、僕、が来ないって・・・どういう事？」と睨みをきかせながら言った。

其れを聞いて夏美タバコを再び口に加え直しながら「まあ・・・アレだ。簡単に言えば、お前さ

ん所のへり等・・・以前日本に着陸等の許可を申請しないで無許可で着陸等した経歴が確か

あっただろう？」

星爛頷き「ええ。昔、あったわ。」と続け様に「ま・・・まさかっ?!」

夏美ニヤリと笑い「そう・その、まさかよ。」と続け様に「私
しやあの実家である

橘家本家とワカバの我が主である兄様オウガと入管管理局のお偉いさんと
友人同士

でね訳を話すと直ぐに入国禁止令を発してくれたよ。まあ・橘家
本家（家ん所）は

一部の人間だけだね。」

するとコナンと真弓は横目で笑いながら

橘家本家とオウガ様って入管管理局のお偉いさんとも知り合いなの
かよ。

と突っ込んでいた。

と同時に雷龍「其れを橘家本家とワカバのご命令を姉者經由で俺に命令が来たんですよ。」

と続け様に「残念でしたな。」

星爛其れを聞いて悔しがっていた。

と同時に「フン。まあ・良いわ。あんな人形どうせ来ても、役に立たないだろうし、

只・・・私は、九龍（雪美）に戻って欲しいだけ。」と更に続けて「その為なら、手段、

を選ばないわ!」 そう言い指を鳴らした。

すると星爛の号令と共に一斉に軍団らしき連中が出て来た。

コナン「・・・こっ、こいつ等は?！」

夏美タバコを吸いながら軽く舌打をし「こいつ等は・・・黄家の親衛隊!！」

コナン「何ッ?！」

と更に続けて夏美「黄家の親衛隊はな・・・コナン。‘殺しのエキスパート。’

でもあるんだよ。」

其れを聞いたコナンは更に驚いていた。

そして、星爛「さぁ・・・お前達！！私の‘愛しきパートナー’の為に‘こいつ等’を

排除しなさいッ！！」

親衛隊一同「ハッ！星爛様ッ！」

雪美は悲しそうに「・・・星爛。」と続け様に「私は、戻らないって、言ったのに・・・。」

と更に続けて「夏美ッ！！こうなったら・・・あんたも！！」と夏美を見て叫んだ。

夏美「・・・ッ！」

そして心の中で・・・。

炎龍を復活させろってか？！

冗談じゃねえ!!

だって・・・私じゃあはあの時、誓ったんだッ！

もう・・・あいつ、を失ってから・・・決めたんだッ!!

夏美の中に1人の少女の声が、木霊する。

そう嘗ての夏美が闇の始末屋炎龍をやっていた頃。

夏美を闇から救ってくれた少女の事を・・・。

夏美自身も最初から、闇の人間、では無かった。

ワカバの対立する組織広州の連中に両親を目の前で、殺され、

そして・・・仕舞いには嘗ての愛した男も・・・広州の手により目の前で、殺され、

そして表から闇に転落し・・・そして再び表に戻った。

そして・・・。

とある少女と出会い。

少女に触れ自分自身を、取り戻した、。

「お願い！！夏美さんッ！！二度と、始末屋、何てやらないで！！銃を持たないで・・・」

警察等以外で所持すると所詮銃は・・・人を殺める為の道具にしかならないのよ！、

だから・・・炎龍の名はもう・・・捨てて、お願い！！—

夏美

・・・かなえ香奈枝。

すると、雷龍が夏美の側に素早く寄り「姉者。」

そして夏美の耳に耳打ちをした。

夏美「・・・ワカバの命令，だったら・・・致し方ねえな。」

そう言い雷龍から1つの箱を受け取り雪美を見て「じゃ・・・一先ず席外すわ。」

雪美「了解。」

そう言い夏美星爛達にばれない様にどっかの死角に入って・・・。

香奈枝。すまない！

今回はどうか、許して欲しい。
、

私が・・・炎龍に戻る事を。

そう心の中で香奈枝に謝罪し、嘗て炎龍の頃に来ていた赤のチャイナ服そして黒のデニム

に黒の靴を履きそして・・・耳には赤い龍のピアスをした。此れが・・・
夏美が闇の始末屋

炎龍と呼ばれた頃の、戦闘服。その黒のデニムの左ポケットには
小型ナイフ。

右ポケットには・・・拳銃が入れられていた。

そして、夏美左腕の肩の部分にそっと手をやり軽く擦った。

すると赤い炎の様な龍の刺青が出て来た。

一方、外で待機していた赤井達は夏美を始め雪美達の様子が気になっていた。

並河「・・・なあ、赤井。俺達もソロソロ突入した方が良さそうじゃないか？」

赤井「・・・そうだな。様子を見に行くだけにしては、時間が掛かりすぎる、からな。」

そう言いタバコを携帯灰皿に揉み消ししまった。

そして並河と共に倉庫の中に入って行った。

ジンもその様子を見てフツと笑いながらタバコに火を灯し倉庫の中に入って行った。

第39章。星爛と雪美の再会。（後編。）

第39章。星爛と雪美の再会。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は夏美が闇の始末屋炎龍を復活させる所から書かせて頂く予定となっております。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

星爛「次章もどうぞ宜しくお願いしますね。

皆さん。」

第40章。闇の始末屋炎龍（エンロン）復活！（前書き）

今章は主に真弓から始まり夏美が炎龍を復活させる

所を書かせて頂きました。尚今章には残酷なシーンも

入っているので御覧頂く際にはご注意願います。

と同時に長丁場でもありますのでご了承下さい。

第40章。闇の始末屋炎龍（エンロン）復活！

アレから星爛の家である黄家の親衛隊と対立してしまう事となった。
。。夏美達。

雪美は其れを見て夏美に、炎龍、を復活させるように進めた。

だが、夏美自身は最初は此れを、拒否した、。何故なら嘗て自分を、闇から救ってくれた

少女、との約束があったからだ。其れを夏美自身守りたかったからである。

しかし・・・雷龍経由でワカバの、炎龍を復活せよ、。と命令を受け仕方なく・・・

炎龍を復活させる事となった。

だが・・・此れは、ずっとではなく一時期、と言う条件付でもある。

そして、外で待機していた赤井達も中に入って来た。

と同時にコナン達に黄家の親衛隊の攻撃が炸裂した。

コナンは麻醉銃で応戦しようとしたが・・・帰ってやられてしまう。

そして親衛隊の1人である。味漣マイレンの手に寄って壁に投げつけられ激突された。

コナン「・・・グッ!!」

その様子を見て真弓思わず「あ、相棒ッ!!」と叫んでしまいコナンの側に駆けつけ様と

したが・・昧漣の弟昧雷^{マイライ}によって道をふさがれる。

その様子を見て真弓昧雷を睨みつけて「・・どきなさいよ！あんたッ！！」

昧雷フツと笑い「其れは・・出来ませんね。お嬢さん。この私を、退けなければ。」と続け

様に「しかし、たかが、小学生のお嬢さん、にはこの、私を退かせ、には少々ご無理が

あるかと思いますがね。」

真弓その言葉を聞いてカチンとなり「私は、只の小学生じゃないッ！、もう・・此れは

あんたの主である星爛に知られているから・・教えてやるけど・・

私しやあの本当の名は

水野渚だッ!!!」

其れを聞いて昧雷「ほう。貴女が・・・あの有名な女子大学生探偵でしたか。

其れはとんだご無礼を・・・。私はてつきり。」と皮肉な笑みを浮かべ一礼した。

真弓「まあ・・・信じてもらえるかどうか分からんが・・・。とある日にね・・・ある男等を追って

いたら偶然にもある取引を目撃してしまっただね。案の定見つかり毒薬を飲まされたって訳

で・・・目が覚めたら、こんなってしまった、って訳よ。」と嫌味

を交えていった。

そして昧雷後ろに居るぐったりとしたコナンを見て「では・・・もしかしてあの少年も？」

真弓「いや・・・あいつは違う。只の・・・相棒の遠い遠い遠い親戚だ。」

とコナンの事ははぐらかした。と更に続けて「まあ・・・あまりにも似すぎているから

今でも間違えてあいつを‘相棒’と呼んでしまっただけだね。さて・・・おしゃべりは此処まで

あいつの為にも此処は通らせてもらおうか！！」　そう言い空手の構えをした。

真弓自身も空手をやっている。だが・・・大学の空手部に入っている

為かこの体になってから

行けてない。

昧雷「空手ですか……。良いでしょう。おごまかしいですが……。お相手しましょう。」

そう言い体術の構えをした。

そして真弓

・・待っててね！コナンッ！！さっさとこいつを倒して……。あんたの所にいってやっから！

そう心の中で呟き昧雷に向かって突進して行った。

だが・・・やはり体が縮んでいるせいでもあるのか・・・攻撃しても
交わされて逆に

やられてしまう。

真弓「キャアアア!!」

真弓コナンとは別の壁に激突した。

その様子を見て雪美「いっ・・・碇ちゃんッ!!」

真弓「クソッ！！やっぱ・・・この体、だとそう簡単に倒せないか。」

と良いながら自力で立とうとするが中々立てないで居た。

すると誰かの手が真弓に差し伸べられた。

真弓其れが一体誰の手かも知らずに「・・・あ。ど、どうも。す、すみません。」

そう言いその手を取る。

すると行き成りククッと言う笑い声が聞こえた。

真弓「ん？」

とその声に疑問を持った。

この声・・・どっかで聞いた事あるような・・・。

そう心の中で思いつつ恐る恐る上を見た。

すると「よう。また、会えたな。」「水野渚。」

とジンがニヤリと笑いながら真弓を見た。

真弓

ゲッ!! ジ・・ジンッ?!!!

ど・・どうして??!

クソ! こうなったら・・コナン見たく、あの作戦、で行くか・・。

すると真弓「お兄さん誰?^{だあれ}私、碇真弓だよ?」とコナンみたいに子供らしい

微笑でジンを見て言った。

ジン再度ニヤリと笑い真弓の前に盗聴器から録音したテープを出して再生した。

すると夏美達との会話を始め真弓と昧雷の会話が一斉に流れた。

その事を聞いて真弓顔色悪くし・・・固まった。

ジン「クククッ。残念だったな。お前が来る前に夏美に盗聴器を仕掛け・・・お前達の会話を

聞かせてもらったのさ。」と続けて「どうだ？此れでもまた・・・
‘ガキ’を演じ続けるつも

りか？水野渚？」

真弓「・・・・・・・・・・汗。」

クソ。

もう・・・駄目か’。

そう心の中で呟きそしてフツと笑い「降参だ’。もう・・・まいちやったな。」

と続け様に「で？どの辺で気づいた？’私しやあが幼稚化’したの？’」

ジンニヤリ「昔・・・お前が小学生のガキ組と帰っていた時からだ。」

真弓

ああ・・・ジン達と第2回目の再会を果たす前ね。

其れを聞いて真弓「・・・そっか。」と続け様に「どうするの？このまま私を殺す（ばらす）」

の？ジン？」

ジン真弓を見てタバコに火を灯しながらニヤリと笑い「いや・・・気が変わった」。

お前はそのまま、生かしておいてやるよ。」

真弓その事を聞いて驚き「え？そ、其れ、本当、？！」

ジン「ああ。」と続け様に「俺はお前を、気に入ったからな、気に入ったものは手放さない」

‘ 性分、なんでな。’ とニヤリ。

真弓「・・・有難う。」と続け様に「って！あんたッ！彼女居るんじゃないの?!」

ジン「ああ。居るぜ。」と続け様に「お前は俺の妹分として可愛がってやるよ。」

真弓「ハハハ。そりやどうも。」

すると昧雷「渚嬢、ソロソロ続きと行きましょうか？」とニヤリ。

真弓その事を聞いて「クソッ!! 女を舐めてんじゃないよ!!」

そう言いジンの手から離れて再び昧雷と対峙しようとしたその時

ズバッ！

と何かを切れる音がした。

すると昧雷の左腕から血が垂れた。

昧雷痛みで顔をしかめながら左腕を右腕で抱え「な・・・何者ですッ
?!」

すると「何者だ、？って？酷いな・・・昧雷。この私を、忘れると
は、。」

昧雷その声を聞き「なっ!!こっ・・・この声そして、この、やり口、まっ・・・」

まさかっ?!

「そう・・・そのまさかよ!」

そう言い1人の女が死角から出て来た。

昧雷その女を見て「あ・・・貴女は闇の始末屋炎龍^{エンロン}!!」

昧雷の目の前には炎龍の頃の戦闘服に身を包んだ夏美の姿だった。

夏美タバコに火を灯し「悪いね！今回はかりは・・・ワカバの命で闇
の始末屋炎龍エンロン

を復活させてもらおうよ！！！！」と同時に真弓を見て「渚ッ！！此処
は私に任せてお前さんは

コナンの元に行ってあげな！！」

真弓「夏さんッ！！」と続け様に「ごめん！恩に着るッ！！」

そう言いジンを見て「ごめん・・・。ちょっとコナン所行って来る。」

その事を聞いたジン「いや・・・俺も行こう。」そう言い真弓の後を
追った。

そして夏美は炎龍を復活させ味雷と対戦しようとしていた・・・。

第40章。闇の始末^{エンロン}屋炎龍復活！完。

第40章。闇の始末屋炎龍（エンロン）復活！（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は昧雷と夏美の対立する所から書かせて頂

く予定です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

真弓「ハハハッ。私しやあの正体がジンに遂に

ばれたよ。」と続け様に「次章も宜しくね！」

第41章。味雷対炎龍（エンロン）。（前編。）（前書き）

今章は、マイライ味雷と炎龍として復活した

夏美との対戦の前編を書かせて頂きました。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定ですが

次章に関しましては残酷シーンも恐らく含まれるかも

知れませんのでその辺はご理解とご了承として

ご観覧の際はご注意ください。

第41章。昧雷対炎龍（エンロン）。（前編。）

アレから夏美は一時期だが闇の始末屋炎龍として復活し真弓をコナンの元に送らせた。

昧雷「・・・炎龍。」

夏美（炎龍エンロン）タバコ吸いながら昧雷を見て「久々だな。昧雷。」

昧雷腕の血をぬぐい払いながら「久々ですね。炎龍。何時無頼でしようか？」

炎龍フツと笑い「さあな。‘忘れたよ’。」

昧雷「貴女は、引退した、と言う風にお伺いしましたが？」とニヤリ。

炎龍「ああ。確かに、引退、したよ？だがな・ワカバの（上）のご命令だったものでね。

一時期だが、復活させてもらったよ。」と更に続けて「さっきはうちの、小さな相棒達、

が世話になったようだね。」

昧雷「いやはや・其れほどでも。」と続け様に「其れでは・次の相手は貴女ですか？

炎龍。」

炎龍ニヤリと笑いタバコを携帯灰皿に揉み消し「ああ。そうさ。今度のお前さんの相手は

この私だよ。」と続け様に「覚悟するんだね。痛みが多分倍増になると思うからさ。」

そう言い再び小型ナイフと拳銃を取り出し「さあ・・・ソロソロ、おっばじめよう、か

お前さんと私の、祭りをさ。」と再び昧雷を見てニヤリと笑って言った。

その様子を見た昧雷は久々に、恐怖心、を抱き始めたと同時に昧雷自身もさすがに体術

だけでは難しいと思ったのか・拳銃を取り出して準備をした。

そして・2人の対戦が今幕を開けようとしていた。

第41章。味^{エンロン}雷対炎龍。（前編。）完。

第41章。味雷対炎龍（エンロン）。（前編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は前書きにも書かせていただきましたが

後編を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美タバコに火を灯し「次章もどうぞ宜しく！」

第42章。味雷対炎龍（エンロン）。（後編。）（前書き）

今章は前章の後編となります。

と共に今章では残酷なシーンも入っております。

のでご観覧の際にはご注意願いますと共に

長丁場となっておりますのでご了承下さい。

第42章。味雷対炎龍（エンロン）。（後編。）

そして……。味雷と炎龍（夏美）の戦いの火蓋が切って落された。

その戦いをコナンの所にやって来た真弓が見ていた。

真弓「……。すい。」

此れが、あの‘夏さん’？

ジンタバコに火を灯しフツと笑い「変わってねえ、な。」

コナンも其れを見て只啞然としていた。

其れ位2人の戦いは凄かったのだ。

其れを見た星爛は「昧雷ッ！さっさと、片付けちゃいなさいッ！」

昧雷「ハッ！星爛様ッ！」

そう言い空に舞い回転しながら蹴りを夏美に向けて放った。

しかし、夏美は銃を取り出し昧雷に向けて発砲し怪我を負わせ

そして・・・。

ごめん。母さん。

本当なら、こんな事、に母さんから受け継いだ拳法を、使いたくは無いんだけど・・・。

‘許してね’。

そう今は亡き母楓に心の中で謝り空に舞って「本当なら・・・使いたくないんだが、」

あえて、使わせてもらおう、！火炎風拳ッ！火炎風空中龍桜脚ッ！
「！」

（かえんふうくうちゅうりゅうおうきやく。）と読みます。技の名前にはあえてこだわりは

ございません。

其れはまるで炎の龍が空を舞っているかのようにだった。

其れを見た兄の昧漣が「避けろッ！昧雷ッ！」と叫んだが・・・

時既に遅し・・・夏美に向けて先に技を仕掛けた昧雷が先に下に戻っ

た為

夏美の技が炸裂してしまった。

そして・・・昧雷は壁にめり込まれてしまい其処で息絶えてしまった。

昧漣「・・・ま、昧雷？」

そう言い弟の側に駆け寄った。

そしてその場に偶然にもいた親衛隊の隊員が昧雷の体に触り安否を確認する。

しかし、昧漣の顔を悲しそうに見つめて「・・・大変に申し訳ございませんが。昧漣様。

弟君はもう・・・。」

昧漣はその事を聞いて只立ち尽くしてしまえばかりだった。

昧雷と炎龍の戦いはあっという間に終わってしまったが・・・。

炎龍自身にも何故か分からないが・・・心の中に言い様の無い、寂しさ、が込みあがって

しまっていた。

そう・・・此れは嘗て1度、闇に堕ちた自分が体験、した事が無い物だったのかもしれない

・そして、昧漣に向けて「許してくれ」とは言わない。‘恨みを持ちながら、此れからを

‘生きるなら、私を‘恨んでも構わない’。」と悲しそうに呟いた。

其れを聞いて逆に昧漣「・・・本当に其れで良いのか？お前は？」と炎龍に問いかけた。

炎龍タバコに火を灯しながら「ああ。其れでもし・・・お前さんの気持ち静まり

晴れるのであれば、な・・・。」

すると、昧漣からは意外な答えが返って来た「いや。俺はお前を、恨まんよ」。炎龍。」

炎龍その事を聞いて驚きながら「どうしてだ？ 私は・・・お前さんの弟を・・・。」

‘ やってしまっただぞ， ？！

昧漣「確かに・・・俺の弟はお前に， やられた， 。だが・・・お前だ
って， ‘ 好きで炎龍

復活させた， 訳じゃないんだろ？ だから・・・別に， ‘ 復讐， したって・
・意味ない。

それに・・・弟は， ‘ 復讐， と言う言葉はあまり好きじゃなかったから
な。」と隊員に

「丁重に葬ってやれ。ライフアン。」

ライフアンと呼ばれた男は「ハッ！」そう言い昧雷の亡骸を持ちその場を後にした。

ライフアンは昧漣と昧雷の実家である香港の名門黄家の召使でもあった男。

だから・・昧漣と昧雷の性格は保々って言っているほど把握していた。

炎龍は只複雑な思いだった。

と同時に昧漣、星爛を見て「今回ばかりは・・申し訳ありませんが俺の、好きにさせて、」

下さい。星爛様。」

星爛其れを見てフツと笑い「・・・甘いわね、相変わらず。」と続け様に

「別に、構わないわ、。今回はね。貴方の弟も、それなりに、ただ・・・」

頑張ってくれたしね。」

昧漣「有難うございます。」と続け様に炎龍を再び見て「恩に着的、炎龍。」

炎龍は昧漣のその言葉が理解できなかった。

昧漣「実は・・・弟はもう、病に掛かっていたんだ。だから・・・命のともし火、も」

下手をすれば後2日辺りにでも、消えそうだったんだ。」

だから・・・。

あいつにはせめて、自分の最後、を決めて欲しかったんだ。

と言った。

炎龍は其れを聞いてタバコを口に加え直し「・・・そうか。」

と呟き昧雷との戦いをした場所を離れ壁に寄りかかった。

その姿を見て雷龍「・・・姉者。」と悲しそうに呟いた。

第42章。味^{エンロン}雷対炎龍。（後編。）完。

第42章。味雷対炎龍（エンロン）。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は・・・炎龍として一時期復活を遂げた

‘今の夏美の’心境を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお付き合い下されば幸いです。

雷龍「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第43章。炎龍事夏美の今の心境。（前書き）

申し訳ありません。約1日ですか？遅れてしまいました

た。今回は夏美の心境を中心に書かせて頂きました。

此方も此方で長丁場ですのでご了承下さい。

第43章。炎龍事夏美の今の心境。

夏美「……………」

アレから昧雷との‘戦い’を終えた炎龍事夏美は壁に寄りかかりながらタバコを吸い続けている

た。其れも只無言のまま……。

その様子を遠めで見ていた雷龍、そして妹の雷明。

雷明「……姉上様。」と夏美を物凄く心配していた。

雷龍は只黙って見つめていた。

そして、「……姉者。」

今の姉者には炎龍ご復帰命令はあまりにも、酷、だったのでは？

オウガ様。共心の中で呟いた。

一方、赤井も並河も只黙って夏美を見つめていた。

其れは雪美も同じ事。

しかし、星爛はその様子を見て只フンツと鼻で笑うばかりだった。

すると、夏美1つの三日月のペンダントを取り出した。

「・・・香奈枝。」

お前はあの世で、怒っているだろうか？

‘あの時’のお前との‘約束を’破った私を・・・。

しかし、今回ばかりは‘許してくれ。’

ワカバの命令故に今回は・・・。

そう嘗ての闇の自分を、救ってくれた、少女に対して詫びを入れた。

と同時に懷にその三日月のペンダントをしまった。

するとコナンが真弓を連れて夏美の所に寄って来た。

コナン「・・・夏美。」

夏美「ああ。コナンか。」

コナン「ああ。俺だ。」

夏美「んで？大丈夫なのか？味漣達とどんぱちした時にお前さん壁に放り投げられたんだ

ろ？」

コナン頷き「ああ。大丈夫だ。心配すんな。」と同時に「辛そうだな。」

其れを聞いてフツと笑いタバコを吸いながら「そう・・・見えるか？」

コナン再び頷きそして真弓を見て「お前も、そう思うだろ、？碇。」

碇「・・・ええ。」

夏美再びフツと笑い「・・・そうか。」

と続け様に「姉者ッ！」

雷龍が夏美の所にやって来て「お疲れの所大変に申し訳ありません
！星爛達未だに雪美様を

・・・。」

夏美「そうか。」と続け様に「お前の妹と共に奴等を、成敗、しろ。」

（この成敗は、懲らしめる、です。）

雷龍「ハッ！姉者ッ！」と続け様に「雷明ッ！」

雷明「了解した！お兄様ッ！」

そう言い夏美の命で星爛達を追い返す為に向かった。

するとジンもタバコに火を灯しながら夏美の所に行き「ご苦労だったな。夏美。」

夏美ジンに一礼した。

と同時に再び前を見て黙ってタバコを吸い続けていた。

そして・・・。

‘ 本当の私 ’ は・・・。

一体 ‘ どっち ’ ？

いや・・・。

私は ‘ 表 ’

表の、人間として生きる、。

そう決めたのに・・・。

クソッ！

一体、どういう風になっているんだッ？！
、

分からんッ！

分からんッ！

ドッチガ、ワタシ、？

ドコガ、ワタシノキヨウカイセン、？

ヨクワカラナイ。

ドウシタノカナ？

タマニジブンジシンガワカラナクナル。

イツタイ・・・ドオシテ？

そして頭をかきながら「はっ。くだらねえ、な。」と苦笑いをし
‘己を晒った’。

第43章。炎龍事夏美の今の心境。完。

第43章。炎龍事夏美の今の心境。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は雷龍と雷明が星爛達と対立する所から書かせて頂く予定です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雷龍「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第44章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（前編）（前書き）

今章は、主に雷龍と雷明が夏美の命で星爛率いる親衛

隊と対立する所を中心として書かせて頂きました。

第44章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（前編）

アレから夏美の命を受け星爛率いる親衛隊と対立する事になった雷龍そして雷明。

星爛フツと笑い「次は、貴方達、が相手？」

雷龍「はい。そうです。改めて俺の名は雷龍。李雷龍。そして・・・」

雷明「妹の雷明。李雷明。以後お見知り御気を・・・」

と続け様に「姉上様のご命により貴女方を、止めに参りました。」

星爛「そう。でもね・・・九龍は私の大切な、パートナー、こんな所（表）でこのようにと

手放す訳にも行かないのよ。」と続け様に「さあ！お前達！あの2人をやってお仕舞いッ！」

親衛隊一同「ハッ！星爛様ッ！」

そう言い雷龍達に一斉に襲い掛かって来た。

一方、夏美は只壁に寄りかかりタバコを吸い続けていた。

と同時に・・・。

うちの弟分と妹分をなめてもらっちゃあ困るよ。

そして「雷龍ッ！雷明ッ！迎え撃てッ！」

と指示を出した。

雷龍、雷明「ハッ！姉者！

姉上様ッ！」

そう言い親衛隊を迎え撃った。

コナン「おい。あの2人に任せておいて大丈夫なのか？」

夏美タバコ吸いながら「ああ。問題ないさ。あいつ等ああ見えて結構、強いんだ。」

コナン「そうか。」

と夏美更に続けて「此れは多分うち等^{ワカバ}全員に通じる事だと思うけど・
・・。

私しやあがあいつ等を信じてやれなくて・・一体、誰があいつ等を
信じてやれるんだ、？

ってな。」

其れを聞いたコナンフツと笑い「・・確かに。一理あるかもな。」

ジンは黙って夏美達の会話を聞いていた。

と同時に真弓（渚）に「おい。水野渚。」

真弓ビクツとなりながら「な・・何？ジン。」

ジン「あの江戸川コナンってガキ・・。本当に、小学生か、？」

真弓「な、何言っているんだい？あ、当たり前じゃないか。」

と同時に心の中で・・。

‘言える訳ねえよな’。

コナンが私の相棒である新一だって事。

もし、言ったら、大変な事に、なる可能性があるからねえ。

ジンは只じっと真弓を見ていた。

その一方で雷龍達と星爛率いる親衛隊の戦いは続いていた。

第44章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（前編）完。

第44章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（前編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

今章も次章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雷龍「次章もどうぞお付き合いの程宜しくお願い致します。」

第45章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（後編。）（前書き）

今章では先月以来の更新となります。

お待たせを致しました。前章の続きで予めお断り致しますが今章では

もしかしたら残酷なシーンもある可能性もございますし、長丁場にもなる恐れ

がございます。のでご観覧の際には十分お気をつけて頂くかまた、

大変に申し訳ございませんが苦手な方はお控え下さいます様お願い致します。

第45章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（後編。）

すると雷龍が星爛の親衛隊の一員によって殴られ壁にぶっ飛ばされた。

雷明「あ、兄上様ッ！」慌てて兄の下に駆け寄る雷明。

雷明「兄上様ッ！大丈夫?!」

雷龍頷き「あ、ああ。大丈夫だ。少々油断しただけだ。」と続け様に

「俺達は、俺達が与えられた使命、を果たそう。妹よ。」

雷明心配しながらも強く頷いた。

一方、夏美は只タバコ吸いながら見続けていた。

と同時に今まで待機していたミサトとライカが夏美の下に来てミサト「夏美。」

夏美ミサトとライカに気づき「ああ。お疲れさん。」

ライカ何時もの様にタバコに火を灯しながら「お前さんは行かないのか？」

夏美タバコ吸いながら「今は、まだ、様子見だ。」と続け様に

「もしあの2人が、物凄くやばくなりそう、だったら加勢しに行く。」

ミサト「でも、それじゃ、遅いんじゃない？」

夏美「いや……。此れは、あいつ等に与えられた私経由のワカバの任務。」

邪魔しちゃあ悪いだろ……。

其れに、せっかく、一生懸命、己の任務を果たそうとして頑張って

くれているんだ。

其れを・・‘邪魔しちゃいけない’ あいつ等もあいつ等なりの‘意地’と‘誇り’があるからな・・。」

其れを聞いてミサトフツと笑い「そうね。そうだよね。」

ライカタバコ吸いながら「幾ら・・‘相棒同士’だって邪魔しちゃあいかんわな。」

夏美頷いた。

と心の中で・・。

雷龍。

雷明。

と呟いていた。

すると痺れを切らした星爛が「何やってんのッ！！相手はたかが2人よッ！！」

さっさと片付けてお仕舞いッ！！」

星爛の叫び声と共に対峙していた親衛隊が其々武器を持ちまた密かに倉庫内に潜んでいた

親衛隊の仲間が合流し、雷龍達に一斉に襲い掛かって来た。

そして親衛隊の手により雷龍達が傷ついてゆく。。。

其れを見たライカ「オイッ！相棒ッ！このままじゃ雷龍達持たないんじゃないか！？」

夏美タバコを携帯灰皿に揉み消し真新しいタバコもう1本取り出し火を灯しながら軽く舌打

し頷きながら「クソ！アレは・・・多分10人以上位いる！！」と続け様に

「ミサト！うち（ワカバ）に連絡し兄様^{あに}にうちの格闘部隊を米花港の倉庫に出動要請をして！」

ミサト頷き「了解したわ! 夏美!」そう言い携帯でワカバに連絡を入れた。

夏美「よし! 行くぞッ! ライカッ!」

ライカ氷棒を用意し「了解!」

と続け様に「コナンは危ないから此処に・・・。」

コナン「いや！俺も行くぜッ！このまま黙って見過ごす訳にもいかねえし・・・。」

俺だって、一応、ワカバのメンバーの1人だからさ。」とニヤリ。

ライカ「・・・でも。」

夏美「いや。構わんさ。ライカ。」

ライカ「けど・・・相棒。」

夏美苦笑いをし「こいつに、何言ったって、無駄だよ。こいつは、1度決めた事、に関しては

もう・・・とことんやるタイプだからさ。」

ライカフツと笑い「・・・そうか。」

と続け様に「負けたよ」。コナン。さあ・・・。行こう。」

コナン頷きそして真弓（渚）を見て「碇。お前は此处に居ろ。」

真弓（渚）頷き「了解。」

そしてコナン夏美達と共に雷龍達がいる戦場場へと向かった。

と同時にジン、ウォツカに連絡してこちらに来るように伝えた。

第45章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（後編。）完。

第45章。李兄妹対星爛率いる親衛隊。（後編。）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は多分・ワカバの格闘隊が出る予定です。

と共に雪美が星爛を完全に、裏切り、夏美達と共に戦う所も書かせて頂こう

と思っております。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雷明「・・・人数が多すぎ。」

ボソ。と続け様に慌てて「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第46章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。

今章は、雪美が星欄を裏切りそしてワカバと共に星欄との親衛隊と対立しようとする。

決意し対立する所から書かせて頂きました。此方も恐らく残酷シーンが

含まれまた長丁場になる恐れがありますので予めご了承頂きたいです。

第46章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。

そして夏美達も雷龍達に加勢した。

ライカは、死女、（しじよ）として・・・。

そして、夏美は、炎龍、（エンロン）として・・・。

だが、その前に2人は、ワカバである、。

ワカバの誇りも仕事も、忘れては居ない、訳じゃない。

只・・・。雪美を、守る為に、。

そして、赤井も並河も合流し加勢してゆく。

と同時に雪美自身もまるで、何かを決めたかの様に、拳銃を懷から取り出し。

ごめんね。

星爛。

私は・・・やっぱり、昔の様にあんたと共に歩めないよ。、

寧ろ、今の私は・・・国際警察の一員。、

だから、もう・・・。

‘ 闇の人間， だったけど・・・。

今は， 表の人間， だから・・・。

だから・・・。

私は・・・。

あんたを裏切り， あんたと戦う，

そう言いワカバ側へと歩みを進めた。

その様子をジンが遠巻きで見てニヤリと笑い「嘗ての、相棒、星爛を裏切り、国際警察の一員

としてワカバ側に加勢する事に、決めた、か……。面白しれえ。」

と同時に真弓「ねえ……。ジン。」

ジン「何だ？水野渚。」

真弓「あ、あのさ……。フルネームで呼ぶの止めてくれない？何か・・分らないが、落ち着かない

んだよね。」と苦笑い。

ジンフツと笑いタバコを吸いながら「そうか。じゃ・・渚と呼ばせてもらうぜ。」

真弓「有難う。」と続け様に「あんたは行かないの？」

ジン「気が向いたら行く・・。」と続け様に「雪美の奴がこの後星爛の奴を裏切りどういった

行動を取るのか・・を見たくてな。」

真弓「そう。」

すると、ウォッカがオウガの許可が下りたワカバ格闘隊の隊員と共に倉庫内に入って来た。

ジンウォッカに気づき「よう。」

ウォッカもジンに気づきジンの所により一礼すると同時に「兄貴。」

ジン「お前は、一緒に来たワカバの格闘隊の面子めんつと共に夏美達に加勢しろ。」

と言い戦場化している所を指差した。

ウォッカ「了解！」と続け様に「では、ワカバの格闘隊の皆さん宜しくお願いしやす！」

ワカバの格闘隊のメンバーは頷きウォッカと共に夏美達の所に向かって行った。

もう其処は傷だらけの戦場化としていた。

第46章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。（前編。）完。

第46章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。

今章は主に雪美の裏切りについて書かせて頂きました。

さて、次章は今章の後編について書かせて頂きます。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライカ「たく。参ったよ。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第47章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。

此方は本当にお久しぶりです。

多分一週間以上？以来の更新でしょう。

遅くなりまして大変に申し訳ありませんでした。

さて、今章は、前章の後編について書かせて頂く予定です。

此方は久々の更新となり噛み合うかどうか分かりませんが・・

精一杯書かせて頂きますので宜しくお願い致します。

尚、此方も残酷なシーンが予想されますその辺もご了承の程宜しくお願い致します。

第47章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。

倉庫の中心部もう戦場化していた。

今まで夏美の命で星爛の親衛隊と戦っている雷龍と雷明兄妹と共に
今度はワカバの格闘隊と共に

ウォッカも参戦していた。

と同時に夏美（炎龍）としてもライカ（死女）としても参戦し始めた。

其処にはもう傷だらけで血があちこちに散乱していた。

一方、渚（真弓）はその様子を見てあまりにも酷な光景だった為思わず顔を背けてしまった。

すると、ジンタバコ吸いながら「お前にとっては、辛れえか、？」

渚（真弓）頷き「私しゃあは一応、表の人間、だから尚更にね・・・」と呟いた。

其れを聞いたジンニヤリと笑い「そうか。だが・・・俺の妹分、になつた以上嫌でも

此れから、見る羽目、になろうだろうよ。」

渚（真弓）悲しそうに「・・・そっか。そうだね。」

と同時に心の中で私しやあも・・闇に染まっていったら、のか
な？

とも心の中で呟いた。

一方、星爛は只その戦を見物していた。

星爛

ワカバの格闘隊の連中も中々やるわね。

だけど・・・雪美を、取り戻す、のよ。必ず。

その、邪魔はさせないわ、。絶対に・・・。

そう呟き小型ナイフをスリットから取り出して親衛隊と合流しようとしたその時・・・。

パシユッ！

と銃弾が星爛の右肩を貫いた。

星爛顔をしかめて「誰ッ?！」　そう言い後ろを振り向いた。

と同時に驚いた。

其処にはサイレンサー付きの拳銃を持っていた雪美が立っていた。

星爛「ゆ、雪美？」

どうして？

と疑問を抱いていた。

と同時に雪美フツと笑い「悪いわね。星爛。私は、．．もう、あんたの相棒では、居られない。」

此処でもう・・・、関係に蹴りをつけさせてもらおうわよ。」と言った。

一方、ジンはその様子を見てニヤリと笑っていた。

第47章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。（後編。）完。

第47章。雪美星欄への裏切り。そして、ワカバ格闘隊登場、親衛隊との対立。

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は星欄が雪美に対してどうして自分を裏切ったかを問い詰める所から

書かせて頂く予定です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

星欄「・・・雪美。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願い致しますね。」

第48章。星爛、雪美への問い詰め。そして・・・（前書き）

此方は久々というべきでしょうか・・・。

今章は、星爛が雪美にどうして自分を、裏切った、かを問い詰める所から

主に書かせて頂く予定です。此方も此方で長丁場になる恐れがございます。

ので予めご了承頂きたいです。

第48章。星爛、雪美への問い詰め。そして・・・。

アレから、星爛は攻撃をワカバの皆に仕掛けようとした。

だが・・・返って、返り討ち、にされてしまった。と同時に自分を、撃った、者の姿を見た時には

物凄く、驚いた顔、を見せた。

何故かと言うと・・・自分が嘗て物凄く信頼していた、相棒、（パートナー）の九龍事雪美だった

のだ。

星爛自分の体の傷を支えながら「ど、どうして？ 貴女が？」

雪美悲しそうに「言ったでしょ？ 私は・・あんだ、の所に、戻るつもり、は無いと。」

だって、私は元々、好きで、闇に堕ちた、訳でもないし・・国際警察の一員。

このまま、私達、の、相棒と言う、関係を続けていても必ずや、どちらかが傷つく、

私はもう、そんなの、嫌だ、。寧ろ、今の私は、今の私の、任務、

をこなすまで・・・。

そう、‘国際警察の一員’、としてね。」と続け様に「その為に私は
‘あんたを裏切り’、

あんたを‘捕まえるわ!’、」と更に続けて「其れにあんたは‘過去
の私以上に’、犯罪を犯し続けて

来た。残念だけど・・・其れが‘災い’、となり向こう（香港警察）と
我々国際警察、FBIの

‘身柄拘束書’、が出てるの。」そう言い一枚の紙を見せた。

星爛其れを見て物凄く驚いた。

と同時に雪美タバコに火を灯し、「皮肉よね、？だって・・・。」
嘗ての相棒、に

「捕まえられる、んだからさ。」と星爛を見て言った。

星爛「・・・貴女は、其れで、良い訳？、其れで・・・？」

雪美「ええ。、勿論よ、悔いは無いわ！」

すると、いつの間にか倉庫内の戦場場に現れた赤井「と、言うことだ。残念だったな。」

星爛。
」

そして赤井と共に入ってきた並河も「お前は、我々、国際警察と・・・
FBIが、拘束し、

香港警察へと移送する。観念するんだな。
」

其れを聞いて星爛フツと笑い「そう・・・。
、残念だわ、。雪美。貴
女なら、分かってくれる、と

思ったのに。」と続け様に赤井達を見て「私はね・・・まだ、捕ま

る訳にも、いかないの。

此処で他にも仕事があるからね。」

すると、星爛の側近である有あり蘭尊が星爛の側に来て

「星爛様。我々の、親衛隊、がワカバ側の奴等に保々、ぼこされ、やられました。」

いかなさいます?。」

星爛「・・・そうね。一先ず、あの方、にこの、報告、も兼ねてお会いしにいかなきやいけない

からね。」と続け様に「皆に伝えて、一先ず撤収、と。」

尊一礼し「了解致しました。我が主。」

そう言い再び親衛隊に伝える為向かった。

と同時に一斉に国際警察を始めFBIが乗り込んできた。

ジンその様子を見てタバコを吸いながらニヤリと笑い「ほう。国際警察とFBIが

乗り込んできたか。」

ジンの隣に居た真弓は只、驚いていた。

そして・・・。

おいおい。国際警察とFBIそうで、乗り込みかよ。

この星爛って女よっぽど、危ない奴、なんだねえ。と心の中で呟いた。

そして、星爛の周りが国際警察とFBIによって包囲される。

その中にはジョディが居た。

ジョディ銃を構え「国際警察とFBIよ！星爛観念しなさいッ！も

う、逃げ場、は無いわッ！」

星爛クスと笑い「貴女と同僚にも言わせて貰ったけど・・・私は、まだ捕まる訳にも、行かないのよ。」

するといつの間にかコナンもサッカーボールをキック力強増シユーズの下に忍ばせ

「でも、周りを良く見るんだな。星爛さんよ。何処にも、逃げ場、は無いぜ？」とニヤリ。

星爛其れを聞いて再びクスと笑い「普通に見たら、そうね、でも・
・・。」

とコナンの所に来てコナンの目線になって「お姉さん、を舐めて
もらっちゃあ困るわ。」

探偵のボ・ウ・ヤ。」そう言い行き成りおでこにキスをした。

コナン「なっ!？」と顔を真っ赤にしまった。

星爛そのコナンの様子を見てクスクスと笑い離れて「私は、香港の殺し屋^{ヒットマン}」

星爛。「何も対策を練らないで此处に来た、と思っているの？」
そう言い

左手をパチンッ!と鳴らした。すると倉庫内から一斉に煙幕が出てきた。

そして・・・周りを包み込む。

コナン「待てッ！星爛ッ！あの方って一体誰だ？！」

星爛煙幕の中で再度クスツと笑い、「そのうち分かるわよ」。探偵のボウヤ。」と続け様に

「あ、でも・・・ヒントあの方は男性。今はそれだけよ。では・・・また再会できる事を祈っているわ。

その時まで、ジョイチャイン再見さようなら。」

そう言い星爛の声が途絶えた。

そして・・・。

煙幕が消えた。

第48章。星爛、雪美への問い詰め。そして・・。完。

第48章。星爛、雪美への問い詰め。そして・・・（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章のその後を書かせて頂く予定です。

最後の再見は広東語読みです。

ですが・・・一応本を見て書いたつもりですが自信があまり無いので

もし間違えてしまったら申し訳ありません。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「・・・次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第49章。星爛達が去ったその後・・・（前書き）

今章は、前章のその後を書かせて頂く予定です。

今章も今章で恐らく長丁場が予想されますのでその辺もご理解とご了承の程

宜しくお願い致します。

第49章。星爛達が去ったその後・・・。

アレから、煙幕が消え星爛達もその倉庫から消えていった。

コナン其れを見て「クソッ！逃がしたかッ！」

すると赤井がコナンの側にやって来て「焦るな。ボウヤ。また、どうせ、近い内に奴等（星爛）から

‘尻尾を出すさ。’」

コナン「・・・赤井さん。」

そして、夏美はワカバの格闘隊の所に行き「ご苦労さん！相棒達よ！此処の‘片付け’をして

引き揚げて良いよ。」

其れを聞いた格闘隊の隊員達は夏美を見て「了解しました。リーダー！」

そう言い片付けを始めた。

其れを見たウォッカも手伝い始めた。

と同時にライカも夏美の側に来て「お疲れさん。相棒。」

夏美タバコを吸いながら「ああ。でも、私は大して、やっていないさ。」と続け様に

「もう・・・この格好は、しないって、決めていた筈なのにな・・・。」

と炎龍と呼ばれた時代に来ていた戦闘服を悲しそうに見ていた。

と同時にライカに「・・・あいつ、あの世で怒ってるかな？」

ライカもタバコに火を灯し「さあ・・・どうだろうね。」と続け様に「でも、今回は・・・。」

夏美タバコ吸いながら頷き「ああ・・・そうだな。ワカバの命、だから仕方ねえか。」

と続け様に雪美を見て「しかしまあ・・・あいつも無茶するねえ。嘗ての相棒を振り切り・・・」

国際警察に戻るとは・・・。」

ライカタバコを吸いながら「そうだな。でも、彼女は元々・・・国際警察の一員。だったからね。」

其れを聞いた夏美頷き「そうだな。」

そう言い雪美の後姿を見ていた。

と同時に雪美もタバコに火を灯し「・・・星爛。」と呟き。

心の中で・・・。

‘悪く思わないでね。’とも呟いた。

第49章。星爛達が去ったその後・・・完。

第49章。星爛達が去ったその後・・・（後書き）

こ、此れって・・・長丁場かしら？（笑；）

失礼致しました。

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は取り合えずワカバについて書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雪美「次章もどうぞ宜しく！」

第50章。ワカバ。(前編。)(前書き)

今章では、星爛達との戦いを一先ず終えて赤井達がワカバに集合している

所から書かせて頂きます。此方も恐らく長丁場とされますのでご了承ください承の程

宜しくお願い致します。(此方は前、後編に分けて書かせて頂く予定です。)

第50章。ワカバ。（前編。）

アレから、星爛達との戦いを終え赤井を始め並河達がワカバに集っていた。

そして、夏美オウガに星爛達の事について報告した。

オウガ「成る程な。」と続け様に「ご苦労だった。夏美。其れに皆・
・。疲れただろう。」

ゆっくり休んでくれ。」

夏美を始めライカはオウガに一礼をして各自の部屋に戻って行った。

と同時にオウガ雪美を見て「こう言う言い方は失礼かもしれんがまさか・・・お前さんが星爛を

‘裏切る’とはな。」

雪美タバコに火を灯し「元々・・・多分星爛も‘口では私を信用している風に見せて’内心では

‘信用’していないと思ったからですよ。オウガさん。」

オウガ「・・・そうか。」と続け様に「何故そう思う？」

雪美「正直言って、彼女は性格が読めない、んですよ。‘何考えているのか分かりやしない。’

其れに・・・私の嘗ての国際警察の相棒をやったのがあの女でしたからね。」

と続け様にタバコを吸いながら「だから、最初っから、あいつは私を信用、していなかったのと

同じなのですよ。」

オウガ「で？お前さん。此れから、どうする、？」

雪美「代わりませんよ。私は此れからも・・・国際警察の一員、として、動くまでです。」

今度こそ星爛をと捕まえてやりますよ。」と笑いながら言った。

一方、コナンはアレからずっと考えていた。

星爛が去る時に言っていた、あのお方の事を・・・。

ジンと赤井はその様子をじっと見詰めていた。

するとコナン、偶々その場に居合わせていたライフエイに「ライフエイの兄^{あに}さん。」

ライフエイ「ん？何だ？」

コナン真剣な顔をして「ちょっと頼みたい事があるんだけど・・・。」

其れを聞いてライフエイフツと笑い「星爛の、主、の事について調べてくれるってか？

分かったよ。だが、まず星爛について調べる必要もあるな。」と続け様に「任せろ。相棒。」

コナン一瞬驚いたが直ぐに何時もの顔に戻り「お願いします。」

ライフエイ再びフツと笑いコナンの頭をクシャと撫でオウガの部屋を後にし

自分が所属する情報部に行った。

第50章。ワカバ。（前編。）完。

第50章。ワカバ。(前編。)(後書き)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編について書かせて頂きます。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第51章。ワカバ。(後編。)(前書き)

今章は、前章の後編について書かせて頂く予定です。

此方も此方で長丁場となる予定です。

第51章。ワカバ。(後編。)

ライフエイが情報部へ行った後、雪美はコナンの所に行き小声で「ねえ……。コナン君。」

コナンも小声換えして「何？町原さん。」

雪美「唐突の事聞くけど……。コナン君ってさもしかして……。星爛の奴に、気に入られた、？」

其れを聞いてコナン苦笑いをしながら小声で「ま、まさかあ。んな訳ないよ。誰が……。こんな小学生」

相手するの？」

雪美クスと笑い小声で「星爛の奴はね、ああ見えて結構、子供好き、なのよ。」

と続け様に「理由は分からないけど・・・気をつけたほうが良いわよ。」

コナン再び苦笑いをしながら小声で「有難う。気をつけるよ。」

そして、横目で心の中で・・・。

本当は俺、子供じゃねえつつうの、。

と続け様に本当は高校生だってええの。

まあ・・・此処では、ジンがいるから下手な事言えねえけどな。

と内心で呟いていた。

と同時にライフエィ情報部から戻って来て「コナン。」

コナン「あ、ライフエイの兄さん。何か掴んだ？」

ライフエイ「ああ。」と続け様に「でもまあ……。気晴らしに外出るか？話はソツからだ。」

コナンも頷きライフエイと共に部屋を出た。

第51章。ワカバ。（後編。）完。

第51章。ワカバ。(後編。)(後書き)

な、長丁場ではありませんね(汗)

申し訳ないです。ネタが・・・(汗)

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はライフエイがコナンに星爛の主について話す所から書かせて頂く予定

です。其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライフエイ「次章もどうぞ宜しくな。」

第52章。ライフエイから語られる星爛の主。（前書き）

若干ですか・・・お久しぶりの更新となりましたが（汗）

さて、今章はですねライフエイがコナンに星爛の主について語られる所を

書かせて頂く予定です。多分此方も此方で長丁場となる予定でございます。

第52章。ライフエイから語られる星爛の主。

アレから、ライフエイはコナンを連れて屋上に出た。

そして、ライフエイコナンに事前に自販で買った缶コーヒーを渡した。

コナンは軽く礼をして缶コーヒーをライフエイから受け取り開けて飲み始める。

と同時にライフエイも缶コーヒーを開け飲み始めた。

そして・・・。

コナン「ライフエイの兄さん。」

ライフエイ「ああ・・・そうだったな。星爛の主の事だったな。」
と続け様に

「まあ・・・多分長話になると思うが・・・。」

コナン「構わないよ。」

其れを聞き話し始めた。

そして・・・話が終わった。

コナン「え？じゃ・・星爛の主って・・夏美が炎龍時代の相棒である黒龍コクロンと呼ばれた

えいざんかい 叡山会の会長である。りゅうまや 龍正也なの？」

ライフエイ領きコーヒーを飲みながら「ああ。そうだ。」と続け様に「お前良く知ってるな。」

コナン「前に夏美の前にそいつが現れた事があってその時に夏美から聞いたんだ。」

ライフエイ「・・そうか。あいつ自身から聞いたのか。めったに・・炎龍時代の事なんざ・・

話したがないのにな。」とも呟いた。

そして・・・。

ライフエイ「正也はな・・・夏美自身を再び自分の‘相棒’として側に置こうとしているんだ。

無論・・・闇の始末屋炎龍としてな。あいつも炎龍時代には‘かなり
の凄腕’だったから・・・

尚更な・・・。」

コナン「じゃ・・・俺が居たあの時・・・まさか。」

ライフエイ「多分・・・自分の所に変な言い方かもしれんが、戻って来い、と揺さぶりをかけて来たん

だろう。あいつもあいつで結構、執念深い、奴だからな・・・。」

コナン「・・・そっか。」

そう言いひたすら黙ってコーヒーを飲み続けた。

ライフエイはコナンを見て「まあ・・夏美の事は心配いらんさ。ちよつとのちよつとじゃ・・

あいつの事だからワカバから、抜け出す、事は無いだろうよ。」

そう言いライフエイも缶コーヒーを飲み続けた。

第52章。ライフエイから語られる星爛の主。完。

第52章。ライフエイから語られる星爛の主。（後書き）

な・・・長丁場なのかしら？此れ（笑；；）

・・・失礼致しました。

今章もお付き合い下さりありがとうございます。

さて、次章はその夏美の炎龍時代の嘗ての相棒について書かせて頂
く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお付き合い下されば幸いです。

ライフエイ「次章もどうぞ宜しく！皆さん。」

コナン「僕からも宜しくお願いします！」

第53章。夏美の嘗ての炎龍時代の相棒黒龍そして・・・（前書き）

ご無沙汰しております。此方も大分更新遅くなってしまいました（汗）

さて、今回は夏美の相棒である龍正也が出て来る予定です。

此方も此方で長丁場になる恐れありますのでご了承の程宜しく願います。

此方も若干残酷表現がある予定ですその辺もご了承の程重ねてお願い致します。（尚、違うジャンルのキャラがもしかすると出る可能性もございますその辺も重ねてご了承の程宜しくお願い致します）

第53章。夏美の嘗ての炎龍時代の相棒黒龍そして・・・

此処は、杯戸町の某ビル此処に叡山会のアジトがあった。

アジトにある喫煙所1人の男がタバコを吸って1枚の写真を見ていた。

その男が見ていたのは何と夏美の写真だった。そう、この男は夏美が炎龍時代に嘗て共に過ごした相棒

である黒龍事、龍正也だった。

正也タバコ吸いながら「・・・炎龍（夏美）」

何時からだったろうか？俺達が、互い違い、になったのは・・・お前は昔はあんなに、大暴れ、で

‘血を浴びるのを、まるで、楽しんでるようにも、見えた。まるで、お前の中に炎の龍が、いるかの

様に・・・。だが今のお前は・・・。腑抜けてしまったようにも見える、まるで炎の龍が、

水に落ちたかの様に・・・。だが、俺は、諦めねえよ、必ずお前を、俺の側にまた相棒として、

取り戻してやるよ。すると、喫煙所に1人の男が入って来たと同時に正也その男を見てフツと笑い

「・・・高杉か？」高杉と呼ばれた男はクククと楽しそうに笑い正也の所に寄ってきてタバコに火を灯し

ながら「・・・よオ。正也」と挨拶をし「何だア？あの、嬢ちゃん、まだ、戻らなねェ、ってか？」

高杉の言う、あの嬢ちゃん、とは夏美の事。

正也タバコ吸いつつ「ああ・・・。本人曰くもう、戻らない、ってよ。」と続け様に「まったく・・・」

嘗ての闇の始末屋と呼ばれた炎龍ともあろうものが情けねえぜ。」と皮肉笑いを言いながら

「あいつは、元々、こっち側、だと言うのによ。」其れを聞いた高杉はタバコを吸いながら再びククク

と笑い「そうかい。戻らないねエ・・・。」と続け様に「で？お前エさんの‘部下’からの報告は？」

正也「ああ・・・星爛の事か。奴は夏美と対峙して訳を聞いたらしいんだが・・・どうも、夏美は星爛と

そりが合わないらしくてな共に居たくないんだと。まあ、あいつも多分夏美の‘大切なもん’奪っちま

ったらしいから仕方ねえってか。」其れを聞いた高杉も「そうかい・・・。」と続け様にニヤリと笑い

「まア、俺達にア・・・関係の無い’事だがなア」其れを聞いて正也も笑い返し「‘違いねえ’」

と返した。一方、夏美はと言うと・・・。

アレからワカバに戻り自分の部屋に閉じ籠もったままだった。

そして、無言のままタバコに火を灯し何時もと同じ様に吸い続けていた。

第53章。夏美の嘗ての炎龍時代の相棒黒龍そして……。完。

第53章。夏美の嘗ての炎龍時代の相棒黒龍そして・・・（後書き）

今章もお付き合ひ下さり有難うございました。

今回銀魂の高杉さんを出させて頂きました。まあ・・・正也との顔なじみという設定です。今の所。尚、私の小説には小説にも寄りますが違うジャンルとの、コラ

ポ、見たいな物が若干含まれますのでその辺もどうぞご理解の程宜しくお願い致します。また、こう言ったことがあれば・・・事前に前書きの方でお知らせさせて頂く予定でもありますのでその時はお手数ですがチェックして頂ければと思います。

さて、次章は・・・夏美の心境について書かせて頂こうと思っております。

それでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

夏美「・・・次章もどうぞ宜しく。」

第54章。夏美の今の心境。（前書き）

大分ご無沙汰してしまって申し訳ございません（汗）

テストやら・・・で停まってしまい（汗）

ネタが余浮かばず（汗）と長期ほっぽりになってしまいました（汗）
気を取り直して今章では夏美の今の心境について書かせて頂く予定です。

尚、此方も長丁場及び高杉さん出演予定なので・・・混合がお嫌いな方のご観覧は

お勧めできません（汗）

第54章。夏美の今の心境。

アレから、夏美は只只自分の部屋でタバコを吸い続けていた。と同時に窓を見ながら・・・

タバコの煙を吐き出し「・・・黒龍。お前さんは一体何したかったんだ？」と呟きそして・・・。

私を、闇の世界に連れ戻す為、にあえて、奴（星爛），を放ったのか？

でもな・・・もう私は、後戻りは出来ない、んだよ。お前さんがどんな風にまた戻りたいと、願って、

いてももう後戻りは出来ないんだ。夏美苦笑いをし「ハッ！私しやあも私しやあである意味、情けな

く、なったものだ。もう振り返らないと決めたんだけどね。」だが、現実には中々そうは行かないってか

すると、テーブルに置いてあった携帯が鳴った。

夏美タバコを灰皿に置き携帯のディスプレイを見た其処にはこう記載されてあった。

‘非通知’と。夏美は一瞬戸惑った。其れもそのはず基本的に夏美は‘非通知’は出ない。

何故なら、誰か知らないからだ。だが、今回ばかりは何か‘違う’と感じたのか知らずに通話ボタ

ンに手が行きそして押し「・・・もしもし？橘ですが・・・。」すると電話越しからクククと笑い声が

聞こえ「よォ・・・。橘の嬢ちゃん。」その声を聞き夏美は思わず固まってそして「・・・・・・・・」

「・・・た、高杉晋助。」とその相手の名を恐る恐る呼んだ。

第54章。夏美の今の心境。完。

第54章。夏美の今の心境。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございました。

ごめんなさい！本当に遅くなってしまつて・・・。

ですが、出来る限り早めに更新出来る様に勤めます。

さて、次章は、この続きを書かせて頂く予定です。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

コナン 「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第55章。高杉との会話。(前編)(前書き)

今章は、コラボ的な部分も含まれておりますのでご観覧の際にはご注意ください。

尚、此方は前、後編に分けさせて頂く予定です。

第55章。高杉との会話。（前編）

夏美はその声を聞いて只電話越しで驚いていた。どうしてあの男が私の電話番号を知っているのか？

疑問に思っていた。其れを察知したのか高杉電話越しで再びクククと笑い「何だァ？まるでどうして

俺がお前エの電話番号を知っているのかが疑問視されている見てエだなァ？」夏美は只今まで吸っ

たタバコを灰皿に揉み消し再び懷からタバコを取り出し火を灯した。高杉再び「どうしたよ？何で何も

言っ

て来ねエ？」其れを聞いた夏美はタバコを吸いつつようやく口を開き「・・・何用です？」と続け様

に「何故・・・私の番号を貴方がご存知なんです？」とも聞いた。高杉其れを聞いてタバコに火を灯しながらクククと笑い「警戒心が丸出したなァ？」と続け様に「お前エの電話番号はあいつから聞いたんだよ。」其れを聞いた夏美は一瞬脳裏に正也の事を思い出し「・・・正の奴まさからですか。」と続け様に「・・・勝手な事を。」と若干不機嫌そうに小声で言った。高杉「あいつもお前エに会いたがっ

たぜエ？炎龍さんよオ。」その事を聞いた夏美は「・・・その名で呼ぶのは止めていただけませんか？高杉さん。もう私は・・・。」其れを聞いた高杉は楽しそうに「炎龍じゃないってか？お前エ本気で、闇から抜け出せたと思っ

ているのか？」其れを聞いた夏美再びタバコを吸いながらも「ええ・・・

だって私は、好きで、闇に堕ちたのではないのですから……。只・
……。」

亡くなった恋人隼人がそうだった様に彼がやった事を只継いだだけ
とも呟いた。

高杉は其れを只黙って聞いていた。

第55章。高杉との会話。（前編）完。

第55章。高杉との会話。 (前編) (後書き)

今章もお付き合いくださしまして有難うございます。

さて、次章は今章の続きを書かせて頂く予定です。

それでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「次章もどうぞ宜しく。」

第56章。高杉との会話。(後編)。(前書き)

お久しぶりです。今章も前章との続きです。

多分長丁場になる恐れあります。

第56章。高杉との会話。（後編）。

すると、高杉が口を開き「だから・戻らなねエ、とでも？」夏美も其れを聞いてタバコを吸いつつ

「はい。寧ろ私は、表にもなりきれず闇にもなりきれない者、ですから。それに・・・今の私は

‘ワカバ’です。それ以外にも以上でもありません。」其れを聞いた高杉はククと笑い「そうかい。

ふ抜けたものだなア・・・。炎龍と呼ばれた物が。こんな事を言い出すとはなア？」其れを聞いた夏美は一瞬黙った後・・・。「失望、しましたか？ ‘こんな私に’。」そう、夏美には他にもいえない事があつた。嘗て、炎龍の頃高杉に雇われていた‘始末屋’だったからだ・・・。それに腕も悪くは無かった。決して・・・。高杉ククと笑い「いやア・そんな事たアねエよ。寧ろ、‘元氣そうで安心したぜエ？’ ‘夏美よオ’。」と続け様に「正也ともう1度やり直すつもりは？」夏美其れを聞いて「・・・いえ。残念ながらありません。あいつは‘あの女（星爛）’の主。女と共に居る奴とつるみたくありませんから・・・。」高杉タバコを口に加え直し「・・・そうかい。」夏美頷き「はい。申し訳ありません。高杉さん。」高杉再びククと笑い「いや・俺ア別に構わねエんだが・・・。正也の奴が黙って見過ごす訳にもいかなねエと思うんだがなア・・・。」夏美フツと笑いタバコを灰皿に揉み消しもう1本タバコに火を灯し「確かに・・・あいつの性分上、黙って見過ごす訳、無いですね。只・・・。」

高杉タバコ吸いつつ「只・・・。何だア？」夏美警戒心を見せながら「幾ら、あいつが嘗ての相棒だったとしてもワカバや私の大切な人達に手を出すような事があれば、容赦はしません、！！！」其れを聞いた高杉は思いっきり高笑いをし「勿体ネエなア、どうして・

・其処までやる必要があるんだよオ
大切な物はどうせ・後から、邪魔になるだけだぜエ、？昔俺ア・
・そう教えたはずだがなア。」

夏美タバコをもう1度口に加え直し「亡き両親、大樹と楓との、約束、だからです。元々私達橘家本家の人間はワカバに仕えるのが宿命ですから・私はその、約束と宿命、を受け継いだだけです。」

高杉其れを聞いて「・・・オイ。此れは、一体どう言う事だ？、説明しろ・・・夏美。」

夏美一瞬思い出しああ・・・そう言えば高杉さんも母さんの事を・・・
・・・。

愛していたんだ。心から・・・。「高杉さん、母楓は約10数年前位に起こった広州とワカバの戦に

父と出て其処で・・・。「亡くなりました、」その事を聞いた高杉に衝撃が走った。そして・

「か、楓の奴が、し、死んだだと？、」と夏美の耳元で高杉の震えるような声が響き渡った。

夏美頷き「はい。」と続け様に「だから・・・もう、私も、失うのは沢山なんですッ、！！だから・・・

父と母が今まで護ってきたものを・・・今度は私が護り続ける！！
！だから・・・私はもう、表、として

これからも生き続けます。広州の連中や・・・それに協力する者も・・・。「すると高杉から再度クククと笑い声がした其れもまるで低くそして冷たい様な「夏美ィ・・・俺アも、協力してやるよ、俺ら2人で楓の、仇、をとってやろうやア・・・。お前エは、表、ではどう考えても、生きられネエ、んだよオ。ワカバのやり方は奴等にとっちゃア、生ぬるい、奴等に、恐怖、というものを味合わせてやろうやア・・・。また、俺が正也に変わりお前エをパートナー（相棒）として迎え入れてやるよオ。もし、前の様に俺アに着くなら約2週間後に俺アの携帯に連絡を入れや。」其れを聞いた夏美は黙ったものも一息つき「・・・分かりました、」高杉其れを聞いてフツと

笑い「出来るだけ、良い返事」を待っているぜエ？夏美よオ。」そう言いつつ「じゃあな。」そう言い電源を切った。と同時に夏美の部屋には静寂が流れた。と同時に夏美携帯を見つつ「どうしてほっ」といってくれないの？どうして？今の私に構うの？只……ワカバの為に尽くしたいだけなのに……。」母さん。母さんは、高杉さんの所に居て幸せだった？私には、良く分からないよ。教えてよ……母さん。するとノック音がし夏美が「どうぞ」と言って入室を促す。するとコナンが赤井と共に入って来た。

第56章。高杉との会話。（後編）完。

第56章。高杉との会話。（後編）。（後書き）

今章もお付き合いくださりまして有難うございます。

さて、次章は夏美とコナン達のやり取りを書かせて頂く予定です。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第57章。赤井達と夏美（前編）。（前書き）

御無沙汰しております。今回は、赤井さん達と夏美のやり取りについて此方も

前、後編に分けさせて書かせて頂く予定です。

此方も恐らく長丁場になる予定です。

第57章。赤井達と夏美（前編）。

夏美は、アレから只携帯を見続けていた。

すると、コナンが夏美に近づき「よお。何、しけた顔^{ツラ}してるんだ？
夏美？」

夏美コナンを見て一瞬驚きながらもフツと笑い「何時から居たんだ？
相棒？」

コナン両目を瞑りフツと笑い返し「お前エが、電話終えた時から、
さ。」と続け様に

「電話の相手、高杉、だろ？」と聞かれ夏美は驚きながらも「良く
分かったな？」

するとコナンポケットから小型カメラ付き盗聴器（録音機能付き）
を取り出し詫びる様に

「悪いな。ちよいとお前エの事が気になってよ。、付けさせて、貰
ったぜ？」

夏美苦笑いをしながらタバコを灰皿に揉み消し新しいタバコに火を
灯しながらコナンを見て

「成る程ね。、そいつで分かっちゃった、ってか・・・。」と同時に
赤井を見て再び苦笑いを浮かべ

「秀さんも居たんですか？」と聞き赤井フツと笑い「基本的にボウ

ヤが居れば俺も居る。」と続け様に

「それとも、俺が居ては不味かったのかな？」と夏美を見てニヤリと笑い換えした。

夏美其れを聞いてタバコを再び口に加え直しながら苦笑いを浮かべ「いいえ・・特には。」

そう言い窓を見て外の風景を見ていた。辺りはすっかり夜になっていた。

夏美タバコ吸いながら「・・夜か。」とボソと悲しそうに呟いた。

そして、心の中で・・・・・。

母さん。今の私をどう思っているのかな？

怒っている？

それとも・・哀れんでいる？

悲しんでいる？

アレ以来（父さん達が消えてしまっていた時）から何か、時間が
停まった様に、思えるよ。

どうしてだろうね？

私が、闇（炎龍）側に堕ちてしまったあの時からなのかな？

一体、何が正しいのか……。正しくないのかが……。正直、今の私に
は分からないよ。

すると先程の高杉との、俺と一緒に楓の、仇、をとろうや。お前エ
はどうせ表では生きられねえんだか

らよオ、会話を思い出した。

夏美はその言葉を思い出した途端思わず黙り込んでしまった。

その姿を赤井達は黙って見続けていた。

第57章。赤井達と夏美との会話。（前編）完。

第57章。赤井達と夏美（前編）。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は今章の後編をお届けする予定でございます。

それでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

赤井「次章もどうぞよろしく頼むよ。」

第58章。赤井達と夏美（後編）。（前書き）

今章は前章の後編となります。

多分此方も長丁場です。

（編集可能性あり）

第58章。赤井達と夏美（後編）。

すると、赤井タバコに火を灯しながら夏美に近づいて来て「高杉の奴に、何か言われたか？」

と聞き夏美タバコを吸いつつフツと笑い「どうせ・・・盗聴していた、から分かるんじゃないですか？」

秀さん。」そう言い窓から離れてソファーに座り込んだ。

と同時に夏美は赤井達を見て「それで？どうしたんです？2人して来るとは何か用でも？」

赤井タバコ吸いながら「星爛の捕獲に協力して欲しい。お願いできるか？」

夏美頷き「ええ。勿論ですよ。あの女前からどうも気に食わなくてね・・・。寧ろ牢獄にぶち込みたい

位ですよ。」赤井其れを聞いてフツと笑い「今回はいつもより気が合いそう、だな。夏美よ。」

夏美フツと笑い赤井を見て「気が合う、事なら何時もの事でしょ？、秀兄さん。」

赤井其れを聞いて一瞬驚きながらも再びタバコ吸いながらフツと笑い「懐かしいな、その呼び名。」

夏美もフツと笑い換えしながらタバコを吸い「何せ、私と秀美さんは‘兄妹分’同士ですからね。」

と赤井を見て言った。

其れを聞いた赤井自身もタバコを吸いながらフツと笑い夏美を見て「・・・確かに、そうだったな。」

そう呟いた。

コナンは只其れを黙って聞いていた。

いや、何も言わなかった、って言い方の方が正直、正しかったのかもしれない。

せっかくの久々の、兄妹分同士、の会話を邪魔してはいけない・・・。

そう思ったからだ。

そして、何時の間にか知らずに、静寂が、流れていた。

と同時に夏美再び心の中で・・・。。

高杉さんのあの言葉は・・言わずに自分自身の中でしまっておいて置こう。

其れが良いかもしれない。

私は・・・・・。

只・・・・・。

皆を・・・・・。

巻込みたくなかった。

本当に、只只・・・・・・。

それだけ。

本来ならば、闇の人間、（だった者も含む）が、表の人間、と会い
まみれてはいけないのよ。

なのに・・・・・・。

私は・・・・・・。

ヤミノニンゲンノクセニ・・・。

オモテノニンゲンノソバニイヨウトスル・・・。

イヤ・・・。

オモテノニンゲンノセカイニモドロウトスル・・・。

ベツニソレガワルイワケジャナイノニ・・・。

ソレヲモウヒトリノジブンガヒテイスル・・・。

ソレナノハジメツカラワカリキツテイタハズナノニ・・・。

ナノニ・・・。

ナノニ・・・。

ナノニ・・・。

ヤミノモウヒトリノジブンハ．．．．。

ワタシヲカイホウシヨウトシナイ．．．。

ワタシハホントウニ．．．。

ドツチガワナノダロウ？

ヤミ？

ソレトモ．．．。

オモテ？？

そう夏美は心の中で呟きタバコを吸い続けていた。

赤井は只そんな妹分の肩をソツと無言のままに手を置いていた。

赤井達と夏美。(後編) 完。

第58章。赤井達と夏美（後編）。（後書き）

今章もお付き合ひ下さり有難うございます。
無事に編集完了しました。

コナン何も話していませんでしたね（苦笑；）

さて、次章はコナンの今の心境について書かせて頂く予定です。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

コナン「次章もどうぞ宜しくお願いします！」

第59章。コナンの今の心境。（前書き）

今章はコナンの今の心境について書かせて頂く予定です。

此方も此方で多分長丁場になる恐れあります。

第59章。コナンの今の心境。

コナン「・・・夏美。」

アレからずっと夏美の事を見てきたコナン。

だが、自分の中に何故か言いようの無い、寂しさ、を何時の間にか覚えていた。

なあ・・・。夏美。

俺はお前エの過去に何があったのかはあえて聞かねエ。

其れがお前エ自身にとって余にも、嫌な事、だったと思うんだ。

対立する広州の連中により両親や恋人までも、消されて、

尚且つ、その恋人がやっていた、闇の仕事、にも手を染めたんだ。

俺は、ライカ達より付き合いは短けエが・・知っていたり、気づいていたりしているぜ？

本来のお前エは・・・・。

‘仲間思いの優しい奴、だと。

自分自身の過去を多少振り替えつつも……。

自分自身で、自分のやり方、で、守ろうとしている事も、。

コナンは何時の日か話したライカのあの言葉を思い出した・・。

『あいつはね、不器用だけどちゃんとアレでも仲間の事思っていたり守っていたりしているんだよ。』

その不器用さは母親の楓さん譲りだろうね。アレから一人で、背負い込もうと、していたんだよ。

其れは幼馴染の私でも分かるんだよ。実際に私も私で知らない間に

色々を守ってもらっていたからさ

だから、コナン坊頼むからさ。あいつがもし、破裂して壊れそうになっちゃったら・・・。

‘お前さんが支えてやってくれ。’ あいつはああ見えて結構、脆い所、もあるんだよ。〜と。

コナン其れを思い出してフツと笑い。

ライカ。

ああ。勿論さ。

お前エが言った事を俺はちゃんと果たしてやつからよ。

でもな・・・。。。

それでも、俺でも出来ない部分、が必ず出てくると思うのさ。

その部分は悪リイが・・・お前エ頼んだぜ？

きつとだぜ？

ああ・・・。

俺が、こんな体じゃなきゃ・・・。

蘭と同様にあいつも抱き締めてやれたのに・・・。

クソがッ！！！！！！

自分が情けねエ!!!!!!!!!!

本当に・・・・・・・・。

本当に・・・・・・・・。

情けねエ・・・・・・・・。

第59章。コナンの今の心境。完。

第59章。コナンの今の心境。（後書き）

今章もお付き合いくださいまして有難うございます。

何か・・コナン君やんでいますね？（笑；）

さて、次章は・・赤井さんの今の心境について書かせて頂くかもしれません。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライカ「次章もどうぞ宜しくね！」

第60章。今の赤井の心境。（前書き）

大変に遅くなりました。（汗）

今章ではですね赤井さんの心境について書かせて頂く予定です。

此方も多分長丁場になる恐れあります。

第60章。今の赤井の心境。

赤井「・・・夏美。」

何時からだったろうか？お前が、俺の事、秀兄さん、ではなく、秀さん、と呼ぶようになったのは。

1度、
‘闇に堕ちて、’からか？

それとも・・・成長につれて、
‘兄さん、’と呼びづらくなったのか？

人間とは、
‘分からないな、’。

自分（俺自身）が知らない所で知っている人間が何時の間にか、代わって言うてしまう。

何故かな？

‘ 今のお前を見ると、 ‘ 余計に過保護したくなる、 ’ 。

なあ・・夏美。

俺じゃあ、頼りないか？、

隼人って奴の、代わりにはなれないのか、？

今まで黙っていたんだが・・・実は俺お前の事・・・。

好きなんだぜ？

‘守ってやりたい’んだよ。

だから・・・。

お前が悲しそうな顔をするとか方まで悲しさと空しさがこみ上げて
しまうんだ。

昔の俺には・・・余考えない事だな。

だから・・・。

夏美。

頼む。

頼ってくれ！

お前が再び、壊れてしまう前に、

‘闇に堕ちてしまう前に、’

だから・・・。

高杉の奴やジンの奴の所には・・・。

行かないでくれ。

と俺自身そう願うばかりだ。

第60章。赤井の今の心境。完。

第60章。今の赤井の心境。（後書き）

こっ、これって長丁場なのかしら??（笑;;）

今章もお付き合いくださいませ有難うございます。

さて、次章は、高杉さんの連絡の二週間後について書かせて頂く予定です。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

赤井「次章もどうぞよろしく頼むよ。」

第61章。高杉からの連絡の約二週間後・・。(前編)(前書き)

今章は高杉さんからの連絡から約二週間後の夏美を書かせて頂く予定です。

尚、此方も恐らく長丁場予定です。その辺もご理解とご了承の程宜しくお願い致します。

此方も前後編に分けさせて頂く予定です。

第61章。高杉からの連絡の約二週間後・・・（前編）

アレから赤井達は夏美の部屋から去り・・・。

夏美は自分自身の部屋で1人再びタバコを吸い続けていた。

そう・・・。

それは・・・。

高杉からの連絡の約束の約2週間後だった。

夏美「・・・はア。」と軽くため息を付きながら携帯を見て・・・。

この日がとうとう来ちゃったんだ。

もう・・・。

炎龍には戻らないと決めたのに・・・。

ワカバとして生きる事を選んだのに・・・。

どうして・・・。

時ってある意味・・・。

ザンコクナノ？

ドウシテソツトシテクレナイノ??

ドウシテホツトイテクレナイノ??

マタ・・・チマミレノヤミノシマツヤニモドラナイトイケナイノ??

すると連絡しようにも連絡できない自分がいた。

「・・・・・・・・。。。」

と黙っていた。

すると携帯が鳴った。

「!!!!!!」

良く見ると高杉からだった。

夏美「・・・連絡してこないから多分しびれ切らしたんだろうね。」

と呟いた。

携帯の通話ボタン押す？

それとも・・・押さない？

いや・・・押したくない？

そのボタンを押すとまるで・・・。

‘今の私が崩れてしまいそうで’

‘怖いからだ’。

だったら・・・。

何で炎龍になったんだろう？

あア・
・
・
・
・
・
。

そうだ・
・
・
・
。

‘ 彼が消えてしまった（亡くなった）後，からだ。

私は
・
・
・
。

ただ
・
・
・
。

‘ 甘えていたんだ
,
。

‘ 彼のぬくもりを
・
・
・
,
。

忘れたくなかつた、
・
・
・
・
○

だからだ
・
・
・
・
・
・
○

だが、それはある意味・・・。

‘残酷’だった。

それでも尚……。携帯の着信音は鳴り続けていた。

第61章。高杉からの連絡の約二週間後……。(前編) 完。

第61章。高杉からの連絡の約二週間後・・・（前編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

次章は今章の続きを書かせて頂く予定です。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「・・・次章もどうぞ宜しくお願いします。」

第62章。高杉からの連絡の約二週間後・・。(後編)(前書き)

此方は大分遅くなりましての更新となりました。

申し訳ございません。前章の続きです。此方も長丁場となる予定です。

第62章。高杉からの連絡の約二週間後……。 (後編)

夏美はタバコを吸い続けながら携帯の着信音が消える事を密かに願いながら携帯を見続けていた。

夏美軽くタメ息をつきながらタバコを吸い「・・・お願いだから闇側（そちら側）、に引き戻さないで！」と言った。

だが、現実はどうも行かずに携帯の着信音は鳴り続けている。其れはまるで、早く出ろ、と催促されているように。

すると夏美は意を消したのかようやく通話ボタンを押し「・・・もしもし。」

すると電話越しでクククと笑い声が聞こえ『よォー。夏美ィ。』

夏美「・・・高杉の兄貴。」

高杉『ようやく出たじゃねエかア。どうしたんだア？』

夏美再度タバコを口に加え直しながら「ごめんなさい。少々考え事をしていたものですから。」

高杉ククク『・・・考え事ねエ，まさか、まだ、迷っているのかア，？』

夏美はそれを聞いて驚き黙り込んでいた。

第62章。高杉からの連絡の約二週間後・・・（後編）完。

第62章。高杉からの連絡の約二週間後・・・（後編）（後書き）

久々のコナンの更新となりました。

今章もお付き合ってくださいまして有難うございます。

さて、次章も今章の続きを書かせて頂く予定です。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

高杉ククク「次章もどうぞよろしく頼むぜエ？」

第63章。夏美と高杉の会話再び。(前書き)

大分此方は無沙汰しておりました。(汗)

今章は、高杉さんと夏美の会話みたいなものです。

尚、コナン連載にしましてはネタ浮かび次第になりますので・

更新速度がかなり遅くなる恐れがございます。その辺もご理解とご了承の程宜しくお願い致します。其れでは、本編へどうぞ。

第63章。夏美と高杉の会話再び。

夏美はアレからずっと高杉と携帯で話していた。

高杉電話越しでクククと笑い『夏美よオ。‘アレから答え決まったかア’？』

夏美は其れを聞いて只黙りこんでいた。

‘この男は^{ひと}どうして私を解放してくれないんだろう？’

‘どうして。どうして……………。’

そっとしておいてくれないの？

そして、ようやく夏美口を開き「・・・お願いですから、高杉の兄貴。もう、私の事はほっておいて下さいよ。」と続け様に「・・・私は、両親が遺してくれたこの場所を、護りたいんです。」

だから・・・・・・・・・・。

だから・・・・・・・・・・。

もう、そっとしておいてください。

高杉其れを聞いて再びクククと笑い『そうかよ。だがなア。夏美よオ。‘一度闇に堕ちたもんはどうあがいても表で生きる事何ぞア出来ねェんだよオ’。この選択が、後先後悔する事になるぜエ’。』

と続け様に『じゃア、また連絡するぜ?』と電話を切った。

夏美タバコを吸いながら苦笑いをし「・・・後先後悔する、ってか。私しやアは・・・別に好きで闇に堕ちたわけじゃアないんだけどね。」とタバコを吸い続けていた。

するとノック音がした。

夏美「どうぞ。」と催促する。

するとコナンが再び赤井を連れて入ってきた。

夏美苦笑いをし「またお宅らかい。」

コナン「あア。悪かったな。俺等でよ。」

夏美「・・・いや。別に。悪いと思っていないさ。」

コナンソファに座り「そうかよ。」

赤井も其れに続いて座って「・・・今の、また高杉、からだろ？」

夏美其れを聞いて只黙っていた。

第63章。夏美と高杉の会話再び。完。

第63章。夏美と高杉の会話再び。（後書き）

今章も御付き合いますして有難うございます。

大変遅めですが、今章からアニメ予告風を入れてみようと思います。

其れではどうぞ。

夏美は赤井のその一言に黙り込んでいた。

盗聴されていたか、

赤井タバコに火を灯し「・・・お前、高杉とどんな関係だ？」

夏美「……忘れたよ、んな昔の事を。」

すると背後からクククと笑い声がし「ひでエなァ。オイ。俺の妹分よォ。」

夏美を初めコナン達が驚いていた。

夏美「第64章。夏美と高杉の関係を問い詰める赤井？そして・・・高杉登場？」

「次章もどうぞ宜しく。」

以上です。次章も今章同様お楽しみ頂ければ幸いです。

第64章。夏美と高杉の関係を問い詰める赤井？そして・・・高杉登場？（前書

大分ご無沙汰しておりました（汗）

今回は、多分高杉さん出演予定です。

長丁場ありのそして・・・もしかしたら編集可能性あります。

この小説も・・・もうそろそろ完結を目指して頑張ろうと思います。

ドン更新ですが・・・（汗）

第64章。夏美と高杉の関係を問い詰める赤井？そして・・・高杉登場？

夏美は赤井のその一言に黙り込んでいた。

‘盗聴されていたか’。

赤井タバコに火を灯し「・・・お前、高杉とどんな関係、だ？」

夏美「・・・・・・・・・・忘れたよ。んな昔の事を・・・」

すると背後からクククと笑い声がし「ひでエなア。オイ。俺の妹分よ、’。」

夏美を初めコナン達が驚いていた。

夏美「・・・んな!?!? まっ、まさか!?!?!?」

そう叫びながら恐る恐る後ろを見た其処にはニヤリと笑いながらタバコを吸ってドアの所に身を寄せていた高杉が居た。

夏美思わぬ高杉の登場でかなり驚いていた。

夏美「な、何で!?!?!? 此処が分かったんです!?!? 高杉の兄貴。」

高杉クククと笑いながら「俺の部下に事前に調べさせてもらった。まァ・・・結果はどうであれ近いうちにお前ェに会いに行こうと思っていたからなァ。」

コナンは警戒している。もちろん赤井自身も。

そしてコナン

・・・こいつが鬼兵会の高杉晋助か。ジンと同じくれエ人相悪イぜ。

すると高杉がコナンに気づきニヤリと笑い「んな警戒すんなよオ。俺ァ別に‘殺し（やり）あいに来たんじゃねエからよオ。江戸川コナン・・・いや、‘こう言った方が正しいのかも知れねエなァ、’」

「‘高校生探偵工藤新一さんよオ、’。」

コナン其れを聞いて内面驚きながらも冷静さを取り戻し「な、何言ってんの？お兄さん。僕只の子供だよ。子供。」

すると高杉再びニヤリと笑い懷からファイルを取りだしコナンの所にドサツと置いた。

コナンそのファイルを覗くと「んな!？」

其処にはコナンと新一の二つの写真があった。

其処にはトロピカルランドでジンに毒薬を飲まされる所まで隠し撮られていた。

夏美も其れを見て驚いた。

そして高杉ニヤリと笑い「俺ア別にこいつをジン（奴）に渡したって良いんだぜエ？お前さんの、大事なもんが、消えるだけだろうか
らなア。」

コナン険しい顔で高杉を睨みつけながら「・・・この外道が、！！」

高杉「外道で結構。」と続け様に笑いながら「俺アにとっちゃア
最高のほめ言葉だぜ、」。

すると赤井「・・・ボウヤ。」

コナン「ごめん。赤井さん。だますつもりなかったんだ。只・・・
、あいつを護る為にこうするしかなかった。、俺が高校生探偵工藤

新一ですよ。」

あいつは蘭の事だった。

夏美はタバコに火を灯し写真を撮って燃やした。

と同時に「悪いですね。高杉の兄貴。こいつを失う訳にはいかな
いんでね。」と言った。

高杉は其れを見てクククと笑い「ずいぶんおもしろエ事、してく
れるじゃねエか。夏美よオ。」

夏美はただタバコを吸い続けていた。

其れも窓を見ながら・・・。

そして夏美は「只、私しやアは、この小さな相棒、を死なせたくねえんですよ。」

― 大事な人といつか再会させたいですからね―

夏美タバコを吸いながら顔しかめて「・・・其れに、私しやアと、同じ想い、もさせたくないのさ。」

そしてコナンを見て「・・・お前さんはさっさと退いた方が良い。こ

の場にいる事は危険だ。」

コナン「・・・あア。そうさせてもらうぜ。でも、夏美お前はどうするんだ？」

夏美フツと笑い、「蹴りつけてくるわ。、今度こそ、過去の蹴りをね。、」

其れを聞いてコナン「・・・まさか。お前。」

夏美「・・・お前さんが考えているタイそれた事するつもりはないさ。」

すると赤井の携帯が鳴って「俺だ。」そして数分話しこんで「了解。」

そう言い携帯を切りコナンを見て「・・・ボウヤ。‘仕事’だ。」

コナン頷き「了解。赤井さん。」そう言い夏美に軽く挨拶をし高杉をチラと見て赤井と共に出て行った。

第64章。夏美と高杉の関係を問い詰める赤井？そして・・・高杉登場？完。

第64章。夏美と高杉の関係を問い詰める赤井？そして・・・高杉登場？（後

大分遅くなってすみません。汗。

無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回？？のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから赤井達は夏美の所から去って行った。

と同時に高杉は夏美の所により「なァ・・・あの時の返事は、変わね
エ、のか
ァ？」

夏美タバコ吸いながら「・・・言ったでしょ？私の答えは変わらな
いと、

私は己の宿命^{サダメ}を背負い続けるだけですよ。」と同時に高杉の横を

通り「其れと、‘広州の連中壊滅は我々のワカバの仕事’ですから、
‘出来るだけ手出し無用’でお願いしますよ。高杉の兄貴。」そう
言い「では、ちょっと出かけてきますんで適当にゆっくりしてから
帰って下さい。」と

部屋を出て行った。

高杉クククと笑い「・・・、そう言われちまうと手エ出したくなっちまうんだなア。俺アも、暴れるかア。」

と楽しそうに呟いた。

そして、ワカバと広州・・・夏美と己の過去の鎖を断ち切る戦いが黒の組織、そしてFBIを巻き込み水面下だが近づいていた。

夏美「第65章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。（前編）」「次章もどうぞ宜しく。」

以上です。其れではまた時間かかると思いますが次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第65章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。（前編

今章は、前章と似た様な話です。（コラボ要素あります。）

多分長丁場の編集可能性あります。（後半から土方さんと沖田さんと山崎さんが出てくる予定です。尚、ここでの土方さん達はやくざ（マフィア）設定ですのでその辺もご理解と御了承の程を・・・。）

御了承を。

第65章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。

（前編）

アレから赤井達は夏美の所から去って行った。

と同時に高杉は夏美の所により「なァ・あの時の返事は、変わねエ、のか
ァ？」

夏美タバコ吸いながら「・・・言ったでしょ？私の答えは変わらな
いと、

私は己の宿命^{サダメ}を背負い続けるだけですよ。」と同時に高杉の横を通
りながら

「其れと、‘広州の連中壊滅は我々のワカバの仕事’ですから、
出来るだけ手出し無用’でお願いしますよ。高杉の兄貴。」そう言
い「では、ちょっと出かけてきますんで適当にゆっくりしてから帰
って下さい。」と部屋を出て行った。

高杉クククと笑い「・・・’そう言われちまうと手エ出したくなっ
ちまうんだなァ。’俺ァも、暴れるかァ。’」と楽しそうに呟いた。

と同時に心の中で。其れに、俺ァがそう簡単にあきらめ切れるとで
も思っているのか？ワカバを止めろ

とは言わねエよ。だがな、お前エは元々此方側（闇）何だからよオ

其れを忘れちまったら困るぜエ？

夏美。と呟いた。

そして、ワカバと広州・・・夏美と己の過去の鎖を断ち切る戦いが
黒の組織、そしてFBI^{ビュウロウ}を巻き込み水面下だが近づいていた。

一方、夏美は愛車に乗り米花町の国道を走っていた。

と同時に心の中で再び願っていた。

お願いだからさ。お願いだからさ。もう・・・2度と闇に引き戻さないでよ。

私しやアは元々は（表の人間）何だからさア。

そしてタバコに火を灯しながら前を再び見て気が付いたら信号が赤になっていた。

すると携帯が鳴った。

「はい！橘。」

すると『ヤッホー。夏美久々ね。元気？』

夏美は驚いて「お！その声は雪か？」

雪美だった。

雪美『えエ。私よ。』

夏美タバコ吸いながら「で？どうしたよ？お前さんから連絡入れてくれる何ぞア珍しいじゃないか。」

雪美『そう言われればそうかもね。』と苦笑いをしつつそして『唐突で悪いんだけど、今平気？』

夏美頷き「あア。平気さ。で？何処で会う？」

雪美『有難う。私が居るホテルの喫茶店で。』

夏美再び頷き「了解！じゃ、また後で。」

そう言い携帯を切った。

と同時に「ん？」

少し離れた国道の端のポールに1台の黒紫のベンツが止まっていた。

夏美タバコを吸いながら「黒紫のベンツ。234Cか。」

ありゃア、間違いねえな。‘兄貴’のだな。でも、今‘会うと’何故かヤバい気がするから・・・さっさと行くか。そう心の中で呟きながら愛車を再び走らせた。

すると後から黒のスーツと金色のネクタイ等に身を包んだ黒短髪の男が黒のスーツと白TEEシャツ等を着た地味な男とそして栗色の短髪をした黒青のスーツ等に身を包んだ男が黒紫のベントツに歩いていき。

偶然にもその黒短髪の男が夏美の愛車に気がつきニヤと笑い「・・・青のベントツか。さては、‘あいつ’（夏美）だな。」と楽しそうに小声で呟いた。

そして地味な男に「・・・オイ。山崎。」

山崎と呼ばれた男は「はいよ。土方さん。」

土方と呼ばれた男はタバコに火を灯しながらニヤリと笑い「夏美の今の場所を探り入れろ。」

山崎ニヤリと笑い「はいよ!!」

と同時に「土方さん。」

土方「何だ？総悟？」

総悟と呼ばれた男は「で？俺アどうすればいいんですかい？」

土方タバコを吸いながら「・・・そうだな。此れは、まだ、未確認情報、なんだがよ。広州の連中共が

俺等真選会を探っている見てェなんだ。本来ならワカバなんだが・・・俺等にも俺等の、メンツ、つうもんがあんのよ。其れをつぶされた

くねえんでなア。念の為お前エはそこ探りだ。そして分かったら俺と近藤さんに知らせろ。」

総悟頷き「了解でさア。」

そして土方「さア・・そろそろ行くぞ。山崎。お前エが今日運転しろ。」

山崎頷き「はいよ!」そう言い運転席に乗り込んで土方は助手席に乗り総悟は後部座席に乗り込んでその場を後にした。

その様子を何とその場にたまたまいた雷外が見ていた。

そして冷や汗をかきつつ「オイオイ。ありやア土方の旦那達じゃねエか。米花町にいる何ざア聞いてねエよ? 多分旦那達のこったぜつてエ姉御に探り入れられるよ。って、こうしてる場合じゃねエ!!」いそいで・・うちんここに知らせねエと!!」そう呟き慌ててその

場を後にした。

第65章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の
願い。（前編）完。

第65章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。

（前編

今章も御付き合います。ありがとうございます。

一発この話は完了したみたいです。。嬉しいです。

でも、気まぐれでちょこっと編集したりする可能性もあります。その辺もご理解と御了承をお願いしたいと思います。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をどうぞ・・・（笑；；）

此処は米花町にある某ホテルの喫茶店。

夏美は雪美とお茶を飲みながら話していた。

夏美「・・・何？広州の連中共が？」

雪美頷き「えエ・・・密かに動き始めているみたいよ。其れにあの女の事だからドッかで派手にドンパチするつもりでもいるらしいわ。」

夏美再びタバコに火を灯しながら「・・・そうかい。」

あの女がねエ。めんどくさい事をしてくれる。

と同時に雪美は「でね？夏美・・・実はね、真選会にも探りを入れていると言う噂なの。」

其れを聞いた夏美は思わず固まってしまって・・・。

し、真選会つうたらあ、兄貴じゃん！！！！

此れがもし本当ならヤバイよ！！！！

果たしてその真意とは？

夏美「第66章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。（後編）」「次章もどうぞ宜しく！！」以上です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第66章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。（後編

今章は、前章の後編です。

長丁場等の予定です。

因みにまた後半から土方さんや高杉さん達が出てくる予定です。

尚、土方さんの愛車である黒紫のベンツの車体番号等は此方で適当にやらせて頂きました。（何分、作者は車の知識がない故・・・その辺は御了承下さい汗）

第66章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。

（後編）

此処は米花町にある某ホテルの喫茶店。

夏美は雪美とお茶を飲みながら話していた。

夏美「・・・何？広州の連中共が？」

雪美頷き「えエ・・・密かに動き始めているみたいよ。其れにあの女の事だからドッかで派手にドンパチするつもりでもいるらしいわ。」

797

夏美再びタバコに火を灯しながら「・・・そうかい。」

あの女がねエ。めんどくさい事をしてくれる。

と同時に雪美は「でね？夏美・・・実はね、真選会にも探りを入れていると言う噂なの。」

其れを聞いた夏美は思わず固まってしまっで・・・。

し、真選会つうたらあ、兄貴じゃん!!!

此れがもし本当ならヤバイよ!!!

すると、雪美は心配そうに「・・・夏美？大丈夫？？」

夏美頷きながら「あア・・・大丈夫さ。悪いね。」と笑った。

と同時に「この噂・・・ワカバ（うち）ん所でも探り入れて良いかな
？？」

雪美頷き「えエ。もちろん。構わないわ。だって、その為に貴女に
わざわざ来てもらったんだもの。」

そう言いコーヒーを飲んだ。

夏美吸っていたタバコを灰皿にもみ消し懷からタバコをもう一本取り出し火を灯しながらフツと笑い

「・・・そうかい。じゃ、情報部にでも（ライフエイ）探り入れてもらおうかね。」そう言い携帯を取り出しライフエイに連絡をした。

夏美「あ、ライフエイかい？私しゃアだよ。お疲れさん。」そして要件を言い「じゃ、そう言う事で宜しくね！」と電話を切って「じゃ・・・雪。そろそろ私しゃアも戻るよ。」

雪美其れを聞いて頷き「えエ。有難う。わざわざ。」

夏美ニヤと笑い「良いつてことさ！また、何かあったら何時でも呼んでくれ！」そう言い雪美に軽く手を振り愛車の止めてある駐車場に向かった。

すると、夏美は一瞬誰かの気配を感じた。

そして軽くため息をつきながら「・・・いるんだろう？　崎さん、？」

夏美の掛け声と同時に山崎が後ろから苦笑いをして「いやはや・・・。流石姉さんですね。ばれましたか。」

夏美タバコ吸いながら「・・・この妙な勘繰りは正直昔からだからね。中々抜けんのさ。」と続け様に「どうせ・・・土方の兄貴に私しやアを探る様に言われたんだろう??」と愛車にもたれ込んで山崎を見て言った。

山崎一瞬驚きながらも「・・・やっぱ姉さんにはかないませんね。」とフツと笑って言った。

夏美は山崎を見て「・・・で? 私しやアに何の用だい?? 真選会の偵察が主な担当の崎さんが。」といい

タバコを吸い始めて言った。

山崎は再度フツと笑い「では、単刀直入に言います。土方さんが姉さんにお会いしたいと言う事で連れてくる様にと。」

夏美タバコを口に加え直して「・・・兄貴がか。」と呟いた。

ひよっとしたらワカバをやめて傘下に下れとでも言うつもりなんだろうがね。

でも私しやアはワカバをやめるつもりなど毛頭ねえんだが。

と心の中で呟いた。

第66章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。（後編）完。

第66章。動き始める広州？そして夏美の想い。そしてワカバ達の願い。

（後編）

お久しぶりです。大分ご無沙汰で申し訳ありません此方は・・・

無事に更新完了致しました。

其れではグタグタ予告風をどうぞ笑；

夏美タバコを吸いながら「・・・どうせ真選会に下れと言う話だろ??」

山崎クスと笑いながら「嫌だなァ。姉さん・・・そんなことないですって。

只、兄妹分として姉さんと会いたいだけですって。」

夏美は只タバコをくわえたまま無言のまま山崎を見ていた。

そして山崎は再度フツと笑いながら「・・・本当に何もありませんって、姉さん。」

夏美はそれを聞いてタバコを吸いながらも「・・・崎さん、知ってるかい？

‘笑顔でいるほど何か裏がある’ってね。」と続け様に「今の私しやァは、基本的にワカバや表の連中しか信用できないのね。’」「

そう言い

愛車に乗り込もうとした次の瞬間後ろからカチリと銃の安全装置セーフティが外されていた。

そして女の声で「・・・ならこうもしないとね？」十四郎様がお待ちかねなの！一緒に強引でも来てもらおうわよ！？橘夏美！！」

山崎はそれを聞いてあちゃあ〜と頭を抱えそして山崎に「・・・あんなにぬるすぎるのさ！」こうもしないとね！！」すると夏美も「・・・早まんなって」。お姉さん。」と後ろから拳銃を突きつけた。

するとその女は驚きつつも「・・・！！いつの間に！？！？どうして！？？」

夏美フツと笑い「悪いね・・・こいつは昔からの妙な勘繰り何だ。」
「そう言いながらその女のあごをけり上げた。

女はその場で崩れ落ちた。

山崎は慌てて「・・・花音さん大丈夫ですか？」

花音と呼ばれた女は「え・・・ええ。」と呟きそして夏美は愛車に乗り込んで「・・・崎さん、土方の兄貴に伝えときな！！私しやアは悪いけど下るつもりはない！、ってね！」そう言い愛車のドアを閉めて急いでその場を後にした。

山崎「第65章。夏美と山崎の久々の再会。そして・・・。」

「次章もどうぞ宜しくお願いします。」

以上です。有難うございます。

第67章。夏美と山崎の久々の再会。そして・・・（前書き）

此方はだいぶお待たせを致しました汗。

有難うございます。年明け一発です此方が笑；

そしてまた長丁場の残酷シーン（少々）等あり予定です。予めまた御了承下さい。後またオリキャラが出ます（笑；）女です。

第67章。夏美と山崎の久々の再会。そして・・・

夏美タバコを吸いながら「・・・どうせ真選会に下れと言う話だろ??」

山崎クスと笑いながら「嫌だなァ。姉さん・・・そんなことないですって。」

只、兄妹分として姉さんと会いたいだけですって。」

夏美は只タバコをくわえたまま無言のまま山崎を見ていた。

そして山崎は再度フツと笑いながら「・・・本当に何もありやしませんって、姉さん。」

夏美はそれを聞いてタバコを吸いながらも「・・・崎さん、知ってるかい？」

‘笑顔でいるほど何か裏がある’ってね。」と続け様に「今の私しやァは、基本的にワカバや表の連中しか信用できないのでね。’,」
そう言い

愛車に乗り込もうとした次の瞬間後ろからカチリと銃の安全装置セーフティが外されていた。

そして女の声で「・・・ならこうもしいとね?’, 十四郎様がお待ちかねなの!一緒に強引でも来てもらおうわよ!?!橘夏美!」

山崎はそれを聞いてあちゃあ〜と頭を抱えそして山崎に「・・・あんだ、ぬるすぎるのさ！」こうもしないとね！！」すると夏美も「・・・早まんなって」。お姉さん。」と後ろから拳銃を突きつけた。

するとその女は驚きつつも「・・・！！いつの間に！？どうして！？」

夏美フツと笑い「悪いね・・・こいつは昔からの妙な勘繰り何だ。」
「そう言いながらその女のあごをけり上げた。

女はその場で崩れ落ちた。

山崎は慌てて「・・・花音さん大丈夫ですか？」

花音と呼ばれた女は「え・・・ええ。」と呟きそして夏美は愛車に乗り込んで「・・・崎さん、土方の兄貴に伝えときな！！私しゃアは悪いけど下るつもりはない！」ってね！」そう言い愛車のドアを閉めて急いでその場を後にした。

山崎はそれを見て苦笑いし「・・・姉さんも変わられたな。まア・・・時がたてば其れもそれで仕方がないか。」
「そう言い花音と一緒に車に乗り込んでその場から後にした。

一方、夏美は相も変わらずタバコに火を灯しタバコを吸い続けていた。

そして信号待ちに当たって軽く舌打ちし「・・・信号待ちかよ、」と呟いた。

[illegible]

無言のまま車内が支配されタバコの煙も車内に舞っていた。

そして信号が赤から青へと変わって行き夏美は確認した後に再度愛車を動かし始めた。

と同時に黒いバイクが夏美の愛車を追って行った。

夏美はミラーで確認し「・・・黒いバイクに黒の竜の刺青。あの人が？」そう呟きバイクを振り払おうとした。

夏美はそれを確認するとある路地裏へと愛車を進めて止めた。

其れと同時に黒いバイクも夏美の愛車を追って路地裏に向かった。

そして夏美は愛車からひとまず下りて軽くため息つき「・・・一体何用です？じゅんか准華姉さん？」

すると黒髪の長い女が黒バイクから降りてきてヘルメットを外し夏美の所にやって来てクスツと笑い「久しいわね。夏美。」と言った。

かがわじゅんか香川准華夏美の姉貴分の1人であり、‘女強盗black cat’
と世間では呼ばれているらしい？

夏美軽くため息をつき苦笑いし「何しに来たんです？姉さん？世間

様には一応‘black cat’、として認識していて一応、警察にも目え付けられているのに、・・・。」

准華はクスと笑いながら「・・・、たまたま可愛い妹分を見て久々に話しようと思ったただけよ？、そんな野暮なことしないわ。」と言った。

そして准華は夏美を見て「・・・、気をつけて？、あの男再度貴方に会いに来るかもしれないわ？、」

夏美はそれを聞いて驚きつつタバコを再度口に加え直して「・・・、了解しました。、」そう言い再度愛車に乗り込み「・・・、くれぐれも無理しないで下さいよ？、姉さん。」

と言いつつその場を後にした。

准華クスと笑い「貴女もね？、夏美。」そう言い黒のヘルメットをかぶりバイクに乗り込みその場を後にした。

その様子を一台の黒の車が止まってみて「・・・、black cat、と、あいつが姉妹分、だったなんてな。」と1人の男が呟いていた。

楽しくなりそうだ。

その男は何と真選会の土方だった。

土方はそれを確認すると携帯を取り出し「・・・山崎か。‘あいつ（夏美）をまた追え。んでもって今度こそ連れて来い。頼んだぜ？’」と山崎に連絡を入れた。

そして車を発進させた。

その様子をたまたま通りかかったジンが見ていてニヤリと笑い「・・・真選会の土方か。」と呟いて「あいつに会いに行くつもりか？其れは‘無意味だぜ’何せ・・・俺が先に行くからよオ。」

なァ・・・？夏美？

第67章。夏美と山崎の久々の再会。そして・・・完。

第67章。夏美と山崎の久々の再会。そして・・・（後書き）

今章も無事に更新完了致しました。

有難うございます有難うございます。そして遅くなりましてすみません汗

其れではほぼ毎回のグタグタ予告？風をどうぞ。

夏美はアレからワカバに戻り自分の部屋に戻ってシャワーを浴びベツトで

休んでいた。

すると・・・夏美自身も、夢を見た、とても嫌な夢を、。

珍しく夏美はワカバの仕事が遅くなり夜道を歩いていた。

其れも歩きで耳にはイヤホンをしていた。

アイポットで音楽を聞いていたのだ。

周りにはカラス・・・。歩道には通勤や通学でそれぞれのうちに帰宅する人々がいた。

すると其処の路上に一台の黒のポルシェが止まっていた。

そして反対路上にはもう一台の黒の車が止まっていた。

すると黒ポルシェの運転手がずっと夏美を見ていた。

ジンだ。

ジンミラーを指で少々動かしながら夏美に合わせ

「平和ボケもそろそろ終わりだ。――

「さア、長い夢から覚めて再会を祝おうじゃないか?」――

「俺達のふさわしい再会場所（闇の中で）で、――

そして運転席のドアが開きジンニヤリと笑いながら「・・・なア? 夏美?」

其れと同時に夏美振り向き両目を振り向き「んな!」?

そして息切れしながら目が覚める。

すると顔に冷や汗をかきながら拭い時計を見て「・・・まだ夜中の4時か。」と呟いていた。

だが、アレからすぐに寝ようと思ったが寝つけずにリビングに行き

コップに水を入れそしてソファ―に座りタバコに火を灯し吸い始めた。

そして苦笑いして「・・・嫌な夢だったな。本当で。」と呟いた。

其れが現実になるとも知らずに。再度・・・。

夏美「第68章。夏美闇の夢に襲われる。」「次章もどうぞ宜しくな？」

以上です。有難うございます。

第68章。夏美闇の夢に襲われる。（前書き）

有難うございます。

ついに68章まで来させていただきました。

今章はですね主に夏美が中心となります。

多分長丁場になる恐れも今章もございます。

其れではお楽しみください。

第68章。夏美闇の夢に襲われる。

夏美はアレからワカバに戻り自分の部屋に戻ってシャワーを浴びベツトで

休んでいた。

すると・・・夏美自身も、夢を見た、とても嫌な夢を、。

珍しく夏美はワカバの仕事が遅くなり夜道を歩いていた。

其れも歩きで耳にはイヤホンをしていた。

アイポットで音楽を聞いていたのだ。

周りにはカラス……。歩道には通勤や通学でそれぞれのうちに帰宅する人々がいた。

すると其処の路上に一台の黒のポルシェが止まっていた。

そして反対路上にはもう一台の黒の車が止まっていた。

すると黒ポルシェの運転手がずっと夏美を見ていた。

ジンだ。

ジンミラーを指で少々動かしながら夏美に合わせ

「平和ボケもそろそろ終わりだ。――

「さア、長い夢から覚めて再会を祝おうじゃないか?」――

「俺達のふさわしい再会場所（闇の中で）で、――

そして運転席のドアが開きジンニヤリと笑いながら「・・・なア? 夏美?」

其れと同時に夏美振り向き両目を振り向き「んな!?!」

そして息切れしながら目が覚める。

すると顔に冷や汗をかきながら拭い時計を見て「・・・まだ夜中の4時か。」と呟いていた。

だが、アレからすぐに寝ようと思ったが寝つけずにリビングに行きコップに水を入れそしてソファアに座りタバコに火を灯し吸い始めた。

そして苦笑いして「・・・嫌な夢だったな。」^{マジ}「本当で。」と呟いた。

其れが現実になるとも知らずに。再度「今の所誰も知る由もなかった。」

そして・・・。

「夏美。一とジンの声がまるでこだまするなの様に・・・。

夏美は冷や汗をかきつつタバコを相もからず口に加え直し吸い続けていた。

そして・・・何時の間にか体が、がくがくと震えていた。

と同時に苦笑いしつつも「・・・一度闇に入ったものはなかなか抜けねえってか？」と言った。

「夏美」

夏美両手で頭を抱えて「・・・止めてくれ!!」

「夏美」

「・・・頼むから。止めてくれ!!!!!!!!!!」
「頼むッ!!!!!!!!!!」

そして・・・・・・・・・・・・・・・・。

「もう呼ばないでくれ。お願いだから・・・・。ジン。」

と同時にタバコがいつの間にか短くなっているのを確認しタバコを
灰皿にもみ消した。

そして、ソファーにごろんと夏美はねっ転がって・・・。

「・・・どうして?」
「そっとおいてくれないんです?」
「ジン。」

もう良いじゃないですか・・・・・・・・。と心の中で再度呟いていた。

此れが、‘現実になる可能性もあるかもしれない……’、って事
夏美自身もそして相棒達も知る由もなかった。

一方、此処はワカバのアジトから少々離れたビル。

其処の所にジンの愛車である黒のポルシェ356Aが止まっていた。

そして運転席の窓があき煙が外を舞う。

と同時にジンがアジトを見てニヤリと笑い「……見つけたぜ？夏
美。」と楽しそうに呟いていた。

第68章。夏美闇の夢に襲われる。完。

第68章。夏美闇の夢に襲われる。（後書き）

有難うございます。

大分遅くなりましたが無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告風をどうぞ笑アレからの夏美はずっと部屋の中にいた。

と同時に雷外からジンの愛車がこの近辺に止まっている情報をつかんだ。

夏美はそれを聞いて「・・・本気^{マジ}かよ。」と呟いてそして雷外にひとまずドツか身を隠した方が良いと言われオウガに報告してくると言い部屋を後にした。

夏美も急いで逃亡準備をしようとした・・・次の瞬間。

クククと低い男の声がして「・・・何処へ行く気だ？」夏美。」

夏美はその声を聞くと驚きながらその声の主の方へ恐る恐る振り向いた。

そして「ジ、ジン！？」

其処にはタバコを口に加えたジンがいた。

ジン夏美を見てニヤリと笑い「会いたかったぜ。夏美。」

夏美はそれを見て只只その場で固まっていた。

夏美「第69章。闇の夢の現実？」

「次章もどうぞ宜しくね？」

以上です。有難うございます。

第69章。闇の夢の現実？（前書き）

有難うございます。

此方でも無沙汰になりましたが汗。

今章は前章の続きみたいなものです。

此方も編集可能性等あり予定ですのでご了承を。

第69章。闇の夢の現実？

アレからの夏美はずっと部屋の中にいた。

と同時に雷外からジンの愛車がこの近辺に止まっている情報をつかんだ。

夏美はそれを聞いて「・・・本気^{マジ}かよ。」と呟いてそして雷外にひとまずドツか身を隠した方が良いと言われオウガに報告してくる
と言い部屋を後にした。

夏美も急いで逃亡準備をしようとした・・・次の瞬間。

クククと低い男の声がして「・・・何処へ行く気だ？」夏美。」

夏美はその声を聞くと驚きながらその声の主の方へ恐る恐る振り向いた。

そして「ジ、ジン!？」

其処にはタバコを口に加えたジンがいた。

ジン夏美を見てニヤリと笑い「会いたかったぜ。夏美。」

夏美はそれを見て只只その場で固まっていた。

そして心の中では……。

あア・・現実になってしまった。

どうしてこうも闇は私を拘束するのだろうか？

ヤバいな・・冷静でいられねえわ。

動けよ・・頼むから動いてくれ私しゃアの体。頼むよ・・。

あまりの恐怖にかなり動けなかった。

・・頼むから動いてくれよ!!!!!!!!!!!!!!

もう嫌なんだ!!!!!!!!!!此れ以上拘束されるのは!!!!!!!!!!!!!!

チイクシヨウ!!!!!!!!動いてくれよ!!!!!!!!!!!!!!頼むから・・・。

其れとは裏腹にジンが夏美の所にとっても楽しそうに近づいて来ていた。

夏美はそれを見て思わず懷から小刀を取り出そうとした。

だが、ジンはそれを見て夏美の腕をひねり小刀を取り出すことを阻止した。

其れと同時に夏美自身の顔が引きつった。

そして耳元で「なアもう戻っちまえよ。こっち側によ。」と楽しそうに囁いた。

夏美自身はそれを聞いて軽く舌打ちし一か八かジンに向かって蹴りあげた。

ジンはそれを察知したのかニヤリと笑い「・・・往生際が悪いぜ？まったくよ・・・」そう言いながら夏美自身をけり上げた。

夏美のみぞおちに見事当てはまり夏美は壁際に向かってぶっ飛んで行った。

と同時に一斉に足音がなり夏美の部屋の中に人々が一斉に入ってきて「FBIと国際警察だ!! ジン大人しく投降しろ!!!」と赤井と並河がそれぞれの部下を引連れて夏美の部屋に来ていた。

ジンはそれを見てフンと笑っていた。

夏美自身体を起こしつつも赤井達の所に向かおうとした。

だが、ジンは夏美の腕をつかんで自身の腕の中に放り込んだ。

そして耳元で「・・・またお前は俺を一人にするのか?」と寂しげな声で呟いた。

夏美はそれを聞いて顔しかめた。

と同時にワカバのアジトの緊急警報が鳴り・・・気が付くと広州そして真選会そして高杉達が一斉に攻めてきた。

夏美は急いでジンの腕の中から出て「・・・ごめんなさい。」「今の私は・・・。貴方の側にはいられない。」「と切なさそうに言っ
てそしてワカバの団員1人を捕まえ状況を聞いて赤井達に「此処頼みます!」そう言い部屋から立ち去って行った・・・。

と同時に赤井達はジンに向かって「・・・投降してもらおうか?」
ともう一度言った。

そして雪美も来て「・・・お願いジン。そろそろもう終わりに・・・。
」

ジンはそれを聞いてタバコに火を灯しフンと鼻で笑い「・・・ラム。
俺は此処で捕まる訳にもいかねェでな。」「と同時にコナンと水
野渚が入って来てジンを睨んだ。

ジンコナン達を見てフツと笑い「・・・高校生探偵組か。」と
呟いた。

第69章。闇の夢の現実？完。

第69章。闇の夢の現実？（後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

そろそろ・・此方の小説も最終章へと突入させて頂きたいと思えます。

何か・・多分腑に落ちない終わり方になる可能性もございます。その辺は予めご了承ください。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ笑；

夏美はアレから自身の部屋から出て広州達が攻め込んでいたと思われる

ロビーへと向かった。

と同時にワカバのメンツは夏美の姿を確認すると「姉さん！」「リーダー！」と喜びを叫んだ。

夏美は翡翠刀を握り締めてメンバーの前に出る。

其処には広州そして真選会そして高杉達の姿があった。

と同時に土方が夏美の姿を確認しニヤリと笑い「よオ！久しいじゃねェか？

夏美。‘我が妹分よ。’ ‘こんな所に居やがったか。’ 「

夏美土方を見てタバコに火を灯し「・・・土方の兄貴。」と呟いた。

そして広州側にはメイランもいた。

夏美はメイランの気配を感じたのか・・・チラってみて睨みつけそして土方に視線をやった。

そして「・・・広州と手組んだのかい？真選会は・・・こんな奴らと。」と皮肉笑いを含んで言った。

土方其れを聞いて苦笑いし「・・・手厳しいねエ。」と言った。

そして夏美は「・・・この女は私しやア達姉妹からすべて奪ったようなもんだ。兄貴も其れくらいわかってんだろ？」と問い詰めていた。

そして土方はそれを聞いて一瞬悲しそうな眼をしていた。

と同時に物語は最終章へと進む。

土方「第70章。闇の夢の現実その後・・・。」

「次章も宜しくな？」

以上です。有難うございます。

第70章。闇の夢の現実その後・・・（前書き）

有難うございます。此方も久々の更新です。

尚・・・前章の後半みたいなものです。

残酷シーン等編集可能性長丁場等あり予定なので予めご了承ください。

第70章。闇の夢の現実その後・

夏美はアレから自身の部屋から出て広州達が攻め込んでいたと思われる

ロビーへと向かった。

と同時にワカバのメンツは夏美の姿を確認すると「姉さん!」「リーダー!」と喜びを叫んだ。

夏美は翡翠刀を握り締めてメンバーの前に出る。

其処には広州そして真選会そして高杉達の姿があった。

と同時に土方が夏美の姿を確認しニヤリと笑い「よオ! 久しいじゃねェか?

夏美。‘我が妹分よ。’, ‘こんな所に居やがったか。’, 「

夏美土方を見てタバコに火を灯し「・・・土方の兄貴。」と呟いた。

そして広州側にはメイランもいた。

夏美はメイランの気配を感じたのか・・・チラって見て睨みつけそして土方に視線をやった。

そして「・・・広州と手エ組んだのかい? 真選会は・・・こんな奴

らと。’」と皮肉笑いを含んで言った。

土方其れを聞いて苦笑いし「・・・手厳しいねエ。」と言った。

そして夏美は「・・・この女は私しやア達姉妹からすべて奪ったようなもんだ。兄貴も其れくらいわかってんだろ？」と問い詰めていた。

そして土方はそれを聞いて一瞬悲しそうな眼をしていた。

そしてさらに続けて夏美タバコを吸いながら「・・・何か、土方の兄貴にも裏切られた気分だよ。’、ワカバや本家以外だれも信用できない。’」とこだまが響いた。

土方はその言葉を聞き逃さなかった。

夏美はさらに追い打ちを続けるかのように「・・・広州に手エかすんだったら’、例え知り合いでも大切な人でも敵には代わりはねエ！！’、」そう言い翡翠刀を抜いて土方に向けて刃を向けた。

土方はそれを見て軽いため息をつき「・・・俺ア別にお前エとやりあいに来たんじゃないぜ?’、夏美。」

夏美はそれを只無言のまま聞いていた。だけど・・一向に刃を落そうとしない。

なぜなら、もう・・敵同士、なんだから。

夏美は無言のまま土方に向けて斬りかかった。

土方軽くため息をつき「・・しょうがねェ奴だ。」本来なら傷つけたくねえんだがな・・。」「そう言い拳銃を取り出した。

そして夏美に銃口を向けた。

と同時に夏美の顔が急にしかめた。

そしてその場にしゃがみこみ左肩を、抑え込んだ。

‘過去の傷が疼いたのだ。’、‘メイランにむごい捨てられ方をした時の傷が・・。’

夏美は顔しかめながらも心の中で・・クソ!!!!!!!!!!何で!?!どうしてこんな時に!!!!!!!!!!

するとメイランが現れてクスクス笑い「『つらいでしょ？』夏美？
此方にいらっしやいな・・・。」

夏美はそれを聞いて体が急に立ち上がり翡翠刀を持ち「メイラアア
アアアアアン！！！！」と凄い形相でメイランに向けて斬りかか
って来た。

「お前エが！！！！お前エが！！！！あんとき捨てなければ！！あん
とき・・・あんとき！！『こんな組織を作らなければ・・・父さん達
は！！！！嘗ての相棒達は！！！！！！散らずに・・・そして・・・あいつ（
有理）を
悲しませることは無かったんだ！！！！お前エが私らの『歯車を狂わ
せたんだアアアア』！！今更『姉貴^{ヅラ}分面してんじゃねえエエよ！！
！！！！』」

其処にはすっかり火炎風拳の伝承者としてワカバの復讐者としての
夏美がいた。

そして、メイランに突進していった。

そうだ！！！！この女は仇でしかないんだ！！憎め！！恨め！！そし
て・・・・駆け抜けろ！！！！！！

今までそう思いながらこいつを・・・！！！！！！

と同時にライカも入って来て「駄目だ！！相棒！！！！今そいつに刃向けちまったら！！！！」

ライカの声も届かずに・・・。

パアアアアン！！！！！！と銃声の音が響き渡った。

だが・・・夏美は無事だった。しかし、いつの間にか返り血が夏美の所に浴びていた。

そう、土方がいつの間にか夏美をかばって「・・・だ、大丈夫かよ？夏美。」とフツと笑いながら言った。

第70章。闇の夢の現実その後・・・完。

第70章。闇の夢の現実その後・・・（後書き）

有難うございます。ご覧いただき感謝いたします。

無事に更新完了致しました。

ほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ笑；

アレからメイランを見て、今までの憎しみ等が膨れ上がり、暴走しかけそうになった夏美……。しかしライカが、今それを止めようとした、だが・・・

その声が聞こえる事もなくそのすきに銃声が聞こえ・・・夏美が撃たれた・・・

はずだったのだが・・・何と・・・土方が夏美をかばったのだ。

夏美は両目を見開いて「・・・ひ、土方の兄貴？」と同時に真選会の連中もなだれ込んだ「若頭！！！！！！！」

土方はフツと笑い夏美自身の顔に手をやり「・・・ぶ、無事で良かった。お前エが本当に・・・。」

夏美は土方の手を握り「な、何で！？どうして！？庇ったんだ！！！自業自得で本来なら・・・。」

夏美の声荒げを聞いた土方はフツと笑い「・・・何言ってるんだよ。お前エには大樹達から託された、大事なもんがあるだろうよ・・・。」

┐
土方から聞いた夏美は一瞬・・・。

「姉さん！—

と笑顔で此方を向く妹有理を思い出していた。

そして・・・夏美。有理を頼んだぞ？お前だけにしよいこませるのは酷かも知れねエが・・・。—

「本当ならば、本当ならば・・・背負わせたくないんだけど・・・過酷な運命を背負わす。御父さん達を許してちょうだいね。」—

と父大樹と母楓の事を思い出した。

だが夏美は「救急班だ！！救急班を呼んでくれ！！大至急だ！！」

と叫んだ。と同時に「・・・兄貴ッ！！！！さっきはひどいこと言っただけ・・・本当は、本当は・・・兄貴の事も私しやアは大事なものの一つなんだよ！！！」と言った。

土方はそれを聞いてクシャッと夏美の頭を撫でていた。

夏美「・・・第71章。広州襲撃そして夏美をかばい土方負傷。」

「次章も宜しく頼むよ。」

第71章。 広州襲撃そして夏美をかばい土方負傷。 (前書き)

有難うございます。今回もほぼ毎回の事ですが・・汗

前回の続きみたいなものです。と同時に予め謝罪させて頂きます・・。

今回は土方さんが負傷します汗土方さんのファンの方々大変に申し訳ございませぬ! (土下座)

いやな方は予めお退き頂ければと思います。

尚此方も毎度のことではありますが長丁場残酷シーン編集課の性等あり予定なので予めご了承ください。

それでは大丈夫な方はどうぞ本編へ。

第71章。広州襲撃そして夏美をかばい土方負傷。

アレからメイランを見て、今までの憎しみ等が膨れ上がり、暴走しかけそうになった夏美……。しかしライカが、今それを止めようとした、だが・

その声が聞こえる事もなくそのすきに銃声が聞こえ・夏美が撃たれた・

はずだったのだが・何と・土方が夏美をかばったのだ。

夏美は両目を見開いて「・・ひ、土方の兄貴？」と同時に真選会の連中もなだれ込んだ「若頭！！！！！！！」

土方はフツと笑い夏美自身の顔に手をやり「・・ぶ、無事で良かった。お前エが本当に・・。」

夏美は土方の手を握り「な、何で！？どうして！？庇ったんだ！！自業自得で本来なら・・・。」

夏美の声荒げを聞いた土方はフツと笑い「・・何言ってるんだよ。お前エには大樹達から託された、大事なもんがあるだろうよ・・。」

土方から聞いた夏美は一瞬・・。

姉さん！ー

と笑顔で此方を向く妹有理を思い出していた。

そして・・・夏美。有理を頼んだぞ？お前だけにしよいいこませるのは酷かも知れねエが・・・。

「本当ならば、本当ならば・・・背負わせたくないんだけど・・・過酷な運命を背負わす。御父さん達を許してちょうだいね。」

と父大樹と母楓の事を思い出した。

だが夏美は「救急班だ！！救急班を呼んでくれ！！大至急だ！！」

と叫んだ。と同時に「・・・兄貴ッ！！！！さっきはひどいこと言っただけ・・・本当は、本当は・・・兄貴の事も私しやアは大事なものの一つなんだよ！！」と言った。

土方はそれを聞いてクシャッと夏美の頭を撫でていた。

何で・・・そんなにそんなに、平気そうな顔するんだよ！？、兄貴ッ！！

そして、救急班が来て土方を任せて夏美はメイランを睨みつけて「・・・てめエにはもうこれ以上奪わせねえ！！、もう此れにてendだ！！！」そう言い翡翠刀を抜刀し「・・・俺を怒らせた事そして今まで束縛しようとした事。捨てた事・・・。あっちで後悔するんだな！！、」

もうすっかりワカバの復讐者の顔になっていた。

メイランはその様子を見てクスと只笑みを浮かべるだけだった。

夏美自身は顔しかめて相も変わらずメイランを睨み続けていた。

「もう此れ以上こいつの好き勝手にはさせない!!—そう心の中で
呟きながら。」

「何で、こうならなきゃいけないんだ!!—」

そして、メイランに再度夏美は斬りかかりに行った。

「許さん!!!!!!!!!! てめエだけは絶対に!!!!!!!!!! 許さネエエエエエ
エエ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

俺からすべてを奪ったようなもの・・・なのに何故平然とてめエは
俺を拘束しようとする!!!!!!!!!!?

許さない!!!!!!!!!!許さない!!!!!!!!!!許さない!!!!!!!!!!

「俺は、てめエを許さねエ!!!!!!!!!!」と同時に「俺をむごい捨て方ですて尚且つ其れでも俺の居場所を少しずつ奪いつつも俺をてめエの側に置こうとする!!!!!!!!」とさらに続けて「答えろ!メイラン!!!!!!!!」

この矛盾の行方を!!!!!!!!!!そしてこの‘まがまがしい気持の行方を!!!!!!!!!!’、‘どうして俺から奪いつつもそんな平然とした顔でいられる!?許さない!!!!!!!!!!許さない!!!!!!!!!!俺はてめエを許しはしない!!!!!!!!!!’

‘今の夏美の心の中にはメイランへの復讐と言う名の心しかなかった。’

だが、メイランは「・・・だから何?飽きたものを捨てて何が悪いの?其れでもまたほしくなったら

連れて帰りたいかった。ただそれだけよ?、何がいけないの??」

夏美はそれを聞いてさらに怒りと悲しみを浮かべ「俺はてめえの・

・ ・ ・人形じゃねええええええええええ！
，「

炎と雷をまっていた。

所謂・炎殺に雷が加わった炎雷殺だ。これになった夏美はおつかない汗

そして、炎雷殺状態の夏美はメイランに向かって突進していった。

何でだ！？私達、姉妹が一体何をしたんだ！？、どうしてこうなった！？どうして！！？

チイクしょう!!!!!!!!!!!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7209h/>

「闇からの逃亡者と女子大学生探偵。」

2011年11月13日15時32分発行